
この、小さな勲章を

夢村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この、小さな勲章を

【Nコード】

N5051C

【作者名】

夢村

【あらすじ】

二人の未熟なハンター、考えすぎて大胆な行動に出ることが苦手なアッシュと、行動はするが無鉄砲なリンは平凡ながらも目標を持ち、日々を過ごしていた。そんな二人はある日、飛竜リオレウスの目撃情報を耳にする。ちょっと変わった仲間達との交流。村へやってきた二人のハンター。強力なモンスターとの戦闘。様々な出来事を経て、二人は少しずつ成長していく。ゲーム『モンスターハンター』を基にした作品。

プロローグ（前書き）

この小説の中には、やたらと説明臭い文章がありますが、著者が完璧に原作の内容を把握出来ていないため、間違いがある可能性がありますので、予めご了承ください。

後一応、無断転載や転用等のご遠慮下さい。

プロローグ

見渡す限り一面の草原。

太陽は真上にあつて、暑いことこの上ない。

そこに、2つの人影がある。

二人は体に重そうな鎧をつけたまま、この広い草原をただ、歩く。
それだけの作業を延々続ける。

…ひたすら歩く

…歩く

「…疲れた。暑いし」

少女は本日5回目の台詞を吐いた。

「そういうなって。リン。もうちょっとで村に着くから」

一緒に歩いていた20代前半ほどの男が少女を諭す^{さと}様に言う。

「それも、聞き飽きた」

リンと呼ばれた16〜18歳ほどの少女が不愉快そうに男を見る。

「やめとけ、んなこと言っても、疲れるだけだぞ」

男は言うが、その言葉でリンが黙るとは期待していない。

「じゃあ、百歩譲ってそれはいいとして、よ。何でハンターと呼ばれる私の仕事がつ！ケルビの角と皮を持って帰るだけなの？！」

緑色のガウシカテールを揺らしながら、リンは早口でまくし立てる。

この二人はハンターと呼ばれる、依頼に応じて、危険な場所にある物の採取や、有害な生物を討伐する仕事（又は、有害でなくても、生活に必要な材料となるモンスターの討伐等）を生業なりわいとしている。

今、二人は、ケルビという危険度の低い、一角の鹿の様なモンスターを討伐し終えて、帰る途中だった。

「しょうがないだろ。これも仕事なんだから」

男がいう。

「そもそも、あんたにもっと人徳つてもんがありや、こんな仕事してないのよ。」

この役立たずのバカアツシュ

リンが言うが、どうやら、とにかく口を動かしたいだけらしく、言葉にトゲトゲした感じはない。

「バカとかいうな、アツシュだ。バカリン」

「バカって言う方がバカなんです」

「ほう、そうかあ。んじゃあ、お前もバカだな」

「私は特別な」

「ガキかつ」

二人がそんな言い合をしていると、遠くに村が見えてきた。

「やった〜！やっとご飯〜！」

リンが嬉しそうに言う。

「まずは報酬の受け取りと、余った素材の換金だな」

「えー、めんど」

「それは俺がやるから、お前は先に帰って、飯作ってもらってな」

「なんか、あたしが料理下手みたいに聞こえるんですけど」

「え！？上手いの？！」

「ぶつとばすわよ」

「ハハハ、冗談だつて、でもお前も疲れてるだろうし、何よりペケの飯は旨いからな」

ペケというのは、アッシュの家で雇っているアイルーと呼ばれる人と話せる獣人族で、家事などもこなす便利なモンスターだ（そうだったものとは無縁の、野性のアイルーもいるが）。

「それは納得。早く体も洗いたいしね」

二人が話している間に、目的地の村に着いた。

「じゃね、バカアツシュ」

「後でな、バカリン」

言って、二人は別れた。

空は青く、風が心地良い。今日も、暑いながらも爽やかな日になるだろうな、と、アツシュは思った。

第1話 来訪者

アッシュが家に帰り着くと、すでに食事が用意されていた。

「あ、おかえり。どうだった？」

風呂に入った後らしく。リンは鎧を脱いで、普段着に着替えていた。

「ま、いつも通りだなあ」

「当然か。いつもと同じ事だしね。あーあ、つまんないなあ。せめてランポス狩りたい」

「ああいうのは新人ハンターに人気だから、あんまりないんだよ」

彼らは、ハンターといっても、依頼主がいないのでは危険なモンスターと戦う意味が薄れる。

又、依頼主がいたとして、その依頼主が認めない限りは1つの依頼に対し1グループ（4人）までしか受けられないので、比較的平穩なこの村では、危険なモンスターの討伐は競争率が激しい。

そのため、多くのハンターは、アッシュ達の様に比較的危険でなく、需要の多いモンスターを狩ることになる。

しかし、中には依頼主を待たずに目的のモンスターを狩りに出る者もいる。が。

「依頼待たずにモンスター狩りにいつちやうとかさ」

「またお前は…。そういう事すると、周りから白い目で見られるんだって。しかもその狩ったモンスターが誰かのターゲットだったら、恨まれる可能性だってあるしな」

「つまらないなあ」

と、いうわけで、何でも狩ってしまえばいいというわけでもないのだ。

「まあまあ、お話しはそこまでにしておかないと、せっかくの料理が冷めますニヤ」

奥の部屋のキッチンから、コックコート姿で雇いアイルーのペケが出てきた。額にバツ印の傷痕がある。だから、ペケ。

「おつ、いかん、そうだった。よし、飯だ」

「いただきます」

昼食をとった後、しばらく休憩をした。

アッシュは趣味の読書を。

ペケは、ご自慢のキッチンの整理に大忙しだ。

リンは、疲れたのか、椅子に座ったまま、うとうとしている。

暑い中、窓から涼しい風が流れて、アッシュのポポロングと呼ばれる形の黒髪が揺れる。なるほど、眠くもなる。

「眠いなら、ベッドで寝ないと、風邪ひくぞ」

アッシュが言う。この家には元々ベッドは一つしかなのだが、リンが転がり込んで来て以来、リンに占領されている。

「んー、大丈夫。ていうか、今、寝たら夜になって寝られなくなりそう」

「んじゃ、どっかいくか？」

「どこによ」

「集会所にでも。なんか面白いニュースがあるかもしれないだろ？ 帰りに飯の材料も買いにいくから、ペケも来るか？」

「はいですニヤ」

キッチンから顔を出して元気よく返事するペケと反して、リンは胡散臭げにアッシュを見る。

「ただ二ナさんに会いたいただけなんじゃないのお？」

と、リンが茶化すように言う。

二ナというのは、集会所で受付嬢を勤めている女性のこと、美人で愛想もいいので、ハンター達に人気がある。

「ニナさん美人だもんね、アッシュも狙ってるんじゃないの?」

「いやいや、あの人は優しくて、美人で、料理も上手い。あんな女性、俺にはもったいないよ」

アッシュが、本気とも冗談ともとれるような口振りで言う。

「あら、それって、まるであたしのことをいってるみたいね」

リンがおどけて言う。

「あゝ、ウン、そうそう、ソレ」

アッシュが棒読みで返す。

「アッシュさん、ちょっとぶつとばしてもいいかしら?」

「…っ、ごめんなさい」

リンが来て以来、こんな下らないやりとりが多くなった。

そんな二人を、キッチンの整理を終えたペケがニヤニヤと目を細めて見ていた。

「なによ、ペケ」

リンがその視線に気付いて、ムツとしてペケを睨んだ。

「な、なんでもないですニヤ!」

こついつ日常も悪くないな、とアッシュは思った。

結局、することがなくなつて、集会所になにか面白い話がないか、見に行くことになった。

集会所は、ここの様に小さな村にもある、ハンター達が村の外部からの依頼を受けることが出来る場所だ。

他にも、各地のハンター達の活躍や、モンスターの目撃情報など、様々な情報を得ることができる。

集会所の中は、昼過ぎとあつて、アッシュ達のように早い内に依頼を終えたハンター達が、祝杯をあげたり、次の依頼を吟味、あるいは、目的の依頼をひたすら待つ者達で溢れていた。

野蛮とも言われるハンターだけあつて、筋骨隆々（きんこつりゅうりゅう）とした男が多い。

この中では、女性であるリンはもとより、アッシュも、彼らと比べると、少々華奢に見えてしまう。

そんな二人とあつて、奇異の目で見られる事もしばしばだが、二人には全く気にした様子がない。

「リン、なんかあつたか？」

先程から掲示板に貼られた様々な記事を、吟味^{ぎんみ}するように真剣な顔で見ているリンに、アッシュが問いかけた。

「これ……」

リンは掲示板に貼られた記事を指した。

『伝説の古龍か！？ボボノ山に謎の影！！』

記事が書かれている紙には写真も貼られているが、その影とやは小さく、竜の形をしているかさえも判然としない。

「うわあ、うつさんくさいなあ」

「確かに…こりゃ本物かどうか疑わしいな」

古龍とは、遠い昔から存在するとされる竜族だが、今まで目撃情報は極めて少なかった。

最近になって、目撃情報があちこちで浮上したが、どれもはっきりしない情報ばかりで、それらは、ハンター達の間では、あまり信じられていない。

「古龍って、飛竜より強いんだっけ」

リンがアッシュに尋ねる。

世界には、竜と呼ばれるモンスターが数多く生息する。とはいえ、一口には個々の違いを説明できないほどの種類が存在する。

例えば、ランポスと呼ばれる青い小型の肉食竜は、鳥竜種と呼ばれる（ランポスは飛ぶことはできないが）。

凶暴ではあるが、ほかの種類の竜と比べると、危険度は低いとされ

る。

しかし、大したことないとあなどり、ランポスの集団に囲まれ、力尽きて命を落とす新米ハンターも少なくない。

飛竜とは、ランポスを含める鳥竜とは比べ物にならないほど危険とされる竜族で、見事討伐した暁には、一人前のハンターと呼ばれるに相応しいとされる。

一方で、彼らに戦いを挑み、多くのハンターが散った事をうけ、飛竜と名の付くものを耳にした途端、表情を強ばらせるハンターも多い。

「噂では、な。なかには『戦ったことがないからそう思うだけだ』
って言う奴もいるけどな」

「あー、それはあるかもね」

「ま、そう言った本人が戦った事があるのかも疑わしいけどな」

「なんとって『伝説の古龍』だもんね、一度はお目にかかりたいな」

「運がよけりやいつか逢えるさ。俺は逢いたくないけど」

そこまでいうと、アッシュは受付の方へ移動した。

「どうも、ニナさん」

「あら、アッシュさん、もう仕事は済んだんですか？」

二ナと呼ばれた、ギルドから支給されている制服を着た女性が、アツシュを笑顔で迎えた。

「ええ、まあ、俺にとって、あんな依頼なんて楽勝ですよ。はっはっは」

「うわ、なにあれ、紳士ぶってるつもりなのかしら？」

自分の時とは違うアツシュの態度に気を悪くしたのか、リンはペケにひそひそと話しかけた

「聞こえたらまずいから、返答は控えますニヤ」

「へえ、ペケ君は、聞かれたらまずいような事を考えてたんだ」

リンが意地悪い笑みを浮かべる。

「ニヤッ！い、いや、これは、その…」

二人のそんな会話をよそに、アツシュは二ナと会話を続けている。

「ところで二ナさん、最近、なんか面白い情報ありましたか？」

アツシュがかなり話を脱線させた後に、ようやく本題に入った。

すると、さっきまで笑顔だった二ナの表情が少しひきつった。

「面白いとは言えませんが、普段とは変わったものが一つ…」

「…へえ、どんな？」

アッシュが興味深そうに尋ねる。

「あ、確か……ハイ、これです。これはまだ、依頼としてではなくて、伝言みたいなものなんですけど……。他の方にはまだ知らせていませんから、あまり大きな声は出さないでくださいね。」

ニナがガサゴソと依頼内容などが書かれた紙の入った棚の中から、一枚の紙を取り出して、アッシュに渡した。

「ん」と、日付は昨日か……」

「ええ、今日、届いたんです」

この紙の日付が、届いた日付と近いということは、場所はそう遠くないはずだ。

アッシュはさっきとはうって変わって、真剣な顔で紙の内容を確認した。

「……………!?!」

アッシュは、しばらく紙に目を通していたが、その内容を理解した途端に、金縛りにあったみたいに、硬直した。

「なんか面白いことでも書いてあったの？」

暇をもてあましたリンは、アッシュがもってある紙を横から覗いた。そして……。

「……リオレウス……!!」

「!?!?…リ、リンさんっ!!」

「あ、おいつ!!」

リンは、内容を理解するとともに、集会所内のハンターに聞こえるには十分な声で、言った。

その瞬間、さつきまで笑顔で祝杯をあげていた者も、依頼内容が書かれた紙をまじまじと見つめていた者も、皆、一様に静まり、声の主であるリンに注目した。

皆、リンの声の大きさに驚いたのではなく、驚いたのは、リンの発した名前。

飛竜『リオレウス』!!

大型の鳥竜より数段危険とされる飛竜のなかでも、もっとも多くのハンターが挑み、散ったとされる飛竜だ。

ハンターの中には、仲間をリオレウスに殺された者も多く、場所によつては、その名前を口にすることすら、タブーとされている。

「あ、皆さんっ、これは敢えてただの目撃情報で、現在、王国騎士団が調査中でした、…ええと、もしかしたら、見間違い…かも…」

二ナが慌てて説明するが、その言葉で収まるような空気ではない。

誰もが沈黙し、中には、よほどの事があったのか、頭を抱えてガタ

ガタと震える者までいた。

そんな中、二人の男が、座っていた椅子を倒すように勢いよく立ち上がった。

二人は、どちらも体つきがよく、正に野蛮とされるハンターの象徴とも思えた。

「貴様ら、それでもハンターか？！リオレウスの名前を聞いただけで恐れおののくくらいなら、ハンターなど辞めるといい！」

金髪と黒髪の二人の男の内、黒髪の男の方が言った。

二ナは、今の発言で『最悪の空気になるのでは』と、心配したが、が…。

「全く、情けねえ！リオレウスなんて大物、滅多にお目にかかれねえぜ！てめえらもハンターなら、ビビってねえで喜ぶべきだろうが！」

と、黒髪の男に続けて、金髪の男が言った。

すると、今まで黙っていた男達が、口々に吼えだした。

「へっ！恐れる？リオレウスに？ふざけろ！願ってもない大物じゃねえか！」

「おお、ねえちゃん！場所はどこだ？！」

「へっ、これでやっと、アイツの敵を討つことが出来るぜ！」

結局、集会所の中は、リンがリオレウスの名前を口にする前よりも騒がしくなった。

そう、ハンターとは、こういうものだ。相手が強大であればあるほど、熱気を帯びる。例えそれが、完全に本心ではないとしても。

ここで恐れているのは、他のハンター達から一生、チキンハンターとバカにされ続けることになるだろう。

「皆さん、落ち着いて下さい！ですから、まだ調査中でして…！」

二ナが皆を宥めるが、それで静まる者はいない。^{まだ}

「ふう、なんとか最悪の空気にならずに済んだな。…おい、リン！」

アッシュは、『なんで、あんな大きな声を出したんだ』とリンを咎めようとしたが、リンはリオレウスの名前を睨み、固まったままだった。

「…リン？」

アッシュは今までに、リンのこんな様子を目にしたことがなかったので、少しの間、困惑した。

（やっぱり、リンはリオレウスに家族を…？）

アッシュはリンの過去を知らない。また、リンはアッシュの過去を知らない。

アッシュは、自分達の付き合いの短さを改めて実感した。

「どうした？そこのお嬢さん…さっき、大きな声を出した張本人みたいだが…」

その声にアッシュが振り返ると、先程、声を張り上げた二人だった。

元々長身ではあったが、近くで見ると、更にデカく感じる。

二人とも髪は短い。黒髪で褐色の肌をした男が、前に立って、金髪でどちらかという色の白い男がその後ろにたっている。

「ああ、あんたらか、さっきはすまない、助かった。こいつ、リオレウスの目撃情報なんて、実際に見るの初めてだから、狼狽^{ろうたい}しちゃまって…」

アッシュは、その場しのぎとはいえ、知りもしないことをべらべらと喋る事に、罪悪感を憶えた。

「あれは、俺の本心を言っただけだ…。ところで…そこのお嬢さんも、ハンターなのか？みたところ…そうは見えんが…」

アッシュとリンは、風呂に入った後から鎧を脱いでいたので、普段から鍛えていて、肌の焼けたアッシュはともかく、色白で華奢^{きやせ}にも見えるリンは、端^{はた}から見ると、ハンターには見えない。

リンは、一瞬ハツとしたあと、黒髪の男を睨み付けた。

「なに？あたしみたいなのがハンターじゃ不満？」

「い、いや、そういつつもりで…言ったわけじゃないんだ…」

黒髪の男は、先程、声を張り上げた時とは、明らかに雰囲気違った。

黒髪の男だけでなく、リンの様子も明らかに普段とは違った。

「あれな、ガンドウエルは女と話すのに慣れてないから、ああなっちゃうんだ」

「ああ、それで…」

アッシュが一人で納得するのをよそに、リンは、まだガンドウエルと呼ばれた黒髪の男を睨んでいた。

「まあ、なんだ…君の様な女性が…リオレウスなんかと戦おうなんて、思わない方が…その、良いと…」

ガンドウエルは別の国の言葉を話すように、片言で喋った。顔の色が心なしに赤くなっている様に見えなくもない。

が、この状況を見ている者からすると、その言葉は明らかに『火に油を注ぐようなもの』だった。

「『女性が』?!女だったら駄目だっていうの!?!」

「いや、違う、そうじゃなくてだな…」

ガンドウエルは、自分の言葉の真意が伝わらずに、もどかしそうだった。

「なあ、あんた、わかるか？ガンドウエルの奴、あれでも口説いてるつもりなんだぜ」

金髪の男は、ごつい体格をした割に、軽快な口調で言った。

「は？！あいつを？…というか…あれで？…いやいや、冗談だろ」

「いやいや、まじまじ」

金髪の男はニヤニヤと笑っているが、アッシュはいまいち男の話を信じられずにガンドウエルをまじまじと見つめた。

「とにかく、リオレウスは俺達が討伐する！だから、君はリオレウスのことは忘れる！」

ガンドウエルが半ばやけ気味に言い放つ。

「…あんな事言ってるぞ」

アッシュが金髪の男に意見を求めた。

「ああ、要約すると、『あなたみたいな素敵な女性がリオレウスと戦うなんてバカな事を考えちゃいけない。ここは俺に任せろ』ってところかな？」

「いや、そうじゃなくて…」

金髪の男と話が噛み合わないのと、彼が要約した台詞の胡散臭さに、アッシュは疲労を覚えてきた。

「ああ、元々、オレ達はリオレウスを討伐するつもりだったからな、問題ない」

「あのお、というか、まだいるって決まったわけでは…」

二ナが受付のカウンターから指と顔を半分だけ出して言った。

「なによ、それ…！バカにして！あんたみたいなのが、自分の腕を過信して、痛い目みるのよ！」

リンがガンドウェルを睨み付けながら言った。

今や、リンとガンドウェルの周りは、興味深そうに事の成り行きを見守る（あるいは煽る）者達で溢れていた。

「リン！いい加減に…」

言い掛けて、アッシュはリンが涙を流していることに気付いた。

「『女だから…戦っちゃいけない』…なんて…言わないでよ…。あたし…もう子供じゃ…ないん…だからあ…っ！」

集会所の中に再び沈黙が訪れた。

リンは、頬を真っ赤にしたまま、集会所を走り去った。

「あつ、おいっ？！リン！！…ペケ！追ってくれ！」

「…?!了解ですニヤ!」

先程まで所在なげにおろおろしていたペケが、リンの後を追って行った。

「すまない、あいつ、なんか取り乱しちまって…」

アッシュは、ガンドウエルに詫びたが、今度は適当な理由をでっちあげることが出来なかった。

「…いや…あれは、俺が悪かった」

「また振られたな、ガンドウエル」

「?!そ、そうなのか?!」

「いや、そこは気付けよ」

アッシュは二人のやりとりを眺めていたが、すぐにでもリンを追いかけてい衝動に駆られていた。

「悪かったな、オレの相棒がデリカシーなくて」

「いや、いいんだ」

「オレはパグフィ。もうわかってるだろうが、こいつがガンドウエル。オレ達は最近この村に着いたばかりだが、ここにはしばらくいるつもりだ。よろしくな」

パグフィと名乗った金髪の男が悠長に自己紹介するのを苛立ちなが

ら聞き、自分も社交辞令的な言葉で返す。

「アッシュだ。ここには二年以上住んでいる。わからないことがあったら、何でも聞いてくれ」

「…よろしく頼む」

二人と握手を交わすと、アッシュはいてもたってもいられなくなり。

「すまない。それじゃっ！」

とだけ言うと、全速力で集会所を飛び出した。

「…ガンドウエル、今、振られて良かったな」

「…？」

「リン！ペケ！」

「アッシュ様、こっちですニャ！」

アッシュがペケに駆け寄る。

「リンは?!」

「あそこですニャ」

リンは、農場にある栈橋の上に立ち、魚を見るでもなく、うつむい

ていた。

「……………」

アッシュは、右手を差し出し、リンの名前を呼び、肩を叩こうとしたが、心の中で、葛藤^{かっとう}する。

（俺に彼女の何がわかる？）

（リンがリオレウスの名前をただけで、あんなに動揺していたのに、俺はその理由を知らない）

（リンの涙の本当の理由を、俺は知らない）

（そうだ、俺はリンの過去を知らない。それは、リンが聞かれたがらないし、俺自身もまた、自分の過去を聞かれないからだ）

アッシュはリンと出会い、今まで自然にしてきたことを、今は非常に後悔した。

（彼女にかける言葉が見つからない…）

結局、アッシュは、声をかけられないまま、棧橋に佇むリンを眺めていた。

しばらくすると、今までうつむいていたリンが急に振り返り、笑顔で、言った。

「アッシュ、退屈。どっかいこっ」

「…！」

急な出来事にアッシュは一瞬、戸惑ったが、すぐに返事をした。

「…ああ、どこがいい？」

「楽しいところ」

「また短絡的な」

「いいでしょ、アッシュの方がこの辺の事、詳しいんだから」

「そうだな、じゃ、いくか。どっかに」

「…あつ、帰りに晩御飯の材料買うのを忘れちゃ駄目ですニヤ！」

彼女の優しさは、今のアッシュにとって、胸が締め付けられるほど痛かったが、今、自分に出来る事を考えると、笑顔でいる事くらいしか出来なかった。

また、アッシュは集会所での事を振り返り、『いつか、リンと互いの過去を語り合う日が来るだろうか』と、一人、考えていた。

太陽は燦然と輝き、虫達の鳴き声が耳障りだ。今が一番暑い時間だが、これから少しずつ涼しくなってくるだろう。

第2話 過去と亡霊

周りが真っ白な空間、何も見あたらない。何も聴こえない。

そこに、一人の男だけがいる。

しかし、男には、なんだか自分の存在が不確かなもので、この辺りに漂う空気と同化したのではないかと思える。

そこで、『ああ、これは夢なんだな』と、男は思った。

「よっ」

「・・・！」

急に声をかけられ、男が振り向くと、目の前に、一人の男が立っていた。

「調子はどうだ。アッシュ」

男が言うと、アッシュと呼ばれた男は、一瞬たじろいだ。

それもそのハズだ。目の前に立っている男は、もう、死んだのだから。

「どうつて・・・まだまださ。こんなんじゃ、お前達の敵を討つのはまだ先になりそうだ」

「俺達の敵、か。もう、そんなこと、気にしなくてもいいんだぞ」

男はいうが、アッシュはその言葉に納得しない。

「いや、そういうわけにはいかない。俺は、あの時・・・何も出来なかった。そのために、お前やフィエルナを見殺しにした。俺は・・・せめて、俺は、お前達の敵を討たなければ、生きて行けない」

「・・・それは、誰の為だ？俺達のためか？それとも・・・お前自身のためか？」

男は問う。

「・・・多分、自分のためだ」

「・・・そうか。・・・お前が自分で決めたなら、俺に文句をいう筋合いはないな。・・・でも、これだけはいう。お前の人生はお前のものだ。俺達みたいな過去の亡霊にいつまでも振り回されるな」

「・・・ああ。ありがとう」

「・・・さて、俺はそろそろ消えんとするかな」

男は言うど、身を翻ひるがえした。

「もう、いくのか？」

「ああ、元々、俺はお前に会っていいような立場じゃないしな」

「いまさら、立場を気にするのか？お前が」

「死んで、俺も丸くなったってことだな」

「ははっ、手遅れだな」

「ああ・・・違う」

二人が、ふっと笑う。周りにはなにもなかったが、不思議と辺りに響くことはなかった。

「今度こそお別れだ。じゃあな」

「ああ・・・」

アッシュは、『またな』と言いかけたが、やめた。

目が覚めると、アッシュは自分が涙を流していることに気づいた。

（変な夢を見た上に、泣いてたのか。我ながら情け無いな・・・）

リンがこの家に来てベッドが占領された後に、仕方なく買った安物のソファアから身を起こすと、急に、リンに見られていなかったか気になり、ベッドを見た。

ベッドの上には、普段の態度に似合わず寝相の良いリンがすやすやと寝息を立てていた。

ペケは、もう起きていたが、キッチンで朝食の準備をしていた。

料理中のペケは、話しかけても反応しないくらいなので、見られたということはないだろう。

アッシュが時計を見ると、起きるには少し時間は早かったが、外の空気が吸いたかったので、外を散歩することにした。

「ペケ、ちょっと散歩にいつてくる」

「はいですニヤ」

ペケの返事を聞くと、軽装で外に出た。が、出てから、ペケが料理中なのに返事をしたことに気づいた。

「ペケ・・・」

リンは、ベッドから身を起こし、キッチンに向けて、言った。

「！・・・リン様、起きてたんですかニヤ」

料理の手を止めて、じっとしていたペケは、不意をつかれてはっとした。

「どっかのバカが、体を丸くしてうなされてたら、あたしでも起きるわよ」

「・・・」

しばらく、二人は黙ったままだった。

「ねえ、ペケ。アツシュは・・・」

「・・・」

「・・・いいわ、ペケに聞くことじゃないわね」

「・・・申し訳ありませんニヤ」

ペケがうな垂れてリンに謝った。

「でも、これだけは教えて。ペケは、アツシュの過去を知ってるの？」

問われて、ペケは少し考えてから、言った。

「・・・実際には、聞かされた程度で、あまり知らニヤいのですが・・・」

「そつか・・・。ありがとう」

言った後で、ペケは自分の発言が軽率だったことに気づき、後悔した。

（あたしなんて・・・聞かされてもないわよ・・・）

「あらあ、おはよう、アツシュちゃん」

「あ、どうも、ジェインさん」

アッシュが散歩をしていると、道具屋の支度をしていた、『ちよつと変わった性別』の、体格の良い大男が話しかけてきた。

「んもう、ジェインじゃなくて、ママって呼んで」

「いや、あの・・・ここはお店じゃないですよ」

ジェインは、昼は道具屋で働いているが、夜は酒場の主人をやっている働き者だ。

噂では、何年か前まではハンターをやっていたらしい。

ちなみに、酒場で悪酔いし、ジェインに『このオカマ野郎』などと口走ったハンターが、全治一ヶ月の大怪我をしたという噂もある、恐ろしいオカ・・・人だ。

「そういうことは気にしないでいいのよお」

「は、はあ・・・」

アッシュがジェインの独特の雰囲気におされていると、ジェインは急に表情を変えて話し出した。

「あつ、そうだ、アッシュちゃん。良い話があるんだけど・・・」

「良い話？」

「そう、良い話」

ジェインは、この村の中では特に顔が広いので、色んな情報を持っている。

そして、たまにそういった情報のなかから、ハンター達にとって有益な情報売ることもしている。

報酬の高い、危険なモンスターの討伐依頼は競争率が高い。しかし、先にその情報を得ることが出来れば、その依頼を受けられる確率が上がる。

「・・・へえ、いくらですか？」

アッシュも、ジェインからの情報を信頼していて、その情報の世話になっているハンターの一人だった。

「700Z・・・っていいたいところだけど、今回はタダでいいわ。アッシュちゃん、ここを^{ひいき}贖してくれてるから」

「いいんですか？」

「もちろんよお」

実際、小さい村にも道具屋はいくつかあるが、アッシュは基本的にジェインの道具屋にしか買い物をしに行かない。

「何日か前に、そのクリフ食堂の旦那^{だんな}さん、新鮮なお肉が欲しいからって、アプトノスを3頭、この村まで持ってくるように注文したらしいのよ。そしたらね、昨日届く予定だったのに、到着したのは、アプトノスをもってくるハズだったおじさんだけ」

アプトノスというのは、草食種のモンスターだ。温厚で、臆病なこのモンスターは、食用の肉として広く知られている。

アプトノスの肉は、ハンター達に依頼して調達することは多いが、アプトノスそのものを依頼人まで届けるということは、専門外だ。

それに、まず、ここに来るまでにアプトノスが大人しくしていないだろう。きっと、注文したのはアプトノスを養殖している牧場だろうな、とアッシュは一人、考えた。

「・・・と、いうことは」

そのおじさんが自分の村に帰らなかったということとは、アプトノスがいなくなった場所はそう遠くないはずだ。

「そう、この辺でモンスターにやられたのねえ。そしたら、旦那さん、かんかん怒っちゃってさあ、自分でその原因のモンスターを狩りに行こうとしたわけ」

「はぁ・・・」

クリフ食堂の旦那さんといえば、もう50歳になろうとしているはずだ。彼も昔、ハンターをやっていたと聞くが、今となっては流石にきついだろう。

「そしたら、夜になって、旦那さんが『ニサカの森と丘』から命から戻ってきて、こういったの。『ちくしょう！ドスランポスだったか』って。本人はてっきりランポスだと思ってたのねえ」

「は、はあ・・・」

わざわざ旦那さんのセリフの部分に気合を入れてどすのきいた声で真似るジェインに少々気圧されながら、他の事を考えていた。

（『ニサカの森と丘』・・・確かに、近いな。相手はドスランポスか・・・リンと一緒に大丈夫かな・・・）

ドスランポスは、ランポスの集団のリーダーだが、ドスランポスがない場合でも、ランポスだけが集団で生息している場所もある。ドスランポスはランポスより一回り以上も大きく、危険だ。

ドスランポスの目撃情報は多いが、競争率が高く、なかなか受けられない。これはなかなか、貴重な情報だ。

「で、旦那さんも、それじゃ諦めきれないからって、今日、村長に依頼書を提出するらしいわよ」

村の中での依頼は、村長が受け持つことになっている。

「・・・なるほど、ありがとうございます。ジェインさん」

「もう、ママだつてば」

アッシュはジェインと別れた後、そろそろ朝食の時間かな、と思っただが、先程のペケのことが気になって、戻ること^{しゅんしゅん}に逡巡した。

（しかし、このまま戻らないってわけにもいかないしなあ・・・）

それに、腹も減ってきた。仕方なく、普段よりゆつくりと歩いて、帰ることにした。

結局、思ったより早くに家に着くと、とりあえず、リンが着替える最中だと困るので、家の外から声をかけることにした。

「リンー、もう起きてるかー？俺だけど、もう入ってもいいかー？」

朝早くから大きな声を出すことに罪悪感を覚えたが、後ろで主婦達が『あのひと、奥さんにつまみだされたのかしら？』とか、『きつと浮気よ、浮気』と、勝手なことを言っていたので、むしろ羞恥心の方が強かった。

しかも、返事がない。

暫く間を置いた後、リンが

「これに懲りて、二度としないって誓うなら、入っていいわよ」

と、返してきやがった。

（や、やろおおっ！！後ろの主婦達の話聞いてやがった！！）

アッシュの心の叫びと裏腹に、後ろの主婦達は『やさしい奥さんねえ』などと言って感心していた。

（しかし、ここで『ふざけるな！』なんて言おうものなら、リンに家に入ることを拒まれそうだ・・・）

「・・・」

暫くの間。そして・・・。

「に、二度としません・・・」

（ち、ちくしょおおおっ！！）

顔を真っ赤にし、うつむいてアッシュが言つと、リンが

「・・・いいわよ、入って」

と、実に演技の入った台詞で返した。

（くっ、あのちょっとした間がまたムカつく・・・！）

アッシュの心の叫びを知らない主婦達は『よかったわねえ、仲直りできて』とか『ええ、本当』などといってオホホと笑っていた。

「・・・ただいま」

「おかえり、あなた」

「誰が『あなた』だ」

アッシュがげっそりして家の中に入ると、寝巻から着替えたリンは、妻役が気に入ったのか、まだやっていた。

「結構楽しかったでしょ？」

「お前が、な」

「うん」

「・・・」

じとーっとした目でアッシュがリンを睨むが、リンは気にしていない。

「ま、まあま、ア・・・アッシュ様っ、はや・・・食べないと・・・朝食がつ、にやぶふっ！」

「・・・ペケ、声が震えてるぞ・・・しかも、言えてないぞ」

「そんニヤ、事・・・にや、にやぶっ！」

「ペケ、ウケすぎだっば」

「・・・」

ペケが落ち着くのを待ってから、三人で朝食をとることにした。

（しかし、良いように考えると、気まずい雰囲気にならずに済んだな・・・）

朝食の最中、アッシュはそんなことを考えていた。

「ところで、アッシュ、なんかいい情報でもあった？」

「！」

（コイツは、また、なんでこういうときに勘がいいんだろうか・・・）

アッシュはさつき、ジェインから情報をもらったのはいいが、リンにその事を話そうかどうか迷っていた。

（リンとは今までにランポスを討伐する依頼を何回かこなしているが、今度の相手はドスランポスだ・・・）

リンは、モンスターとの戦闘の際、深追いしすぎる傾向があるという事をアッシュは理解していた。

（ランポス程度ならそれでもどうにかなるが、ある程度大物になると、相手の動きを読むことが重要になる。リンにそれができるか・・・）

「その様子じゃ、なにかあったようね。しかも結構、大物。でしょ」

リンがにっとして言う。

（こいつは、ほんと・・・）

アッシュは、リンの勘の良さに半ばあきれながら、『話すしかないか』と決心した。

（それに、話さなければ、それがリオレウスの依頼なんじゃないかと疑われそうだしな）

リンのリオレウスへの執着は相当のものだろう、と、アッシュは予想していたし、リンはアッシュが『リオレウスの討伐はまだ早い』と制止するのをわかっているはずだ。

「・・・ジエインさんからの情報で、『ニサカの森と丘』にドスランポスが出たらしい。それで、依頼主が今日、依頼を集会所に提出するんだと」

ため息混じりに説明すると、予想通り、リンは食いついた。

「えっ?! ドスランポス?! そりゃ、受けるしかないでしょ!」

(・・・やっぱり)

なぜリンがドスランポスに食いつくかという点、リンが最近、装備しているものに理由がある。

リンが装備している防具は『ランポスシリーズ』と呼ばれている、『ランポスの皮』を主体としたものだが、具足はまだ『ハンターグリーブ』と呼ばれる、駆け出しハンター向けの装備だ。

そして、具足の『ランポスグリーブ』をつくるためには、『ドスランポスの皮』が必要になる。

まあ、早い話が『ドスランポスの皮』が欲しいのだ。

「その前に、頭の防具を作れ」

アッシュが、無駄とわかってリンに言う。

「ダメ、頭の防具はつけないの。せつかくの髪型を変えないといけないでしょ」

(・・・やっぱり)

アッシュはため息をついた。

結局、観念して、リンに戦闘に関する幾つかのアドバイスをした後、村長のところにいくことにした。

「もう起きてるわよね」

「大丈夫だろ、年寄りには朝が早いからな」

この村の村長の正確な年齢を二人はしらなかったが、見た限り、かなりの年齢だろう。

「村長って、昔、ハンターだったんだっけ？」

「らしいな。聞いた話だけど・・・」

「ほほっ、ワシの話をしとるんかのう？」

「ぬあっ?!」

気づくと、目の前に村長がいた。

「ど、どうも・・・おはようございます」

（いつからいたんだ？）

村長は、いつもは集会所の近くか、自宅の近くにいるが、今、アッシュ達がいるのは、先程のジェインの道具屋の近くだった。

「あら、おはよう、村長」

リンが、友人に出くわしたような軽口で挨拶する。

「お前は・・・もうちょっと丁寧に挨拶しろ」

アッシュは一応、そういうが、いつものことなので、とりあえず、言うだけ。

「ほっほっほっ、気にせんでええ。・・・ところで、ワシに何か用かう？」

「あ、うん。村長、依頼を受けたいんだけど、依頼書ある？」

「ほっ、こんな朝早くから・・・感心なことじゃ」

「でしょ」

リンが調子よく笑う。

「依頼書じゃな・・・。ほれ、これじゃ」

渡された依頼書の束を、二人はひとつずつ確認していく。が・・・。

依頼書に書かれた内容は、昨日、アッシュ達が受けたような依頼ばかりだった。

「ないな……。ランポス10頭討伐ならあるけど……」

アッシュが、リンにひそひそと語りかける。

「やっぱりちょっと早かったのかしら」

「うーん、でも、早めに来ないと、他のハンターにとられる場合もあるしなあ」

「ちょっと待ってみる？」

「そうするか……」

「どうかしたかの？」

ひそひそと話す二人に、村長が問いかける。

「ああ、いえ、このほかに依頼は？」

「……ないが？さては、何か情報を得てきおったの？」

（……ばれたか）

まあ、朝早くから来て、『他に依頼はないか？』なんて言えば、当然といえば当然だ。

「よいよい、『先に情報を得てから来てはいかん』なんというルー

ルはないからのう。しばらく待つとよい」

ほっほっほっ、と、村長が笑う。

「じゃあ、そうさせてもらいます」

そういつて、アッシュとリンは、しばらく村長の家の外にある椅子に座って、村長の話を聞かされることになった。

「・・・そこには、伝説の古龍が住んでいるとされていてな、ワシも一度、行った事があったんじゃ」

「へえ、それで、古龍には会えたの？」

リンは、村長の話を興味深く聞いているが、アッシュは、その話を聞くのはもう4回目なので、適当に聞いていた。

「いや、ワシが行った時にはそれらしきものは見あたらなんだ。やはり、あれを見つけるのはそう簡単にはいかんのう」

「へえ・・・」

と、そこまで話をしたところで、噂のクリフさんが、血相を変えて村長に駆け寄ってきた。

「ハアッ、ハアッ！！村長！いら・・・依頼を・・・！！」

（・・・来た！）

クリフさんは、事情を説明すると、手続きを済ました後の依頼書を、

村長に渡した。

「おぬし達の目的はこれか？」

「？」

クリフさんは、何の話かわからず、訝^{いぶか}しげに村長とアツシユを見ていた。

「ええ、では早速、受けさせてもらいます」

言って、アツシユが、依頼書を受け取る。

「おお、アツシユ、あんたが受けてくれるのか?! なら安心だ! あのクソ野郎をぶっ飛ばしてくれ!!」

クリフさんが興奮した表情でまくしたてる。

「ほっほっほっ、気をつけてな」

「ええ、いってきます。よし、いくぞ、リン」

「はあい。じゃあね、村長、クリフさん」

「おう! がんばってな! リンちゃん!」

二人に見送られ、アツシユとリンは目的の場所へむかうが、アツシユが『リンは今回の依頼をちゃんとこなせるか』と心配していることに、リンは気づかなかった。

そしてまた、アッシュは、リンが『早く自分の実力を認めさせよう』と焦っていることに気づかなかった。

第3話 賭け

『ニサカの森と丘』に着くと、アッシュとリンは、安全な場所を探し、早速テントを張ることにした。

ケルビなど、あまり危険でないモンスターの狩りの場合は、テントを張らないことも多いが、ドスランポスなどが相手になると、そうも言っていられない。

場合によっては、負傷者が出る場合もあるし、目的のモンスターが見つからない場合もある。そういったときのために、テントを張ることは必要なのだ。

「もう最初からここにテント張ったままにしていればいいのに」

と、リンが愚痴るが、狩りをする場所はここだけではないので、そうもいかない。それに・・・。

「そついうな、これもルールだ。破ると罰金ものだぞ」

用もない場所にテントを張ったままにすると、他のハンターがテントを張る場所が減る。

なので、誰も居ないテントが発見された場合、数日以内に誰も戻ってこない、ギルドからの厳罰をくらうことになる。

「ハンターってのも、自由じゃないわね」

「自由ねえ。自由ってのは、人一人の価値で決まるもんじゃないか

らな」

「あら、珍しく賢そうなこというわね」

「ははは、俺はいつでも賢いぞ?」

「・・・はいはい」

そんなやりとりをしていると、テントが完成し、やっと、目的のドスランポスの搜索を開始することにした。

「んゝ、ここはいつ見ても景色が綺麗ねえゝ」

テントを張った場所からだと、そこには広大な自然が広がっていた。

大地には草木が茂り、空には鳥達が自由に羽ばたき、川ではアプトノスの親子が水を飲んでいる。

『まさに自然』といった光景だった。

しかし、こんな自然だからこそ、生きていく上での掟は『弱肉強食』だ。

弱い者は狩られ、強い者はそれを喰らう。

弱い者たちは生き延びるために知恵をつけ、ある者は素早い足を、ある者は身を守る毒を、ある者は他の物と同化する姿を、といったように、様々な方法で生き延びている。

「準備は出来たか？」

アッシュがリンに確認する。

「もちろん」

「よし、出発だ！」

・・・とは、言ったものの・・・。

目的のドスランポスを見つけるまでにそう体力を使っではいられない。

二人は、走るでもなく、離れないように歩きながら、森の方から探すことにした。

「いないわね・・・」

リンが、モスと呼ばれる苔をはやした豚のようなモンスターが三匹で行進する様を横目で見ながら、言った。

辺りは木に囲まれていて、昼でも少し暗い。

これが、夜になると真っ暗になり、出られなくなって遭難する場合もある。

「夜までには見つけ出さないと・・・」

アッシュが言う。まだ日が落ちるまで大分あるが、過去に、間違った目撃情報の依頼を受けて、一週間、キャンプをして暮らしたこと

がある。

そのときも、この『ニサカの森と丘』だったが、やはり、夜の森のなかは暗く、搜索できるような状態じゃなかった。

（まあ、あのクリフさんがあそこまで血相変えるくらいだから、間違いはなさそうだけど・・・）

しばらくドスランポスを捜し、ついでに必要な物の採取をした。

が、辺りにはランポスの姿も見当たらない。

「んー、こっちじゃないのかな」

リンが言う。

「丘の方にいってみるか」

結局、コースを変更して、丘の高い所を捜すことにした。

「うひゃっ」

森を抜けて、丘の方へでると、リンが急に変な声を出した。

それもそのはず、丘には先程捜してもいなかったランポスがうじゃうじゃといたからだった。

「・・・なんかあたしたち、バカっぽい？」

「そついう時もあるだけだって」

それだけ言っと、二人は一斉に武器を構えた。

アッシュは、『ゴーレムブレイド改』と呼ばれる、人の身長以上あるのではないかと思われるバカでかい大剣を。

リンは、『オーダーレイピア』と呼ばれる、昔、騎士から授かった双剣を。

「ランポスがいるってことは、ここでこいつらを狩ってりゃ、そのうち出てくるって事でしょ！」

「ああ、でも油断はするなよ！リン！」

「了解っ！！」

二人は疾走し、ランポスの群れへ突っ込んだ。

しかし、リンは心の中には迷いがあった。

（アッシュは、あたしの事を信用していないのかな……。……いや、こんなじゃダメだ！前を見る！）

そう、自分に言い聞かせる。

「……！？」

一頭のランポスが二人に気づく。

「ギエエエツ！ギエエエツ！」

二人に気付いたランポスが、敵の存在を仲間に知らせるために叫ぶ。すると、今までぼーっとしていたランポス達も二人に気づき、威嚇する声をあげた。

（とにかく！こんな依頼なんかで、もたもたしてられない・・・！！）

「先手必勝！！！」

リンが近くにいたランポスに突っ込み、踊るように回転しながら連続で斬撃を浴びせる。

ズザザアツツ！！

「ゲギエエエツ！」

ランポスが苦痛の叫び声をあげて怯む、が、それだけでは絶命しない。

「まだまだあつー！！」

リンがランポスに止めを刺そうと両手の剣で突きを繰り出す。

「バカ！一回離れる！」

アッシュは、深追いするなど注意しておいたが、リンは攻撃をやめようとしなない。

攻撃は最大の防御、とはいうが、それは必ずしも上手くいくわけではない。

下手をすると、止めを刺した方がいいが、同時に痛い反撃を受ける可能性もある。

ドシュッ!!

リンの突きはランポスの心臓を突き刺し、ランポスは断末魔の悲鳴と共に倒れた。

(ふう……。どう？アッシュ)

リンは『あたしもやるでしょ？』と、アッシュを見るが、アッシュの表情は険しかった。

(よくない傾向だな…)

アッシュは内心、焦っていた。

(『確実に間違った戦い方』とは言わないが、あのままだと、ドスランポス相手にも同じ戦い方をするかも知れない…)

ドスランポスは、目を潰したり、比較的脆い腹部^{もろ}などを攻撃しない限りは、ランポスのように軽い攻撃でも怯む、とは限らない。

つまり、深追いすると、反撃をもらう可能性が非常に高い。

また、そんなアッシュを見たリンは、複雑な心境だった。

（なによ、自分の意見が取り入れられなかったからって、怒ってるの？）

リンは、今回の依頼で問題なくドスランポスを倒しさえすれば、アツシユも少しは認めてくれるのでは、と思っていた。

（た、確かに悪いとは思うけど…、そんなにゆったりやってられないわよ…）

リンは自分に言い聞かせる。

リンは、リオレウスと戦う事への焦りと、今朝のアツシユの事で、色んな事に注意がいなくなっていた。

さつき行動は、アツシユの注意を無視したのではなく、冷静に判断が出来ずに、体が動いた結果だった。

（反省会は後だ！今はドスランポスの討伐に集中しろ！）

アツシユは、迷いを振り払うように、ランポスに駆け寄り、停止。即座に大剣を構える。

ランポスがステップで回避しようとする。

が、アツシユも同じ方向に移動し、先回りしていた。

「ギッ?!」

（隙だらけだ！これなら当たる！）

アッシュは、そう確信すると、引きずるようにして持っていた大剣で思い切り斬り上げた。

隙は大きい、その分、当たれば威力も大きい。

ズバアツツ!!!

「グッ・・・!!」

ランポスは断末魔の悲鳴をあげ終える前に、体を真つ二つに裂かれた。

（よし、一撃！）

アッシュはランポスが真つ二つになるのを確認すると、次の獲物を求めて走り出した。

アッシュは一撃必殺の攻撃で。

リンは敵に休む暇を与えない連撃で。

二人は、各々（おのおの）の判断でランポスを討伐していった。

数にして8頭。二人は今のところ無傷。

ドスランポスが来るまでの肩慣らしとしては上等。

と、言いたいところだが…。

二人の動きは、いつもの二人を知っている者からすると、明らかにぎこちなかった。

お互いにフォローしあうこともなく、ただひたすらランポスを狩る。まるでパーティを組んだばかりのハンター達のようなようだった。

（くっ、なんなの?!このもやもやした気持ち…）

リンは、戦闘の最中にも関わらず、集中出来ずにいた。

（アッシュが…アッシュが悪いんだっ!あたしの事を認めてくれな
いから…!あたしにだけ、過去の事を話してくれないからっ!）

本当は、それだけではないという事を、リンも理解しているが、気
付かないフリをする。

（…でも、過去の話をしていないのは、あたしも同じだ…）

色んな事を考えれば考えるほど、気持ちは複雑になり、動きが鈍る。

（駄目だ駄目だ!考えるな!）

迷いを振り払いたくて、リンはランポスを斬り付ける。

しかし…。この時、リンは周りに注意を払うことを怠っおこたていた。

「バカっ、リン!後ろだ!」

「?!」

リンは、アッシュの声に反応して後ろを振り返るが、そこにはランポスが、今まさにリンに飛び掛ろうとしているところだった。

「!!」

（避けきれない?!）

リンがそう判断した瞬間…。

横から、アッシュの大剣が飛んできて、ランポスの体を上下に分けた。

「?!」

ランポスは悲鳴を上げる間もなく絶命する。

投げられたアッシュの大剣は、勢いをつけたまま岩に突き刺さった。

「油断するな!」

アッシュの声。

「ア…アッシュ、ありが…」

リンが『ありがとう』と言い掛けた瞬間、アッシュは横から飛び掛ってきたランポスに突き飛ばされた。

「ぐっ…?!」

アッシュは数メートル転がると、自分を突き飛ばした相手を睨み付けた。

「・・・ちっ、人の事・・・いつてられないな」

ランポスよりも一回り以上大きな体、巨大な爪、鮫の背ビレを彷彿とさせるオレンジ色のトサカ・・・。

「っ、ドスランポス！」

言っと、リンはドスランポスに向かって一直線に駆け寄る。

（アッシュは今、無防備だ。あたしがやらなきゃ…！）

「リン、敵の動きをよく見ろよ！」

アッシュはそう言っと、ドスランポスに背を向け、岩に突き刺さった大剣に向かって走り出した。

「言わなくてもっ…」

（くそっ！情けない！）

交代するようにリンとすれ違いながら、アッシュは自分の無様な姿を恥じた。

（剣まで距離がある！戻るまでに何事もなくあってくれ！）

誰にともなく、そう祈りながら、アッシュは大剣の刺さった岩めが

けて走る。

「……!!」

一旦停止したアッシュの前には、ランポスが3頭、行く手を阻むように立ちふさがっていた。

「っ、畜生……!」

「だあああっ!!」

リンがドスランポスに斬りかかる。

「!」

ドスランポスはそれを左へステップしてかわ躲す。

攻撃を避けると、ドスランポスはリンに噛み付こうと口を大きく開く。

「くっ!」

リンは、ドスランポスの右側へ前転して、その牙を回避する。

（敵の動きを見る!焦るな!）

リンは、アッシュに聞かされた大型モンスターとの戦闘法を反芻するようはんすうに心の中で唱える。

（今は、余計なことは忘れるんだ！）

ドスランポスの動きを見ながらも、周りのランポスが襲いかかってこないか横目で確認する。

瞬間、ドスランポスが、また噛み付こうと口を開く。

「……来いっ！」

リンは左手の剣をドスランポスに噛み付かせようと、剣を肩の高さで水平にして突き出す。

左手の剣に噛み付いている間に、右手の剣で急所を突くつもりだった。

しかし、ドスランポスは、左手の剣に噛み付く寸前で器用に頭を捻^{ねじ}り、軌道を変更して、リンを狙う。

「……！」

リンはそれを避けようと慌てて左へ体を移動するが、一瞬間に合わず、右肩に噛み付けた。

「っ！？」

ドスランポスはリンの肩に噛み付いたま離れようとしない。

「……っの……！離れなさい……！」

リンは左手の剣でドスランポスの頭を刺そうとするが、力が入り切らず、ドスランポスの鱗に弾かれた。

ギギギッ・・・！

鎧が変形させられる音がリンの耳に聴こえる。

「ぐっ、あ・・・離せ、離せええっ！！」

リンはひたすら剣でドスランポスの頭を斬りつけ続ける。

リンには、それに効果がないという判断すら困難なくらい、動揺していた。

「リン！目を狙え！」

遠くからアッシュが叫ぶ。

その時、アッシュは3頭のランポスを躲し、大剣を引き抜いた後だった。

「！」

アッシュの声にハッとしたリンは、左手の剣で、ドスランポスの右目突き刺した。

ドスッ！

「ギエエエッ！？」

ドスランポスは、悲鳴をあげ、仰け反った。

「・・・っ!!」

見ると、リンは噛み付かれた右肩から血を流していた。

（くそっ、剣をもてないほどじゃないけど・・・あまり右腕に力が入らない・・・）

「・・・こいつっ!!」

リンが追い討ちを掛けようと、剣を構える。

「よせっ！リン!!」

アッシュが制止するが、リンは引かない。

（駄目だ！頭に血が登っている！）

アッシュの悪い予感があたり、リンはドスランポスに斬りかかろうとする。

ドスランポスは、片目でリンを睨みつけると、もう一度噛み付こうと、口を開く。

（まずい！あれじゃ、リンには分が悪い!!）

双剣は連続で攻撃してこそ効果がある。急所でも狙わない限り、一撃ではドスランポスを倒すことは出来ない。

アッシュは、焦る気持ちを抑えて、冷静に判断する。

（走って間に合うか?!・・・いや、無理だ!じゃあまた剣を投げるか・・・?!）

しかし、リンとドスランポスはアッシュの目の前、直線上にいる。

剣を投げつければ、確実にリンにも当たる。

（くそっ!!俺は!また仲間を見殺しにするのかっ!?!）

アッシュは自分の無力さに脱力感を覚えた。

「・・・?!」

瞬間、ドスランポスに斬りかかろうとしていたリンが体勢を崩し、右膝をつく。

すると、運良くドスランポスの攻撃を回避できた。

「!」

ドスランポスは無防備。

リンはすかさず右手の剣を置き、左手の剣を両手で構えてドスランポスの腹を突き刺した。

ドシュッ!!

「グギエエエッ!!」

「くっ!!」

リンの右腕に痛みが走る。

ドスランポスは悲鳴をあげると、森の方へと逃げていった。

ランポスたちもそれに続いて森の方へと走り去った。

「リン！大丈夫か？！」

「ア、アッシュ……」

リンは、アッシュに怒鳴られると思い、身構えた。

「良かった……無事で……」

言っと、アッシュは今にも泣きそうな顔をしていた。

「……え？」

アッシュのこんな表情をリンは見たことがない。

「っ……。リン！反省会は後だ！追っぞ!!」

アッシュは顔が見えない様に後ろに向き直って言った。

「う、うん！」

リンが、剣を拾い上げると、二人はその後、無言でドスランポスを

追った。

二人は、先程通ってきた森に戻ってきた。

「確か、こっちだったよな・・・」

ここで、やっとアッシュが口を開いた。

「うん・・・」

リンが力無く返事をする。

「グアアアアッ！！グアアアアッ！！」

どこからか、ドスランポスの泣き声が聴こえた。

「・・・！！しまった！！」

「・・・？」

アッシュが焦るが、リンにはその意味がわからない。

「リン！一旦逃げるぞ！！」

「え、なん・・・」

「ドスランポスが仲間を呼んだ！囲まれるぞ！！」

言うが早いか、アツシュが駆け出す。しかし・・・。

「ギエエエツ!!」

アツシュ達が来た道には既にランポスが数頭、威嚇するように鳴き声をあげていた。

「くっ・・・!!」

「アツシュ!!」

リンの言葉にアツシュが反応し、周りを見ると、既にランポス達の包囲網が出来上がっていた。

その数、ざっと20頭!一応剣は持てるが、右肩が思うように動かないリンと、無傷だが疲労が見え出したアツシュとでは、分が悪すぎる。

ドスランポスは、勝ち誇ったようにも見える余裕な足取りで、群れの奥に現れた。

「アツシュ・・・」

リンが弱々しい声で言う。

「リン・・・そんな声を出すな」

自分達が絶体絶命の状態にあると悟ったリンは、もはや武器を構えることすら出来なかった。

「ごめん・・・ごめんね、アッシュ」

「やめろ!!」

「・・・っ」

（考えろ!!この状況、どう打開する・・・?!）

アッシュはひたすら考える。

（閃光玉は持つてきていない・・・。せめて、仲間が入れば・・・）

考える・・・。

（仲間・・・!?そういえば・・・!!）

「だあああっ!!」

「え?!」

言っと、アッシュは道具を入れた袋から、小タル爆弾を取り出し、火をつけると、なるべくキャンプの方向へ向けて投げつけた。

少しの間、そして・・・。

爆音!

「グエツ?!」

それを直視していたランポスたちは、ビクリと反応するが、それだ

けだった。

「・・・アツシュ？」

「リン！これは『賭け』だが・・・、時間を稼ぐぞ！！」

「え？」

言つと、アツシュは近くで爆弾に注目していたランポスを斬り付けた。

ズシャッ！！

「ギエエッ！！」

一撃でランポスを仕留めると、アツシュは他のランポス目掛けて走る。

「どういつこと？！アツシュ！！」

リンはアツシュに問う。

しかし、アツシュはその問いに応じない。

アツシュはひたすらランポスを斬り続ける。

それでも、数はあまり減らない。

「・・・バカアツシュ！！」

リンは悪態をつく、左手しか自由に動かない状態で近くのランポスを斬りつけた。

二人は、ランポスを数頭、撃退し続けるが……。

「ぐっ！……ハアツ、ハアツ……この野郎っ！」

アッシュが、ランポスに突き飛ばされたあと、受身をとって悪態をついた。

（くそっ！俺はともかく、リンは長くはもたない！！）

リンは流血が酷い。それに、今にも貧血を起こしそうなほど顔色が悪かった。

（あたしは、死なない！こんなところでっ！！）

リンは自分を励ましながらランポスを撃退し続ける。が……。

「っ！？」

リンが急に、がくつと体勢を崩し、膝をつく。

「！……リン！？」

アッシュがリンに駆け寄る。

「はは、ごめん、アッシュ、あたし……もう、無理かも……」

「おい、バカリン！劇みたいな事やってる暇はないぞ！諦めるな！」

アッシュが近寄ってきたランポスを斬り払いながら言う。

「はあっ・・・アッシュ、逃げて・・・」

「やめろ！ふざけるな！！」

アッシュはリンを叱咤^{しった}する。

「ギエエエツ」

ランポス達の群れがじわりじわりとアッシュ達に歩み寄る。

「逃げなさい！！」

「いやだ！俺達は死なない！！俺は・・・俺は・・・！！」

アッシュは駄々をこねるように言う。目には涙が浮かんでいた。

「俺は・・・もう、絶対に大切な仲間を見殺しになんてしない！！」

瞬間、一頭のランポスが二人に飛び掛かる。が・・・。

ドスッ！！

「ギエツ?!」

ランポスが、巨大な槍に体を突き刺され、停止する。

「おいおい、なんの演劇よ、コレ」

アッシュ達の耳に、聞いた事のある声が響く。

「・・・?!パグファイか?!」

「おおよ、ガンドウィルも一緒だぜ!」

「・・・ああ」

ガンドウィルが静かに言う。

アッシュの『賭け』とは、他のハンターがここに来ている可能性を賭けたものだった。

だが、それは無謀な賭けではなかった。

朝、二人が依頼を見た時にランポス十頭の討伐依頼があった。

その場所はこちら。

そして、この二人が到着したわけだ。

「爆音がしたんで来てみたらこれだ。お二人さん、仲が良いことで」

「っ・・・!!」

「バツ、バカッ!!」

アッシュとリンが真っ赤になってパグファイを睨む。

「はっはっは、照れんな照れんな！」

「・・・話は後だ。・・・いくぞ！パグファイ！！」

ゆつたりと話していたガンドウィルは、かっと目を開くと、大剣を構えてランポスに駆け寄った。

「おおっ！！」

パグファイがそれに続く。

この二人の戦闘スタイルは、二人同時に行動することのようだ。

敵の攻撃力を見て、低いと判断すればガンドウィルが前衛を勤め、パグファイがバックアップする。

多分、敵が大型モンスターだった場合や、複数のモンスターから一斉に攻撃されそうな場合は、パグファイが前衛で防御を勤めるのだろう。

「ううおおおおおおおおおっ！！！！」

ガンドウィルが大剣を水平になぎ払う。

ズズズザアアアアアアアツ！！

「ギエエエエエツッ！！」

たちまち、軌道上にいたランポスが3頭、体を二つに分離させられた。

「っ、なんてバカ力だ・・・!!」

アッシュがガンドウィルの想像を絶する一撃に、畏怖の念すら込めて言う。

「凄・・・」

リンが言うと、ガンドウィルの頬が少し赤くなった。ようにも見えた。

ガンドウィルの右から、ランポスが飛び掛る。

「むっ!!」

ガンドウィルは左に剣を振り終えた後で、今から右に振っても間に合わない。

ズドオッ!!

「グギイツ!?!」

「残念っ!!」

パグフィの槍はガンランスと呼ばれる、爆薬を仕込んだ物だった。

ランポスは黒煙を上げながら吹っ飛んでいき、着地すると、動かなくなった。

「おい!お前らの目的はアイツだろ?!ザコは任せて、はやくやっ

「ちまえ!!」

パグフィが叫ぶ。

「!・・・ああ!!」

アッシュが大剣を構え、ドスランポスを睨みつける。

「・・・待つて」

「リン・・・?」

リンが立ち上がり、剣を構える。

「・・・あたしがやる」

「?!なにいつてるんだ!!」

「おいおい、お嬢ちゃん!あんた貧血で今にも倒れそうじゃねえか!!」

「無理をするな!」

三人が一斉に制止する。しかし、リンは引かない。

「・・・お願い」

「リン・・・」

アッシュは『やめろ』と言おうとして、やめた。

きっと、ここで止めたら、リンは一生アッシュを恨むだろう。

アッシュは恨まれるのが怖いのではない。

情けないことだが、アッシュはリンに避けられるのが怖いのだ。

「・・・勝てよ」

アッシュはそれだけいうと、リンを見送ることにした。

「・・・当然！」

リンは、そういうとドスランポス目掛けてふらふらと歩いていった。

「おいおい！正気か！アッシュ！！」

「無理だ！やめさせる！」

「・・・」

二人がアッシュを非難するが、アッシュは聞かない。

覚束ない足取りで、リンはドスランポスと対峙した。

ドスランポスは二人の意外な乱入者に驚いていたが、目の前の相手がリンだとわかると、余裕の表情になった。

こいつが喋れるとしたら、『なんだ、この死にぞこないか』とでも言ったかもしれない。

リンはじっと、ドスランポスが動くのを待った。

「・・・」

「・・・ギアッ!!」

全く動こうとしないリンに、ドスランポスが痺れを切らしてリンに噛み付こうとした。

（アンタには、礼を言わないとね・・・）

リンは、貧血で狭くなってきた視界の中でドスランポスを捉えながら、心の中で礼を言った。

（アンタのお陰で、アタシは少しだけど、成長できた・・・。アツシユの過去も、少しだけど、分かった・・・）

「っ!!」

ドスランポスの牙を必要最低限の動きで右に避けて回避する。

はたから見ると、貧血でよろけただけでも見える。が、リンは確実に相手の動きを読んで回避していた。

リンが左手の逆手に持ち、右こめかみ辺りで構えた剣でドスランポスの残った左目を突き刺した。

ズッ!!

「ギエエエエ・・・!!」

リンがすぐに剣を引き抜く。

「ツツツ!!」

ドスランポスが仰け反る。

リンは続けて、踊るように右回りに回転し、剣を回転させて突きの姿勢をとると、右手の剣を捨て、左手を両手で構え、の剣で一氣に心臓を貫いた。

ドシュツ!!

「グ・・・ギエツ!？」

(ありがとね・・・)

ドスランポスは、その場に倒れ、血の泡を吹きピクピクと痙攣していたが、やがて、動かなくなった。

「!!!!・・・あいつ!!」

「むう!!」

二人が歓声をあげるでもなく言う。

「リン・・・!」

アッシュがリンに駆け寄る。

「・・・アツ・・・シュ」

リンは、崩れるようにしてその場に倒れた。

暗くなる視界の中で、リンは泣きそうなアツシュの顔を見つけた。

「兄・・・さん」

「あれ・・・」

リンが目を覚ますと、そこは家のベッドの上だった。

「リン・・・!」

目の前には、アツシュが心配そうな顔でリンの顔を覗きこんでいた。

「アツシュ・・・?」

体を起こす。

記憶が混乱している。リンは頭を押さえ、ゆっくり、ゆっくりと思
い出す・・・。

「あた・・・し・・・」

（そうだ、あたし・・・）

アッシュが心配そうな顔をしている。

「ア・・・アッシュ・・・」

リンは『ごめんね』と言おうとしたが、アッシュの声に阻まれた。

「リン・・・良くやった！最後の動きは見事だったぞ！」

アッシュはリンを褒めた。

「え・・・?!」

事の始まりは、リンが無鉄砲に突っ込んだことからだ。

リンは、怒られて当然だと思っていたのに、アッシュはそうはしなかった。

「・・・っ!」

（なんで怒らないのよ・・・っ、バカアッシュ!!）

リンは、心の中で悪態をついたが、色んな思いが溢れ出してきた、急に泣き出してしまった。

「うつ・・・っ・・・」

「・・・リン？」

「うめ・・・ん、ごめんね!・・・アッシュ!」

「え!？」

気づくとリンは、アッシュに抱きついていた。

「お、おいっ!!ペケがみてるって!!」

「あ、あたし、バカで!ア、アッシュの足、引っぱって……!

「リン……」

「強く、なるから……!!あたし、もっと……強くなるから!」

「……ああ」

リンを抱き返すことが出来ないまま、アッシュはつぶやいた。

「一緒に、強くなろうな……」

アッシュはそう呟くと、リンの頭を撫でた。

(なにやってんだろうな、俺には……目的があるのに……)

リンの泣く姿を眺めながら、アッシュは複雑な気持ちだった……。

第4話 幸福な休息

ドスランポス討伐から数日・・・。

リンの右腕の調子がよくなってくると、二人で集会所に行くことにした。

「うわあ、久しぶりに来てみたら・・・うるさっ」

リンが言うように、集会所の中はいつものように騒がしかった。

この日は朝早かったので、ハンターたちは、これから依頼を受けてそれぞれ狩りに行く。

だが、朝早くから酒を飲んで盛り上がっている連中もいた。

『もしかしたら今、帰ってきたのかもしれないな』、とアッシュは一人思った。

「ええっと・・・」

「・・・？」

リンは小走りに掲示板のところへ移動する。

「えーっと、あつ！あつた！」

「・・・なにが？」

アッシュがリンの傍に寄っていくと、そこにはドスランポスを討伐した後に撮った写真が貼ってある記事があった。

この掲示板には、ある程度大物のモンスターを討伐すると、その記事を貼られる。

「ちっさいなあ」

アッシュたちの記事はさほど大きいものではなく、文章も『アッシュ達がドスランポスを討伐した』程度のことしか書かれておらず、リンには不評のようだった。

その掲示板の隣にある、近隣の村で活躍したハンターの記事を貼る為の掲示板には、どこだかのハンターが一人でダイミョウザミを3体討伐したことなどが貼られてあった。

「そりゃ、ドスランポス倒しただけだし」

アッシュが『当然だ』といわんばかりに言う。

よほどのモンスターを討伐でもない限り、この掲示板には一時的にしか記事は貼られない。

この写真も、そのうちなくなるだろう。

掲示板の上には、この村で功績を挙げた歴代のハンター達の活躍がでかかかと貼られてあった。

「っていつか・・・あたしが写ってなあい！」

リンが不満そうにいう。

「ははは、仕方ないだろ、倒れてたんだから」

アッシュが声だけで笑いながら言う。

アイルーに撮影してもらった写真には、ドスランポスの死骸と、後ろを向いて顔のハッキリしないアッシュ……。それと、なぜかガンドウィルとパグフィの二人が写っていた。

パグフィに至っては、カメラに寄ってピースまでしている。

「……」

リンが、じとじとした目で写真のパグフィを指差す。

「代役だそうだ」

「なによそれ?!」

「ははは、仕方ないだろ、倒れてたんだから」

「むううう……」

リンは不満そうだったが、すぐに気を取り直した。

「まあ、いいわ。そのうちもっと大物を倒してデカデカと、この掲示板に貼ってやるから!」

ふっ、と胸に手を当てながらリンが言う。

「意気込むのはいいけど、ほどほどにな……。さて……」

アッシュはそう言うと、二ナのところへよっていった。

「また……アイツは……」

リンがあきれて言うが、今回は愚痴を言う相手がない。

「どうも、二ナさん」

「あら、アッシュさん！」

アッシュを見ると、二ナが、ぱあっと表情を明るくした。

「心配したんですよ？ ドスランポスの討伐に行ったって聞いたあと、ここに来ないんだから」

二ナが本当に心配そうに言う。

ハンター達は、村長から依頼を受けた場合も、報酬はこの集会所で貰うことになっている。

なのに、今までアッシュは報酬をとりになかったらしい。

「いや、ちょっと名誉の負傷をしまして……」

ははは、とアッシュが笑う。

（なによ、負傷したのはあたしじゃない！）

リンはそう思うが、同時にほっとしていた。

（なんか・・・苦手なのよね、二ナさん……。悪い人じゃないんだけど・・・）

リンは以前に、アツシュにそのことを少し話すと。

「お前とはつくりが違うからな、嫉妬^{しつと}して当然だ」

と、アツシュが言ったので、とりあえず殴った記憶がある。

（あれはあれで、あたしに気を使ってくれてるのかな。・・・だっていいけど・・・）

リンはそんなことを一人、考えていた。

「ところで二ナさん、最近、なにか面白い情報はありませんでしたか？」

アツシュが遅くなったドスランポスの報酬を二ナから受け取りながら言う。

「情報、ですか・・・」

言って、二ナがリンの方を見る。

（・・・！）

リンは、二ナに『また大声を出すんじゃないかしら』と言われたように、少しいらったとした。

「ああ、大丈夫、あれはちゃんと馴しづけましたから」

アッシュがははは、と笑う。

（後でぶっ飛ばそう）

リンは心の中で決意した。

「は、はあ・・・」

二ナはそう返事をする、手元の資料を調べ出した。

「あ、これもまだ、ただの目撃情報なんですけど・・・」

言って、二ナはアッシュに資料を渡す。

「・・・イャンクックか」

アッシュが呟く。

イャンクックとは、鳥竜種の中でも、飛竜種に近い、大型の怪鳥だ。

ピンク色の鱗に、化粧でもしたのか、と言うような、変わった外見をしているが、大きさも強さもドスランポス以上だ。

「ふう・・・む」

アッシュが何事か考えていた。

（まあ、大方、あたしと一緒に大丈夫かな、とかそんなんでしょ）

リンが思うが、実際はどうなのか確認しようがない。

「いるとしたら、どっかの『森と丘』か」

アッシュが呟く。

「え？なんで『密林』じゃないってわかるの？」

イヤンクツクといえ、『密林』にも生息すると聞いていたリンは、アッシュに問いかける。

（これが長年ハンターをやっている人間の勘ってやつかしら？）

リンは少し感心していた。

「いや、ここにそう書いてある」

「・・・あつ、そう」

（がっかりね・・・）

「とりあえず、なにか続報があり次第、連絡します」

ニナが言うと、アッシュはその後、ニナと幾らか話をして、リンと二人で集会所を後にした。

「依頼、受けないの？」

帰路の途中、リンがアッシュに問いかける。

「今日は顔見せと、報酬を取りに來ただけだ。イャンクックの情報も入ったし、まずまずだな」

「・・・受けられるといいね。依頼」

イャンクックの討伐依頼は結構多いが、これも人気があるため、あまり受ける事ができない。

「ああ、イャンクックの行動は基本的には飛竜と似ているから、リンが飛竜との戦闘に慣れる良い機会だからな」

「・・・うん」

（・・・そういえば、リオレウスの情報はどうなったんだろ）

二ナはリオレウスの事については、何も言わなかった。

（まあ、飛竜種の目撃情報は見間違いとか、他の場所に移動したとか多いらしいし・・・。それに・・・）

リンがちらつとアッシュを見る。

「ん?」

アッシュは『何だ?』と言いたそうな顔だ。

「ん、なんでもない」

（それに、まだアツシュは、あたしがリオレウスと戦う事なんて、許さないだろうし・・・）

「?・・・変な奴」

「アツシュに言われたくない」

二人は、その後、ぼつぼつといくつか他愛ない話をしながら家に帰った。

一度家に帰り、しばらく休むと、リンとアツシュは残りの時間を各々の判断で自由行動をとることにした。

リンは、鎧をドスランポスに変形させられ、穴まで開けられたため、鍛冶屋に修理をしてもらうよう頼んでおいたので、確認にいくことにした。

「おつ、リンちゃんじゃねえか」

親しみやすそうな顔の、無精髭を生やした男がリンに話し掛けてきた。

「こんにちは、ディールさん。鎧、修理できた？」

「ああ、もちろんだ。それと・・・」

ディールが修理した鎧と一緒に具足を取り出した。

「あっ！」

リンが、ぱっと目を輝かせる。

「ランポスグリーブだ。頼まれた通り、つくつといたぜ！」

「わあ、ありがとう」

リンはそれを嬉しそうに受け取る。

ハンターにとって上等な武器や防具を装備する事は一流のハンターの証とされている。

そのために、少しずつでもランクの高い防具を装備していくことは、多くのハンターの楽しみになっている。

「鎧と具足は後でうちのアイルーにリンちゃんここに送らせとくわま、これに満足しねえで、もっといいもん作れるくらいバンバン狩ってくれ！」

ディールはハッハッハと楽しそうに笑った。

「ええ。そのつもり」

リンは代金を払い、ディールとしばらく話をすると別れ、夕食の材料を買いにいくことにした。

「うーん」

「アツシユ様、なにをしてるんですニヤ？」

本を片手に難しい顔をしているアツシユに、ペケが問いかける。

「ん〜、近々、イヤンクツクを討伐しに行くかもしれないからな、音爆弾の調合を・・・」

本から目を離さずにアツシユが言う。

「そうですかニヤ・・・」

ペケは、アツシユの邪魔をしないように、黙っておくことにした。

「・・・くそつ、なんでこういう本って意味のない文章が多いんだっ？！」

多分、本の厚さを増すためだろうが、アツシユは苛立っている。

「音爆弾の歴史はまだ許せるが、なんで使用した時の個人的な感想まで書いてあるんだ？！」

アツシユが、目の前にはいない著者に突っ込む。

ペケがそつと覗くと、確かに『快音とはいうが、音が大きすぎて気分が悪くなった』というのを回りくどく書いてあった。

しかも、それが書いてあるのはサブタイトルが『すぐわかる！これが音爆弾の調合法！』だった。

（ニヤるほど・・・）

ペケは、アツシュが怒る理由を理解するとともに、激しく共感した。

リンは買い物をすませると、ついでにジェインの道具屋に寄ることにした。

「あら、リンちゃんじゃないの」

ジェインが体をくねくねさせながら寄って来た。

「どうも。ジェインさん」

最初はリンも気味悪がったが、いい加減慣れていた。

「なにか入り用かしら？」

「そうですね。じゃあ・・・」

村長にも敬語で話さないリンも、ジェインの前では敬語で喋る。

「回復薬を5つと、砥石を5つ下さい」

「はあい。7302ねえ」

代金を払うと、ジェインが『あつ、そうそう』と言って、店の奥に入ってしまった。

「？」

「おお・・・出来た・・・!!」

アツシュが調合で出来た音爆弾を掲げていった。

（そんなに珍しいことでもないんだけどニヤ・・・）

声には出さず、ペケがそう思うが、アツシュは気づかない。

「散々不器用と呼ばれて以来、数年間調合をしなかったが、ふふふ・・・俺だってやれば出来るってことさ！」

アツシュが嬉しそうにしているが、ペケはあることに気づいた。

（『本書を用いての音爆弾調合の失敗率は5%未満』・・・）

ペケはその調合書をそつと隠すことにした。

「よし、気分もいいし、ちょっと散歩行ってくる」

「はいですニヤ」

アツシュは今にもスキップでもしそうなほど浮かれて、出かけていった。

「ほら、これよこれ」

ジェインが店の奥から半円形の黒いものを持ってきた。

「これは・・・?」

リンがそれを渡され、ジェインに聞く。

「『シビレ罫』よ。いや、ほらね。リンちゃんもドスランポスを討伐出来たことだし。今度はイャンクックかなあって思ってたねえ」

「はぁ・・・」

それとこれとどう関係があるのだろうか、と、リンは手元にある見たことの無い道具をまじまじと見た。

(結構軽い・・・)

「あ、それね。地面に設置して、真ん中のボタンを思いっきり踏んだりして押すと、数秒後に電流でコレの周りに入ってきたモンスターをシビレさせるのよお」

「へえ・・・」

平らになっている裏の二箇所、地面に刺し込むためのものと思われるデカイ針が、折りたたまれてあった。

「でも、設置してモンスターがシビレてるからって、あんまり近寄ると人間もシビレちゃうから気をつけてねえ」

「・・・」

(意味は・・・?それにモンスターが痺れるくらいだから、人間が電流の範囲に入ったらただじゃ済まないんじゃない・・・)

「あたしも昔は『クックイーター』と呼ばれるハンターだったから、色々調合してて余ってたのよお。だから、お代はいらないわ」

「え？いいんですか？」

「もちろんよお」

リンはちょっとありがた迷惑な気もしながら、シビレ罌をもらうことにした。

「ありがとうございます。ジェインさん」

「いいのよお」

リンは礼を言ってしばらく話をすると、荷物も多くなってきたので帰ることにした。

「お、リン」

アッシュは散歩の途中、今から帰るところと思われるリンの姿を発見した。

「あら、アッシュ」

「・・・重そうだな、俺が持つよ」

アッシュはリンが抱えていた袋を受け取る。

「・・・」

「・・・どうした？」

「・・・珍しく、アッシュが優しい」

「ははは、俺はいつだって優しいぞ？」

「はいはい・・・」

「・・・」

それから無言で、二人並んで歩く。

太陽は大分沈み、暑さも少し和らいだ。

虫の鳴き声がよく聴こえる。

昼の喧騒けんそうがなかったかのように、辺りは静かだった。

「ねえ、アッシュ・・・」

「ん？」

「あのさ、あたし・・・ハンターになってから、毎日毎日、色んな依頼をこなしてきて、こんな風に一日ゆっくり過ごすことってあんまりなかった」

「そうだなあ・・・」

「でさ、別にハンターが嫌ってわけじゃないんだけど、こういう日もありかなって思うの」

「ああ・・・」

「なんか、こう・・・いちいち、殺すとか殺されるとか考えなくていいじゃない？」

リンは言葉が上手くまとまらないようで、少し詰まりながら言う。

「・・・ああ」

（・・・やっぱり、リンは・・・ハンターに向いてないんじゃないだろうか）

「こうやって、いつもと同じ人と話をして、いつもと同じことするのが、なんか大切に思えた・・・」

言った後で、『クサいかな』とリンは照れくさそうに笑う。

「そうか・・・」

それを見て、アッシュも少し微笑む。

「日常って、結構『幸せ』があるんだね・・・。こうやって、いつものように過ごしたり、空を眺めながらアッシュと二人で歩いたりするのが、あたしは幸せ」

「・・・それは、リンが・・・」

アッシュが何か言おうとして止める。

（やめておこう。さすがにこれはクサいな・・・）

「・・・なに？」

「いや、きっとそれはリンがバカだからだよ」

『良いこと言った』とでもいいそうな顔でアッシュが言う。

「・・・バカアッシュに言われたくないわよ」

リンが言うが、声に怒りはこもっていない。

「まあ、つまり・・・なんだ」

「？」

「『幸せ』ってのは、誰かに『これが幸せなんですよ』とかいって教えてもらうものじゃなくて、自分で見つけるもんなんだってことだな。・・・まあ、当然のことだけど」

「・・・うん」

「空を眺めてるだけで幸せな気分になったりするのも、すごい良いことがあっても仏頂面するのも、その人の心の持ちようなんだ」

「・・・うん」

「だから・・・こんな日常が幸せって思えるリンは・・・」

アッシュはそこまでいって、詰まる。

「・・・？」

「・・・バカなんだよ」

アッシュはなぜか照れた顔で言う。

「・・・なんで照れてんのよ!」

「あいたっ」

リンが微妙な空気に耐えられなくなったのか、アッシュを軽く小突く。

「まあまあ、アホなことやってないで、とつとと帰るぞ!」

そういつて、アッシュは歩く速度をあげる。

「うん」

リンもそれを追う様に歩く。

そして、また無言で二人並んで歩く。

少しして、アッシュは自分の歩く速度がリンには少し早いと気づくと、歩く速度を落とした。

第4話 幸福な休息（後書き）

どうも。この小説を書いているヤツです。

既にお気づきの方も多いと思いますが、この小説の中に出てくる設定などには私が勝手に作り上げたものがあります。というか多いです。

なので、あまりそういった設定（人数無制限の依頼）や物を信じるカメラとかと、恥を掻く恐れがありますのでご注意ください。

また、私の勝手な都合で小説の内容を変える場合があります。

例えば、ジェインがドスランポスの情報料として3000zを要求しようとした件についてですが、『あれ、これクールドリンクと同じ？』と思ったんですが『でもドスランポスの依頼9000zなんだよね』ということで、『じゃあ、依頼一日一回くらいしか受けないし、報酬を5倍くらいもらえることにしよう』と、勝手に変えて情報料を変えたりとします。

ですが、小説の内容を大幅に変えることは（多分）ないと思いますので、ご了承ください。

また、『数日間更新しなかったにもかかわらず、読者が数人いるということは、愛読してくれている人がいるのか?!』などと思いつつ、書いております。もしそうなら更新が遅くなったのは申し訳ないです。

更新はいつするか決まっていますが、ゆっくり書いていきたいと思っています。

長くなりましたが、これから『この、小さな勲章を』をよろしく願います。

第5話 森と丘の大怪鳥

翌日。

アッシュは朝早くからジェインの店へ向かった。

目的はイャンクックの情報だ。

「あらあ、アッシュちゃんじゃない」

「どうも、ジェインさん」

「んもう、ママよお」

「はは・・・」

ジェインはいつも夜遅くまで働き、朝も早いのに、全然疲れた様子はない。

「どうしたの？イャンクックの情報かしら？」

「ええ、まあ・・・」

（さすがにバレバレか・・・）

アッシュは『このひとの周りで悪い事はできないな』と思いながらも、いちいち事情を話さなくても理解してくれるジェインを頼もしくも思った。

「ふふん、良い情報よ。依頼は今回も村から出るわ」

ジェインが自信たっぷり言う。

「え？集会所じゃなくて？」

アツシュはてつきり王国騎士団が取り逃がしたものが依頼としてこの村の集会所に来るものとはかり思っていた。

「ええ。今回のイヤンクツクは『ウォレフの森と丘』で発見されて、まだ王国騎士団は発見してないやつだから、一番近いこの村が被害を受けやすいってことで村長が依頼を出すことになったのよあ」

「へえ・・・確かに、『ニサカの森と丘』より近いな・・・」

（ほとんどのハンターは村長に依頼が来ることは知らないハズだ。これは上手くいけば受けられるかもしれない・・・）

「今回は、オマケしないわよあ、これも商売だから」

「ええ。充分金を払える情報ですよ。ジェインさん」

なんだかんだ言って結局割引してくれた情報料を払い、ジェインに礼を言つとアツシュは家に戻った。

「へえ、今回も村の依頼なんだ」

朝食を摂り終えた後、アツシュはリンにジェインの情報を話した。

「ああ・・・」

「じゃあ、今回も受けられるかもね」

「そうだな、出来れば受けたいところだ」

「いや、受ける！」

「はいはい・・・」

アッシュは『すぐにでも村長に行こう』とリンが急かすので、仕方なく歩きながらイヤンクックとの戦闘法を伝授することにした。

「いいか、奴は耳が良いから音爆弾とかタル爆弾の爆音で怯む。これは絶対に覚えておけ」

「・・・ドスランポスのときは普通に戦ったのに、なんでイヤンクックになったら小細工使うのよ？」

リンが納得いかない、といった顔をしている。

「ドスランポスまでは大体、小細工なしでなんとかなるもんなの。でも大型の竜となると、慣れないうちは罠とかが必要なの」

「・・・そんなに強いのか？」

「ああ、強い。といっても、慣れればある程度どんな行動をとるかわかるようになるから、そうなったら小細工なしでも勝てる」

「へえ・・・アッシュはわかるの？」

「もちろん」

「・・・」

ふふん、と腕を組んで偉そうにするアッシュを、リンは胡散臭そうに見る。

「まあ、とにかく、音爆弾と小タル爆弾を渡しとくから使え」

アッシュに渡されたものをリンが眺める。

「ありがと・・・アッシュは？」

「俺は今回、道具を使わず戦う」

「なにそれ、あたしだけ小細工？」

リンが不満そうにアッシュを睨む。

「俺は慣れてるからな。なくてもいいし、お前が道具をいつ使うべきかを判断出来るか見てみたいしな」

「へえ、試されてるわけ？」

「まあ、そういうことだな。もちろん無理に使う必要はないぞ」

「りょーかい」

「・・・ふてくされるなよ」

「なんのことかしら？」

リンがそっぽを向いて言う。

（なんだか子供みたいだな・・・）

そんなリンを眺めながら、アッシュが、ふっと笑う。

「・・・あ、そうそう。奴がキレているときは効かないからな」

「なんで？」

「知らん。きつと怒りのパワーだ」

「・・・」

「まあ、とにかく、怒っているときは見た目でわかるから、いっぺんみとくといい」

「見たくないなあ、『怪鳥』でしょ？」

「ああ、ジエ・・・」

アッシュは『ジエインさんの鳥バージョンみたいなもんだ』というおとして、止めた。

「なに？」

「・・・なんでもない」

（聞かれたら殺される・・・）

「・・・変なの」

しばらく喋りながら歩いていると、村長の家が見えてきた。

「そんちよ」

リンが手を振って、椅子に座ってうとうととしていた村長を呼ぶ。

「ん・・・おお、アッシュとリンか。どうした？イャンクックの依頼か？」

「は、はあ・・・」

（なんだかこうバレバレだと、村中にバレてるんじゃないかって思えてくるな・・・）

「すごい、村長。なんでわかるの？」

「お前達の考えることなんぞお見通しじゃない」

村長が、ほっほっほと笑う。

「へえ」

『歳をとると人の心でも読めるのかしら』などと思いつつ、リンが感心する。

「そ、そうですか・・・」

「それで、その依頼書だけど・・・今ある？」

「ほっほっほ、あるぞい」

村長がさっ、と依頼書を差し出す。

「おおっ」

アッシュが歓声ともつかない声をあげる。

「やった！受けられる！」

同時にリンも声をあげる。

「ほっほっほ」

ここまで来れば他のハンター達に依頼をとられることはないが、なんとなく急いで依頼を受けると、早速『ウォレフの森と丘』に行く事にした。

二人は、『ウォレフの森と丘』に到着し、テントを張った。

「よし、これでいいわね」

「ああ、じゃあ早速イャンクックを捜すとするか」

そういうと、二人は離れないようにしながら丘の方へ行くことにした。

「やっぱり、分担するっていうのはダメなの？」

リンが問う。

「ああ、敵に気づかれずに知らせる方法がないからな。それに、気づかれた後でも知らせる前にやられる可能性もあるしな」

「・・・あたしが？」

リンがむっとした顔で言う。

「いや、俺だって可能性はくはない。慣れてるからって、『絶対』なんてないしな」

「あら、意外と謙虚なのね」

「大人なんだよ」

アッシュは、フフンと笑う。

「はいはい・・・」

それからしばらく歩く。

「・・・やっぱり、すぐには見つからないのかなあ」

「デカイから、結構見つかりやすいんだけどな・・・」

二人が辺りを見渡しても、アプトノスがのんびりと草を食べていたり、ぼーっとしていたりするばかりで、イャンクックの姿は見当たらない。

「・・・どっかほかの場所に行った可能性は？」

「さあなあ、モンスターの考えることなんてわからないしな」

「・・・まあ、探すしかないか」

リンが、はあとため息を吐く。

「・・・！」

その時、アッシュは遠くから大きな羽音が近づいて来ることに気が付いた。

「・・・！？」

遅れて、リンもそれに気付く。

「・・・」

初めての飛竜クラスのモンスターとの戦闘を前にしてか、リンの表情はいつになく真剣になった。

バサツバサツ、と大きな羽音が移動する。

「・・・向こうだ！いくぞ！」

言うつと、アッシュは駆け出した。

「あつ、アッシュ？！」

リンもそれに続く。

バサツバサツ、ドスン。

二人は、少し走ると、丁度地面に着地したイヤンクックを見つけた。

「いた！」

「クオツクオツクオツクオツ・・・」

イヤンクックが笑っているとも思えるように唸りながら、辺りを見回す。

「・・・！」

イヤンクックが二人の存在に気付く。

「リン、気を付けろ！来るぞ！」

「う、うん！」

（ひええ、顔コワッ！）

イヤンクツクの奇怪な顔に、リンが怯む。というか、ちょっとひいていた。

「クエエエツツ！」

イヤンクツクが羽を広げ、敵と判断したアッシュ達を威嚇する。

「リン、俺は右に回る！お前は左だ！」

「了解っ！」

（ええっと・・・）

走りながら、リンはアッシュの言う『俺達の戦闘スタイル』とやらを思い出していた。

「ねえ、アッシュ。あたし達もガンドウィル達みたいに二人一緒に動いた方がいいの？」

家で休養をとっていた頃、リンはアッシュに尋ねた。

「ん？どうした？急に」

アッシュは珍しいものでも見たような顔をして言う。

「いや、この前・・・さ、あたしが周りに注意しなかったせいで、あんなことになっちゃったじゃない・・・？」

リンは色々な事を思い出してか、複雑な表情になった。

「・・・」

アッシュはそれを肯定も否定もせず、黙って聞いていた。

「だからね・・・」

リンはそこまで言って詰まる。

（まあ、言わんとせんことはわかる）

アッシュは『足手まといになりたくないのだろう』とリンの心境をなんとなく理解した。

「・・・まあ、なんだ。俺達の場合、二人で固まって動くのはあまり良くない」

「・・・え？なんで？」

リンは『意外だ』といった表情をして聞いた。

「あの二人の場合、攻撃と防御のどちらか極端な武器を持っているから、ああいった形で戦える。けど、俺達の場合は防御に回る人間

「がない」

「なるほど・・・」

リンが納得した様子で頷く。

「俺達の場合は、どちらかというと逆だな。二人とも離れてたほうがいい」

「え？じゃあ・・・」

『この前みたいな戦い方？』と聞いたそうなリンを、アッシュが説明を続けることで止める。

「いや、だからといってこの前みたいに完全にバラバラに動くんじゃないぞ。二対一の状態で、出来れば敵を挟んだ俺とリンの位置が直線になるのがいい」

「『常にどつちかが敵の背後をとる』ってことね」

「そういうことだ」

リンが頭の中でイメージしているのか、下を向いてうんうんと頷く。

「で、隙を見つけたら攻撃だ」

「うん。・・・他には？」

「他には・・・ないな」

「・・・え？」

アッシュがあまりにもさらっというので、リンは呆気にとられた。

「作戦つてのはあんまり練りすぎると個人の判断で行動がしくくなる。つてのが俺の考え方だ。だから、余計なことは言わない。・・
・ただ」

「『深追いはするな』でしょ？」

「ああ」

「了解」

（背後をとって隙を見て攻撃、ね）

リンは考えを整理すると、アッシュの方に向いたイャンクックの背後に回った。

「クアアアツー!!」

イャンクックがアッシュをクチバシでつつこうと跳び掛る。

「はっ!!」

アッシュはそれを余裕すら感じられる動きで右に避ける。

（目の前にいるからって噛み付くってわけじゃないのね・・・）

リンは、イャンクックの背後を維持し、焦らずに敵の行動を観察する。

「！」

イャンクックが今度はしっぽを大きく振ってアッシュを攻撃しようとする。

「っ！」

ガアアン！！

その攻撃を、アッシュは大剣を盾にして防ぐ。

「おおらあっ！！」

攻撃を凌ぐと、大剣を水平に振って脚を斬りつける。

シュッ！

「っ！かすっただけか！」

イャンクックはアッシュの攻撃を前方に跳ぶことで回避した。

「だあああっ！！」

ザシュッ！！

「ッ!？」

着地した後で隙があると判断し、近い位置にいたリンがイャンクックの脚の数歩前で回転、脚を斬り付けると、すぐにバックステップで距離をとる。

「クアアアアッ!！」

思ったとおり、リンを狙ってきたイャンクックが、噛み付こうと首を伸ばす。

「はっ!！」

リンはそれをさらに後ろに跳ぶことで回避する。

「おおおおおつつつつ!！」

アッシュが駆け寄り、イャンクックの右翼を思いきり斬り付ける。

ザシュッ!！」

（よし!今度は良い当たりだ!！」）

イャンクックの右翼から血が吹き出る。

これでもう、飛べたとしても遠くまで逃げることは出来ないだろう。

（この調子ならいけるかも・・・!）

リンは初めて飛竜クラスのモンスターを討伐出来るかもしれないと

いうことに高揚しつつ、それを抑えながらイャンクックの周りを円を描くように移動する。

（焦るなよ、リン）

イャンクックとの戦闘に慣れているとはいえ、少なからず緊張をしているアッシュがリンの姿を確認しながら思う。

イャンクックは、今度はアッシュの方を向こうとしている。

（！・・・チャンス！）

アッシュに跳び掛かると予想して、リンが剣を構え、走り寄る。

「リン、フェイントだ！気を付けろ！」

「・・・え？」

イャンクックは、ゆっくりとアッシュの方を向くと見せかけて後ろに近づいてきたリンを睨み、尻尾で攻撃しようとしてきた。

「！？」

リンは即座に止まるが、今から後ろに跳んでも間に合わない。

（避けられない・・・！）

リンは咄嗟に『下手に避けようとする^{なう}と直撃をくらう可能性がある』と判断。

更に、双剣は防御に向かず、下手をすると折られる可能性があるの
で使えない。

衝撃！

「ぐっ！」

右腕と肩で尻尾の攻撃を受けるが、耐えきれず飛ばされる。

「っ！」

いなす様にして少し体をひいていたリンは、大したダメージは受け
ず、空中で左に一回転すると、地面に手をつき、受け身をとった。

地面に茂った雑草が土埃とともに舞い上がる。

「まだだ！来るぞ！」

「！」

アッシュの声にリンがはっとすると、イヤンクックはリンに向き直
っていた。

「クアアアッ！！」

イヤンクックが跳び掛かる。

リンはそれを右に跳び、二度ほど転がって回避する。

その光景ばかりに気をとられていたアッシュは、リンが無事だとわ

かると、ほっとした。

が、すぐに自分が攻撃のチャンス逃したことに気づく。

（・・・くそっ！何やってるんだ俺は！！）

気を取り直し、武器を構える。

二人とも、先程のように距離を保ちながらイャンクックを挟んでほぼ直線。

イャンクックの周りを武器を構えた状態でじりじりと動き回る。だが、自分達からは仕掛けない。

イャンクックも自分の後ろにもう一人が回りこんでいることに気づいているようで、首をしきりに動かして二人の動きを確認している。

「クアアアアアッツッ！！」

しばらくその状態していると、痺れを切らしたイャンクックがアッシュに向けて口から火を放つ。

（！・・・火を吐くの？！）

リンはそんな情報は知らなかったので、少し驚くが、すぐに気を持ち直す。

アッシュが火を回避するのと同じくらいのタイミングで、リンが音爆弾を取り出す。

（・・・使うか！？）

アッシュは何をするか理解し、すぐにリンの近くまで走る。

「こつちよ！」

リンがイャンクックに向けて声をあげる。

「！」

それに反応したのか、イャンクックはリンに向き直る。と、同時にリンは音爆弾をイャンクックの顔面に投げつける。

「くらえっ！」

キイイイイイイン！

「ゲエエエツツツ！！」

イャンクックが音爆弾の快音に驚き体をのけぞらせ、両翼を万歳でもするかのように広げて硬直する。

「いくぞ！リン！」

リンの前に駆け寄ったアッシュが大剣を構え、イャンクック目掛けて走る。

「ええ！」

リンが少し遅れてそれに続く。

「うおおおおおっつ!!」

アッシュがイャンクックの無防備な腹部を斬り付ける。

ザシュツツ!!

（流石に硬いな・・・!）

アッシュの攻撃は腹部に直撃したが、致命傷になるほど深い傷にはならなかった。

「まだまだあっ!!」

アッシュは地面に叩き付けた大剣を斜めにして柄の部分だけを動かし、イャンクックの左脚を刺すとそれを軸に右に移動。大きく回転する。

「だあああっ!!」

アッシュの地を這う大剣を跳び越え、リングが肩の後ろに両手の剣を構え、腹部を縦に斬り付ける。

ザザツツ!!

「おおらあああっつつ!!」

続けて、回転していたアッシュがイャンクックの左脚の右側で止まり、回転の勢いを残したままの大剣を振り上げ、右翼を斬りつける。

それとほぼ同時のタイミングで、着地したあと体勢を整えたリンが回転し、腹部をさらに斬りつける。

ドシュツツツツッ!!

ザザッ! ザザアツッ!!

大剣はイャンクツクの翼膜を半分ほど裂いて止まり、リンの攻撃はイャンクツクの腹部に四箇所傷をつけた。

「ッ・・・ッグエエエエツッ!!」

今まで時が止まっていたかのように、イャンクツクが悲鳴をあげる。

アッシュが右に移動し、翼膜に刺さった大剣を引き抜きながら距離をとる。

リンも回転を止めると左に跳び、イャンクツクの方を向いてバックステップで距離をとる。

数日前の戦闘が嘘のような連携だった。

そして、二人とも充分に距離をとると、同じ事を考えた。

(勝てる!)

その時。

「グアアアア! グアアアアツツッ!」

イャンクックは両翼を広げ、駄々をこねるように飛び跳ねる。

「！」

それを止めると、くちばしから火が漏れ出すほど呼吸が荒くなり、目付きは正気を失ったと思われるほどに鋭くなった。

「リン、キレたぞ！気を付けろよ！」

「りよ、了解っ！」

リンは初めて見る大型モンスターの怒る姿に驚いたか、またはイャンクックの形相に狼狽してか、少し怯んだ。

「グアアアツツッ！！」

イャンクックが、がむしゃらにアッシュに突っ込む。

「うおっ？！」

アッシュがそれをイャンクックの右側に跳ぶことで回避する、が。

「グワアッ！」

イャンクックは首だけを動かして敵を睨むと、アッシュに向け火を吹いた。

「！」

ポオッ！

火は、アツシュが回避した後に右手で背後の地面に突き刺した大剣に当たった。

（え・・・？予想してたの？！）

リンは、アツシュがイャンクックと戦い慣れているという事を改めて知った。

（『ちよつとカッコいいかも』なんて思ってしまった・・・）

そんなリンの心境を知らないアツシュは、大剣を引き抜くと距離をとるため一旦武器をしまう、と。

「あつづ？！」

（・・・）

熱をもった大剣に背中を仰け反らせて苦しむアツシュを、幻滅した目で見る。

「グワアアアッ！！」

イャンクックが体勢を立て直すと、今度はリンに向かってきた。

「うわっ？！」

首を振り、ものすごい形相で火を撒き散らしながら走り寄ってくるイャンクックを見て、一瞬動くのが遅れる。

（えつと・・・こつちだ！）

リンはイャンクックが左右交互に首を振っているのを見て、自分にあたる数歩前で左に火を吐くのを確認すると、左へ回避した。

「来いつ！」

回避した後、先程アツシュにしたようにこちらを向くと判断し、背後に向き直って構える。

しかし、そんなリンにはお構い無しに、イャンクックは数歩走るとバランスを崩し、地面に倒れた。

「・・・」

リンが固まったまま頬を赤くする。

振り返ると、アツシュがニヤニヤしていた。

「な・・・何よっ！文句あるの?!」

リンが恥ずかしさを紛らわせるために怒鳴る。

「いえいえ、滅相も無い」

棒読みで答えるアツシュを思い切り睨み付ける。

（絶対、後で殴る）

そんな二人のやりとりに気付かないイャンクックは起き上がると、

二人に向き直る。

「ほ、ほら！行くわよバカアツシュ！」

「そうだな。・・・最後まで油断するなよ」

すぐに気を取り直し、構える。

今、二人は敵を挟んだ状態ではない。こういった場合は、左右に分かれて回避する。

立ち位置からして、リンが右、アツシュが左に避けることになる。

「ゲアアアツツツ！」

避けられるという判断も出来ないのか、それともそうするしかないのか、イヤンクックは比較的近くにいるリンに突進する。

（火を吐きながらじゃない。ってことは・・・）

リンは今度こそ、回避したら首だけこちらに向け、火を吐くと予想する。

「はっ！」

右に避ける。回避成功。

（あれは、さつきと同じ方法で来るな・・・）

リンと同じ事を予想していたアツシュは、間合いを詰める。

「・・・！」

イャンクックは思った通り首をくるっと回転させ、リンを睨むと火を吐いた。

「遅いつ！」

それを予想していたリンは難なくそれを回避する。

その瞬間。

ザシュツツッ！！

「グエエエツツ?!」

イャンクックが凄いい形相で鳴き声をあげ、のめるように倒れる。

「え?え?」

リンが困惑してイャンクックを見る。と、アッシュがイャンクックの尻尾を斬り落としていた。

「グ、グアアアッ・・・」

「!」

見ると、イャンクックは明らかに衰弱しており、目には先程までの鋭さはなくなっていた。

「まだ終わってないぞ！気を抜くな！」

「う、うん！」

アッシュが言う様に、イャンクックは衰弱してはいるものの、まだ諦めてはいなかった。

「グアアアツ！グアアアツ！！」

すぐに起き上がると、敵の姿も確認せず、周辺に火を吐く。

「え・・・？！」

リンはその行動を理解できず、戸惑う。

（・・・もう終わるな）

アッシュはそう確信した。

「グアアアツ！グアアアツ！！」

イャンクックはひたすら火を吐き続ける。無駄な抵抗とわかってても何とか生きようと必死なのだろう。

「・・・」

リンはそんなイャンクックの姿を見て躊躇っているのか、動かない。

（同情はしない・・・殺すも殺されるもお互い様だからな）

「俺の考えがお前の考えじゃない。お前が『間違ってる』と思っているなら、ハンターをやめた方が良い」

「・・・酷い言い方」

「・・・悪い」

沈黙。

（もし、あたし達が・・・いや、ハンターがイャンクックを討伐しなかったら、村に被害が出てたかもしれないよね・・・）

そう思うリンの脳裏に、昔の光景が蘇る。

「・・・っ」

「・・・答えはでたか？」

アッシュの問いに、リンは答えない。

「・・・」

リンは、必死に生きようとしたイャンクックの死骸を見つめる。

しかし、その眼に『無念』といった想いは感じられなかった。

「わかんない」

「・・・」

「わかんないけど、多分、これでいいんだよ」

「・・・そうか」

アッシュはしたを向いて、ふっと笑う。

「うん、あたしが迷っても何も変わらないもんね。やるって決めた
以上は最後までやる」

リンは自分に言い聞かせるように言う。

「・・・よし！リン！」

言ってアッシュは立ち上がり小手の防具を外すと、さっと手を上げる

「！」

「討伐完了後の『いつものやつ』だ。この前は出来なかったけどな」

「うん！」

リンも小手の防具を外し、アッシュに駆け寄る。

ボスッ！

「ぐへっ?!」

リンに小手を外してない手で腹を殴られたアッシュが奇怪な悲鳴をあげる。

「さっきの『お礼』よ」

「ね、根に持つなあ・・・」

気を取り直し、アッシュが困ったような顔をして、また手を上げる。それをみてリンが、ふふつと笑うと、アッシュの手を小手を外した手で叩いた。

パン！

二人はハイタッチし、お互いの顔を見ると、なんだか可笑しくなつて笑った。

少し休憩すると、近くのアイルーに頼んで写真を撮ってもらうことにした。

「・・・アッシュ、なんで顔隠すの？」

リンがいうように、アッシュはさり気なく顔を隠していた。

「ふふん、俺ほどの美男だと世界の女性が黙って・・・」

「ああ、やっぱりいい」

リンはアッシュの言葉を遮るが、もちろんそれが本当の意味だとは思っていない。

（そういえば、前も顔隠してたっけ・・・）

この前、集会所で見たアツシユの写真を思い出しながら、その理由を考える。しかし、わからないのでやめた。

「いた！おおい！アツシユ！」

「？」

そろそろ帰ろうかと思っていた時、声に気づいたアツシユ達が遠くから近づいてくる人影を見つめる。

「あれ？パグフィじゃない？」

リンが言うように、声の主はパグフィだった。

「ガンドウィルもいるな」

確かに、パグフィの後ろを重そうな大剣を背負ったガンドウィルが追いかけるように走っていた。

「どうしたんだろ？」

「さあなあ」

「はあ、はあ、お、おま・・・えら」

パグフィは、二人の前までたどり着くと、肩で息をしながら何かを伝えようとしていた。

「どうしたんだ・・・？」

「お前達、早く逃げろ！」

遅れてやってきたガンドウィルが叫ぶ。

「え、何・・・？」

何の事かさっぱりわからないリンが、ガンドウィルを訝しそうに見つめる。

「け、今朝、情報が入った」

パグフィが呼吸を整えながら喋る。

「情報？」

「も、もう村の近く、まで来てやがった。目撃情報があつたんだよ！リオ・・・」

バサッバサッバサッ。

パグフィの言葉を遮って、大きな羽音が近づいてくる。

「え・・・？」

羽音に気づいた四人が空を見上げると、そこには悠然と空を漂う飛竜の姿があつた。

「リオレウス・・・！」

「・・・来やがったか」

パグフィは額に走ってきたこととは別の汗を掻いていた。

バサッバサッバサッ。

恐怖を呼ぶ飛竜の羽音が段々大きくなると、その音は空が悲鳴をあげているようにも聞こえてくる。

「グオオオオオッ！」

咆哮。

「！」

イヤンクツクの鳴き声などとは比べ物にならない迫力に、全員が緊張する。

バサッバサッ・・・ドスン。

草木をざわめかせ、愚かな四人のハンター達を見下ろしながら大地に『空の王』が降り立った。

第6話 空の王

（最悪だ・・・）

アッシュは目の前に降り立った、全身を赤色の硬い鱗で覆われた飛竜、『空の王』リオレウスを睨み、思う。

三角に近い顔面に、捕食者であることを知らしめる鋭く光る黄色い瞳。

首は長く、イヤンクック同様、胴からは前足の代わりに発達した巨大な翼があり、後ろ足の爪には毒があるとされている。

尻尾は首よりもさらに長く、3mほどある。

（俺はリオレウスと戦ったことはないが・・・大きさから見て、結構な大物だ）

これは飛竜には限らないが、モンスターは全長が大きいほど強力とされている。

目の前のリオレウスは、アッシュが過去に一度だけ別の依頼のときに追われていたそれよりも更に大きかった。

リオレウスは四人のハンターを睨みつけ、今にも襲い掛かりそうだった。

「おいおい、タイミング良すぎだろ」

パグフィがなるべく軽い口調で言うが、顔は真剣そのものだった。

「・・・」

ガンドウィルは沈黙したまま、リオレウスをただ真剣な表情で睨んでいた。

「！」

アッシュが、はっとしてリンを見る。

（そういえば、リンはリオレウスを気にしていた・・・！）

リオレウスを見つけた途端、無防備に突っ込むのではないかと懸念けねんしていたが、どうやらそれはないらしい。ただ・・・。

（・・・？）

「・・・」

リンはリオレウスを見つめたまま、呆然としていた。

「・・・簡単には逃がしてくれそうにないな。皆、構えろ！」

ガンドウィルの声を合図に、リンを除く三人が武器を構える。

「リン！何してる、構えろ！」

「！・・・う、うん！」

アッシュの声に、はっとしてリンが武器を構える。

「グオオオオオツツツ!!」

リオレウスが咆哮する。

「!!」

あまりの音に四人が怯む。

「来るぞ!!」

ガンドウィルが叫び終わると共にリオレウスがアッシュを睨みつけ息を吸う。

「!!」

ドウッ!

リオレウスが火球を吐き出す。

イャンクックのそれと違い、リオレウスの火球はアッシュ目掛けて真っ直ぐに飛んできた。

「おっと!!」

パグフィの声。気づくと、アッシュの目の前にはパグフィが盾を構えていた。

ポオン!!

爆発でもしたのかと思うような大きな音。

「あっちい・・・」

パグフィは火球をなんとか堪えた。

「すまん、パグフィ。助かった」

「いってことよ」

パグフィがアッシュに顔だけ向けて気さくに笑いかける。

「お前達、どうする？隙を見て逃げるか、戦うか・・・」

リオレウスの動きを見ながらガンドウィルが問う。

「ガンドウィル。お前達、リオレウスと戦った経験は？」

「ない」

ガンドウィルがあっさりと言う。

「俺達もだ・・・」

「参考になりそうなアドバイスはないということだな」

「でも、四人もいるんだから勝てるんじゃないの!？」

リンが問うが、誰もそれに納得はしない。

「おいおい、俺達はお前らのために走ってきたんだぜ？もうくたぐただっての……」

パグフィが言うと少し真実味が欠けるが、どうやら嘘ではないらしい。

「それに、お前達も先程までイヤンクックと戦闘をしていたのではないのか？」

ガンドウィルがいうように、アッシュ達はイヤンクックの戦闘からそんなに時間は経っていなかった。

例え本人が大丈夫なつもりでも、実際の動きは好調の時には及ばないだろう。

「グオオオオオツ！！」

リオレウスが四人に向け、突進してきた。

「っ！！」

それをアッシュ達は左、ガンドウィル達は右に回避する。

誰か一人を狙ったわけではないリオレウスの突進は失敗し、地面にのめって倒れる。

「……でも、この前あんなに意気込んでたんだから、討伐するつもりだったんでしょ！？」

回避できたと確認してから、リンがパグフィに問う。

「ああ、でもな、慣れてない奴との戦闘に準備は欠かせないってもんだぜ!？」

「例えば・・・!？」

「『罾』とかな!」

(『罾』・・・)

リンは自分が持っている『シビレ罾』を思い出した。

(でも、仕掛ける暇がない・・・!)

リオレウスは起き上がると、ガンドウィル達を睨みつける。

「逃げようにもヤツの方が足は速そうだ。逃げてる最中に後ろから攻撃されてお終い、なんて笑えねえぜ」

「・・・とにかく、どうにか逃げる方法を探すかなさそうだな」

アッシュが渋々決心する。

「だな!」

「グオオオオオオツ!」

リオレウスがガンドウィルに狙いを定めて突進する。

「いくぞ！パグファイ！！」

「ああ！」

「リン！よく敵の動きを見ろよ！」

「了解！」

ガンドウィル達はギリギリで避けるつもりらしく、リオレウスを睨んで構えている。

アッシュ達はリオレウスから目を離さず、突進した後に先程のように倒れるだろうと予想。倒れると思われる場所へ少しずつ移動する。

「おらあっ！」

「ふんっ！」

ガンドウィル達はリオレウスがすぐに軌道を変更できないように、避けられるギリギリと思われる間合いで左右に分かれて跳び、そのまま数回転がる。

「！」

リオレウスは先程と同じく軌道を変えることが出来ず、数歩走った後に地面に倒れた。

「よし！いまだ！！」

アッシュとリンは武器を構え、倒れて隙の出来たりオレウスの左後

方から駆け寄る。

「グオオツ！」

「！？」

リオレウスは倒れた状態で背後に駆け寄る二人を睨むと、体を揺らして尻尾を右から左に大きく動かし二人目掛けて振る。

衝撃！

「ぐっ！」

「うあっ！」

勢いは大したことはないが、二人はガードが完全に出来ていない状態でその攻撃を受け、後方に飛ばされる。

「無事か！？」

「っ・・・ああ！」

「平気よ！」

ガンドウィルの声に受身とり、バックステップで距離をとりながらアッシュ達に応じる。

リオレウスは起き上がると身を低くし、大きく羽ばたく。

「飛び掛るぞ！」

パグフィが叫ぶように、リオレウスはリンを狙い飛翔した。

「!?!」

「させるか!」

アッシュはリンの前に出ると、大剣で防ごうと構える。

衝撃!

「っ!?!」

あまりの威力に大剣だけでは受けきれず、衝撃が体中に伝わる。

後ろに突き飛ばされたかけたところを、リンの手を借りて止まった。

「っ・・・大丈夫!？」

「ああ!」

（なんて威力だ・・・!）

即座に体勢を立て直し、リオレウスを睨む。

リオレウスはアッシュを蹴った後、そのまま空へと飛んでいた。

「今度はこっちか・・・」

パグフィが構えると同時に、リオレウスは息を吸う。

ドウッ！

リオレウスはパグフィ目掛け、火を放つ。

「おらっ！」

ボオン！

パグフィはそれを左に跳んで避ける。

しかし、リオレウスはすでに次の火球を放つために息を吸っていた。

「まだ来るぞ！」

「！」

ドウッ！

リオレウスは間髪いれずに火を放つ。

「くそっ！」

ボオン！

パグフィは毒づきながらそれを盾で防ぐが、少し遅れたためにバランスを崩し、しりもちをつく。

ドウッ！

「なにつ!？」

更にもう一発。パグファイは無防備。

「パグファイ!!」

アッシュが叫ぶが、ここからではどうにもならない。

ボオン!

「ぐっ……おっ……!」

「!……ガンドウィル!？」

見ると、ガンドウィルがパグファイの前に立っていた。

ガンドウィルは大剣での防御が間に合わないと判断したのか、両手を顔の前で交差させて火球を防いでいた。

「大丈夫っ!？」

リンが叫ぶ。

「俺のことはいい!今は敵を見る!!」

「!」

ガンドウィルの気迫に^お圧され、リンがびくつとする。

バサッバサッバサッ。

リオレウスが余裕を感じさせるほどゆっくりと下降する。

無防備にも思えるが、物凄い風圧で近づくところではない。

（このままじゃまずいな・・・）

アッシュがなんとかならないかと打開策を考えるが、敵の行動を把握できていないので、どうにもならない。

（それに比べて・・・）

リオレウスを見ると、体に無数の傷があった。

おそらく、今までに何人ものハンターと戦闘を繰り返して来たのだろう。

（さっきの尻尾で攻撃してきたことといい、かなり戦い慣れている・・・！）

バサッバサッバサッ・・・ドスン。

「グオオオオオッ！」

リオレウスが着地すると、愚かなハンター達を嘲笑うように咆哮。

一方的な状況のため、ハンター達を緊張させるには効果があった。

「・・・ちくしょう！」

パグフィが苛立った声を出す。

（俺のせいでガンドウィルに傷を負わせちまった・・・！）

パグフィが目の前に立つガンドウィルを見る。

「はあっ、はあっ・・・」

ガンドウィルはなんとか大剣を持って構えてはいるが、明らかにダメージが大きいとわかるほど辛^{つら}そうな表情だった。

（ちくしょう！あのトカゲ野郎・・・！）

「ガンドウィル、しばらく休んでくれ」

「ぐっ・・・すまん・・・」

ガンドウィルが申し訳なさそうに言い、邪魔になるといけないと思つたのか少しずつ離れていくが、パグフィにはその言葉が痛く感じられた。

（謝るのは俺のほうだぜ・・・）

パグフィはもう一度『ちくしょう』と小さく呟く。

「うおおおおっ！」

敵の攻撃の後ではこちらが攻撃するチャンスがないと判断したのか、パグフィは槍を構えてリオレウスに突っ込む。

「やめろ！パグファイ！」

（危険だ！真正面からじゃ攻撃できたとしても、反撃を受ける可能性が高い！）

リオレウスはパグファイを真正面に捉え、大きく息を吸う。

（火球だ！）

パグファイはそう判断すると、リオレウスが口を向けた瞬間、右に回避。

ドウツ！

「遅え！」

火球を避けた後、パグファイはリオレウスの間だらけな顔面にガンランスを突き付ける。

「くらえ！トカゲ野郎！」

ボオン！ボオン！ボオン！

続け様に三発、ガンランスが火を吹く。

「グオオオオオオツ！？」

顔面に攻撃をまともに受けたリオレウスはたまらず仰け反る。

「おおおおつ！」

「だぁぁっ！」

少し遅れてアッシュとリンが攻撃。

ガァァン！

「！！」

アッシュの攻撃は翼に当たるも、弾かれる。

ザザァッ！

リンはリオレウスの脚を狙い、攻撃が弾かれることはないが、浅い。

「はっ！」

リンはすぐに距離をとるのに対してアッシュは体勢を崩していて無防備。

「グオオオオッ！」

アッシュは『まずい！』と思うが、リオレウスはよほどパグファイに腹が立ったのか、既に少し距離をとっていたパグファイに突進する。

「ちっ！」

パグファイは舌打ちをすると巨大な盾で防ごうとする。

衝撃！

「ぐおっ!!」

リオレウスは闇雲に突進しただけだが、重量の差のために盾を構えていたパグフィが後方によるける。

「無事か!？」

アッシュの声。幸い、リオレウスはパグフィと接触した場所で停止し、追撃を受けることはなかった。

「気にすんな!平気だ!」

パグフィが答えるが、アッシュは飛竜と衝突した時の衝撃を知っていたので、まったくのノーダメージということはないだろうと想像した。

(やっぱり、畏もなしじゃきついな・・・)

アッシュは『イヤンクックを討伐することばかりに気をとられていたせいで』と悔やむが、今はそんなことを考えていても仕方がない。

(くそっ!このままじゃまた・・・!)

そこまで考えて、あることを思い出す。

「!・・・リン!そういえばお前、畏を持ってなかったか!？」

その言葉にリンが、はっとする。

「う、うん、でも・・・」

「なんで早く言わないんだ!!」

『仕掛ける暇がない』と言おうとするリンの言葉を遮って、アッシュがリンを責めるように言う。

(な、なによ・・・)

リンは急に怒鳴られて複雑な気分になる。

「・・・すまん。・・・とりあえず、罨を張るのにはここじゃ危険だ。俺達のことはいいいから、逃げ道に仕掛けて来てくれ」

「う、うん・・・」

アッシュの真剣な表情に気圧されて、リンが走って行く。

(くそっ！リンにあたったりして・・・らしくもない)

リオレウスがリンを追わないかと気を配るが、リオレウスはパグフィが気に入らないらしく、睨み付けている。

「どうやら惚れられたらしいな」

パグフィが軽口を叩くが、状況は芳しく^{かんば}ない。

(全員疲労した状態。俺はダメージは大きくないが、さっきのガンドウィルのダメージが心配だ。それに・・・)

ちらっとパグフィを横目に見る。

（パグフィはそのことで苛立っている・・・）

『下手な真似をしなければいいが』と懸念しながら構える。

「グオオオツ」

リオレウスが唸るが、攻撃はしてこない。

（攻撃を待っているのか？・・・このままじゃ、パグフィがまた突っ込むかもしれない。その前に俺が罠になるか・・・！）

「おおおおおっ！！」

わざと大きな声を出してこちらに注意を引こうとする。

「！！」

狙い通りリオレウスがアツシュの方に顔を向ける。

「いくぜっ！！」

パグフィも槍を構えて疾走する。

「！」

リオレウスは右と正面から一斉に攻撃を仕掛けてきたことに気づくと、体を持ち上げ大きく息を吸う。

（火球か・・・！？）

しかし、さつきまでとは動きが違つと判断すると、二人は下手に近づくの止める。

ボオオオン！！

「うおっ！」

「！！！」

リオレウスは二人のどちらかを狙うことはせず、地面に火球を放ち翼を羽ばたかせて後方に跳ぶ。

幸い、二人は止まっていたために直撃することはなかった。

「野郎・・・っ！」

黒煙が止み、パグフィがリオレウスを睨む。

（遠くで攻撃を待っていても反撃のチャンスはないし、こちらから攻撃しても今のようには避けられては意味がない・・・！）

多くのハンターが散つた理由を体感しながら、アッシュは考え続ける。

（隙があるとしたら、突進して倒れたときに尻尾が当たらない場所から攻撃するか、さつきのようには火球を放つたあとくらいか・・・）

『しかし、前者は難しいし、火球の後を狙われることをリオレウスも考えているかもしれない』とまで考えて、ある別のことを思う。

（こんなんじゃない、またアイツに笑われるな・・・）

『お前は心配しすぎなんだよ』と、よく笑われていたことを思い出す。

確かに、アツシュは色々なことを考えすぎるために思い切った行動が苦手だった。

「よし！」

アツシュは何かを決意すると、リオレウス目掛けて走り出した。

その頃、リンは罨を仕掛けるために移動していた。

「はあっ、はあっ・・・」

（・・・この辺で大丈夫かしら・・・）

罨を張るには道が狭くなっていたため少し走って広いところに出たが、まだアツシュ達が見えるほどの距離だった。

リオレウスがこちらにこないか警戒しながら、もしリオレウスが来る前に仕掛けが作動しても人間くらいなら通れるように、左右にある程度の余裕を持たせて罨を仕掛ける。

罾を仕掛けながら、リンには気になることがあった。

（あのリオレウス・・・あれは、リオレウスなの？）

もちろん、他のハンターにそう問えば『間違いなくリオレウスだ』と返ってくるだろう。

だが、リンの知っているリオレウスは違った。

（姿は同じ。でも、色が違う）

だからだろうか、リンにはあのリオレウスを見てもなんの憎悪も沸かなかった。

結局、よくわからないまま『後でアッシュに聞こう』と思い、考えるのをやめる。

そして、ガンドウィルのダメージ。

（あれから攻撃に加わってなかったけど・・・もしかして動けないくらいだったとか・・・？）

リオレウスの火球の威力の程度がわからないリンは、『まさか』とその考えを否定する。

（・・・それにしても、アッシュもガンドウィル達も、なんであんなに弱気なのかしら？）

『四人もいれば勝てるのでは』という考えを捨てきれないリンが納

得いかにむつとした。

（確かに、さっきまで不利だったけど・・・それは相手の行動がわからなかっただけで、慣れればなんとかなるんじゃないの？）

しかし、『この前のように迷惑はかけられない』という思いもあるので複雑だった。

「・・・よしっ！」

罾を仕掛け終わるとリンはアッシュ達を呼びに戻ることにした。

アッシュは走りながらとにかく単純なことだけ考えた。

（奴を怯ませて近づく。そして攻撃だ！）

リオレウスとの距離が縮まると、リオレウスは他の敵が動かないと見てアッシュに狙いを定める。

「くられっ！」

アッシュは腰にしまっていた剥ぎ取り用のナイフをリオレウスの眼を狙って投げた。

「！」

流石の飛竜も眼は弱いのだろう。首を持ち上げて攻撃を躲す。

「もらった！」

その隙を逃さずアッシュが斬り掛かる。

ドシュッ！

「グオオッ！！」

引きずるようにして持っていた大剣を水平に振り、リオレウスの脚にヒットさせる。

続けて、アッシュがナイフを投げたと同時に好機とみて走り出していたパグフィが突進。

「！！」

リオレウスが少し遅れてそれに気付き、先程のように体を持ち上げ、大きく息を吸う。

「させるかよっ！」

ボオン！

「！？」

パグフィのガンランスは射程距離には及ばなかったが、爆音にリオ

レウスが驚き、火球を吐くのを止める。

「おおおおおおおっ！」

猛々しい声とともにパグフィの後ろから姿を現したガンドウィルが、リオレウスの首目がけて大剣を振る。

ドスッ！！

大剣は硬い鱗に阻まれ深く刺さることはなかったが、それなりのダメージにはなったハズだ。

「ぐっ……！」

大剣を持ったガンドウィルの表情が苦痛に歪む。

（……やはり、ガンドウィルはさっきの火球で火傷を負っている……！）

ガンドウィルは激痛を耐え、それをなんとか堪えて大剣を抜き、構え直す。

その時、遠くからリンの声が聞こえた。

「アッシュ！罫仕掛けたわよ！」

「！」

その声に反応するが、今はリオレウスから目を離してはいられない。

「グオオオオツ！」

リオレウスは首を斬られ怯んでいたが、体勢を立て直すと改めて火球を吐きだした。

ボオン！

「ぐっ！！」

「ぬうつ！」

距離をとっていたパグフィはそれを回避できたが、ガンドウィルとアッシュは近くにいたために避けられない。

二人とも大剣でガードするが、爆風に耐え切れず後ろによろめく。

「・・・っ！」

爆風が止むと、アッシュは二人に視線で合図する。

・・・ついでに叫ぶ。

「走れえええっ！！」

言い終える前に三人とも振り返り、一斉に駆け出す。

「ぬおおおっ！」

皆、必死の形相で走る。

端からみたら面白いくらいだが、本人たちは真剣そのものだ。

「グオオオオッ！」

後方に跳んでいたリオレウスが着地して体勢を整えると咆哮。簡単に逃がすつもりはないらしい。

「早く！急いで！」

リンが手を振って三人を呼ぶ。

「うおおおおっ！」

（リンのところまでもう少し距離がある！）

そう思った瞬間、ガンドウィル達の動きが鈍くなった。

「！」

（やっぱり、二人ともダメージが残ってるか！）

ガンドウィルはいうまでもないが、パグフィも火球を二発と突進を防いでいる。

疲労は当然のことだが、ここにきての失速はキツイ。

（俺が囷になるか！）

アッシュはその場で停止。振り返って大剣を構える。

「来い！」

言われずとも、リオレウスは翼を大きく羽ばたかせ、飛び掛かるところだった。

「アツシュ、すまねえ、たすかつ・・・」

パグフィが振り返りアツシュに礼を言おうとするが・・・。

「っ！？」

リオレウスはアツシュを飛び越え、パグフィを狙ってきた。

「なっ・・・！？」

アツシュは咄嗟に追いかけるが、間に合わない。

「パグフィ！」

リンが叫ぶ。

どんっ！

『このままでは衝突する』と思われた時、パグフィが何かに突き飛ばされる。

「っ！・・・ガ、ガンドウィル！？」

ガンドウィルはパグフィを突き飛ばすと、大剣を構えず、両手を伸ばした。

（受け止める気か！？無理だ！！）

アッシュが『避ける』と叫ぼうとするが、その数メートル後ろにリンが立っていることに気づく。

「！！」

リンもそのことに気づく。

（また、あたしのせいで・・・！？）

リンも『避けて』と叫ぼうとするが、もう間に合わない。

「グオオオオッ！」

リオレウスはガンドウィルを邪魔だと判断したのか、そのまま構わず脚の爪で攻撃する。

衝撃！！

「ぐっ・・・おお・・・っ！！」

「！！」

パグフィがその状況に絶句する。

なんと、ガンドウィルは後方に押されながらもリオレウスの攻撃を受け止めていた。

「っ!!……ばかな……っ」

アツシュはあまりの出来事にそんな言葉を漏らす。

「!？」

リオレウスも『自分の攻撃が受け止められたということが信じられない』といった表情になる。

しかし、アツシュが驚いたのはそれだけではなかった。

「……これは!？」

リンもアツシュと同じことに気付く。

リオレウスの攻撃を受け止めるガンドウィルの体からは赤いオーラのようなものが立ち籠^こめていた。

「これは、『鬼人化^{きじんか}』だ!!」

『鬼人化』とは、双剣使いの中でも達人クラスの人間にしか自由に使えないとされる奥義だ。

一時的に使い手の能力を大幅に上昇させるが、その分、反動も相当なものになる。

「た、たしかに、双剣使いでなくとも『鬼人化』を使うことは理論上可能と言われているが……」

双剣使いの『鬼人化』は敵に息もつかさぬほどの高速で攻撃するた

めのものだが、ガンドウィルのそれは『素早さ』ではなく『力』だった。

「どうなってやがるんだ・・・!？」

パグフィが『訳が分からない』といった表情をしている。

（パグフィが驚く様子を見た限り、発動は初めて！しかもガンドウィルはさっきのダメージが残っている・・・!）

『すぐにやめさせなければ』と思い、叫ぶ。

「やめろ、ガンドウィル！体が持たなくなるぞ！」

アッシュは言うが、そうしようにも出来ないだろう。

「ぐっ・・・!!」

「グオオオオツ!!」

リオレウスが大きく息を吸うと、ガンドウィル目掛けて火球を吐き出した。

ボオオオオン！

ひととき大きな音を出して火球が爆発。ガンドウィルは防御する暇もなく直撃を受け、リオレウスは反動で遠く後方へ飛ぶ。

「が・・・はあ、っ・・・!」

ガンドウィルは力尽き、その場に倒れる。

「ガンドウィル!!」

アッシュとパグフィが駆け寄る。

パグフィは槍と盾を捨て、ガンドウィルの左手を肩にまわす。

（武器なんか後でアイルーに運ばせでもすればなんとでもなる!）

アッシュはリオレウスから目を離さず、大剣を構える。

「グオオオオツ!!」

着地したリオレウスが咆哮する。

リオレウスが今度はアッシュを狙い、息を吸う。

その少し前にパグフィがガンドウィルを引きずるようにしてリンの元に到着。

「アッシュ!早く!!」

リンがアッシュを呼ぶが、今はそれどころではない。

ドウツ!!

「くそっ!!」

毒づきながらリオレウスの火球を大剣で防ぐ。

ボオン！！

「うおおおおっ！」

防いだ後、すぐさま振り返り、全力で走る。

「リン！スイッチを押せ！！」

「う、うん！！」

アッシュに言われるとリンはシビレ罨を思いっきり踏みつける。

ガチッ！！

重い音とともにスイッチが入る。

（罨の辺りを通れるか・・・！？）

あと何秒で罨が発動するかわからないが、アッシュは直進することにした。

「グオオオオオッ！！」

リオレウスがもう一度大きく息を吸う。

ドゥーン！！

「アッシュ！！危ない！！」

「?!」

リンの言葉に振り返ると、火球がもの凄いスピードでせまっていた。
(今避けたらガンドウィルたちに当たる!!)

ボオン!!

「ぐおっ!!」

「アッシュ!?」

防御する間もなく背中から火球を受けたアッシュは前方に飛ばされ、数回転がる。

ダメージは大きかったが、幸いなことに大剣は背中にしまっていたので、多少ダメージを減らすことができた。

「グオオオオオッ!!」

リオレウスは体勢を立て直すと、すぐさま突進してきた。

「アッシュ!!」

「ぐっ・・・」

リンがアッシュに近寄り手を差しのべると、アッシュはそれを掴んで立ち上がり、二人ともシビレ罠の範囲から抜け出す。

「・・・・・・・・バチバチバチッ!!」

「グオオオオオオッ!!?」

全員が罾の範囲から出た瞬間、罾が発動し突進していたリオレウスがそれに掛かる。

「はあっ・・・はあっ!!」

「早く・・・医者に・・・!」

全員、今は罾に掛かったリオレウスよりもガンドウィルのダメージの方が気になり、急いでその場を離れた。

リオレウスが見えなくなった頃。

アッシュは負傷していたため、パグフィがガンドウィルを引きずるようにしたまましばらく歩くが、まだキャンプには距離があった。

ぴーーーーーっ!!

パグフィは先程から指笛を鳴らすのをやめなかった。

通常、戦闘続行は不可能と判断されたハンターは、事前に契約金を払っているアイルー達に（手荒だが）運ばれることになっている。

そして、そのアイルー達を自主的に呼ぶ合図が指笛だった。

ぴーーーーーっ!!

「パグファイ・・・」

リンが声をかけるが、その後に続く言葉が浮かばない。

「ちくしょうっ！なんで来ねえんだ！クソ猫ども！」

ぴーーーーーっ！

ハンターが死亡した場合でもアイルー達はハンターをキャンプまで運ぶ。

アイルーが来ない理由には二通りあった。

ひとつは先程のように戦闘状態であつたりして危険な場所の場合。

そして・・・。

（手荒に動かすと生命の危険がある場合・・・つまり、ほとんどがもう手遅れの場合だ・・・）

状況から考えて、後者なのは明らかだった。

しかし、パグファイはそれを受け入れられず、指笛を吹き続ける。

ぴーーーーーっ！

「ちくしょう・・・ちくしょう・・・っ！」

「もう・・・やめる・・・」

ガンドウィルが口を開く。

「・・・！ガンドウィル！？」

皆、ガンドウィルに視線を向ける。

「俺は・・・」

「ガンドウィル！喋るな！今、医者ところに連れて行くからな！
！」

バグフィが励ますように言うが、実際にそうなるにはかなりの時間が必要だった。

「いいんだ・・・それより・・・」

言うつと、ガンドウィルはリンの顔を見つめる。

「！」

それを察すると、リンはガンドウィルの前に立った。

「やはり・・・似て、いるな・・・」

ガンドウィルが、ふっと力無く微笑む。

「・・・？」

「・・・お嬢ちゃん。あんた、ガンドウィルの恋人だった奴に似て

いるんだよ」

「え……?」

「そうか、それで……」

アッシュは納得するが、リンには何の事だかわからない。

「しかし、君は……アイツでは、ない……」

（もうこの世にいないアイツと、このお嬢さんを重ねていても、アイツには関係ない）

そう理解してはいたが、それでもリンの容姿に惹かれていた。

「……っ」

リンはこんなときに何も出来ない自分に苛立った。

「っ!!……いいん、だ……」

ガンドウィルは痛みを堪え、リンの心中を察したように言うと、リンの頬に手を当てる。

リンは今にも泣き出しそうな表情でガンドウィルの顔をじっと見つめる。

「そんな……顔を、しないでくれ……」

涙を必死に堪えるリンにガンドウィルが消えそうな声で言う。

「っ……うつ……」

リンは必死に泣きそうになるのを耐えようとすが、遂に泣き出してしまった。

「……」

もう、誰が見てもガンドウィルがそう長くはないことは明白だった。

「……」

ガンドウィルが困ったような笑みを浮かべてリンを見つめる。

（泣いている顔もそっくりだな……）

ふっ、と笑うとガンドウィルは、そっと目を閉じた。

リンの頬から手が離れ、力無く垂れる。

「……ガンドウィル……？」

パグフィが消え入りそうな声で名前を呼ぶ。

しかし、もう、反応はない。

「ガンドウィル……」

屈強な戦士の亡骸は、仲間を守った達成感からか、穏やかな表情だった。

「・・・すまねえ・・・ガンドウィル。すまねえ・・・」

パグフィは叫び出すこともなく、ただひたすら、ガンドウィルの亡骸に謝り続けた。

アッシュ達は家に帰りつくと、無言のまましばらく過ごした。

アッシュはリオレウスの火球によって火傷をしていたのだが、このときはそれどころではなかった。

「・・・」

何があったのか知らないペケも、なんとなく察したのか、黙っていた。

「・・・ねえ、アッシュ」

「・・・」

返事はせず、視線だけをゆっくりとリンに向ける。

「あたしが・・・もつと・・・」

（もつと早く罫を張れば、もつと早くリオレウスの強さに気付いて

いれば、もつと強ければ・・・)

様々なことが浮かぶが、どれも言葉にならない。

そしてまた、この時アッシュは一つの事を決意した。

「・・・そうだな」

「・・・え？」

リンが顔をあげてアッシュを見つめる。

(俺は、また仲間を守れなかった。そして・・・)

「お前が、もつと役に立ってたらな・・・」

「・・・ごめん」

リンは突然のことに驚きながらも、謝る以外返す言葉が見当たらない。

「ごめんで済むかよ・・・っ!」

「・・・っ!」

リンは眉を寄せ、唇を噛む。

(ガンドウィルが死んだ時、俺は別のことを考えていた・・・)

「この前から、ちつとも成長してないじゃないか」

「・・・」

(『ああ、リンじゃなくてよかった』と、心のどこかで思っていた・
・・)

「何が『四人なら大丈夫』だ。飛竜を甘くみるな!」

「・・・」

リンは泣き出しそうになりながら、必死に耐える。

(リンはもう、俺にとって大切過ぎる)

「お前があるとき、ぼさつと突っ立っていなかったら、ガンドウイ
ルも助かっていたかもな!」

言うアッシュの胸が痛む。

(もし、俺の力不足で・・・、いや、どんな場合にせよ、リンが死
ぬようなことになれば、俺は・・・)

沈黙。

室内には時を刻む時計の音と風の音しか聴こえない。

アッシュはソファに腰掛け、うつむいたまま。

リンはベッドの上でアッシュの言葉に耐えるように体を丸くしてい

る。

「・・・」

少しして、アッシュが口を開く。

（だから・・・）

「お前、才能ないよ。・・・ハンター、辞める」

「えっ・・・？」

あまりの出来事に、リンはアッシュの顔を見つめたまま硬直する。

アッシュはずっとうつむいたままで、表情は伺えなかった。

リンがなにか言葉を探すが、出てこない。

「出ていけ・・・」

「！」

「出ていけ！元々、お前とはこんなに長く付き合っつもりはなかったんだ・・・。迷惑なんだよ！いつも足引っ張りやがって！」

アッシュはリンの顔を見ずに怒鳴る。

「・・・っ！」

リンは何も言わず、しばらくアッシュを見つめていたが、急に立ち

上がり家を飛び出した。

「リンさまっ!?!」

「ペケ!」

「!」

リンを追おうとしたペケをアッシュが止める。

「・・・」

ペケはその場に力無く立ち、うなだれる。

長い沈黙。

外からは子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。

もう、夕方になる。

『これから、あの子供たちは家族の元で暖かな会話をしながら夕食を摂るのだろうか』などと考える。

不意に、アッシュが口を開く。

「なあ、ペケ」

「!」

急に声をかけられてペケがびくつとする。

「はい、ですニヤ」

「俺は、リンと出会ってどれくらいかな・・・？」

「・・・7ヶ月ほどですニヤ」

「・・・そうか」

「・・・」

沈黙。

（短い・・・でも・・・）

「なあ・・・ペケ・・・」

「はい、ですニヤ・・・」

アッシュはしばらく間を置く。

ゆっくりと、息を吸う。

「楽し、かったなあ・・・っ・・・」

息を吐くと同時に言うが、その声は震えてはつきりと言えなかった。

リンのベッドの近くには、リンが始めての依頼の報酬で『私の分』
と言って買ったプーギーの時計が。

その隣にはリンの17歳の誕生日に知り合いの皆を呼んでバカ騒ぎをしていた中、二人にピントを合わせて撮った写真が。

窓のカーテンはもともと白だったが、リンが『これから暑くなるし』と言って水色に変えた。

食器棚にはリンが『お揃いだね』などと笑って、アッシュが『恥ずかしいから止めろ』というのも聞かずにそれぞれの名前を書いた食器が。

様々な物たちが、この家にもう一人の住人がいることを物語っている。

彼女の名残は、すぐには消えてくれそうになかった。

第7話 それぞれの決意

リンが家を出た次の日。

アッシュはいつものようにソファアーの上で目が覚めた。

（・・・ソファアーの上で寝てたのか）

とりあえずアッシュは身体を起こそうとする、が。

「っ！」

リオレウスの火球による火傷の痛みに、起こす途中で体が硬直する。

（一日経って悪化したか・・・？）

『医者に塗り薬でももらっておけば良かった』と今さら後悔する。

ふう、とゆっくりと息を吐き、痛みによる汗を額に浮かばせながら起き上がる。

その痛みをなるべく意識せず、なぜソファアーで寝ていたのかを考える。

（昨日は長いこと飲まなくなった酒を久しぶりに飲んだんだっただろう）

どうやら、酔っていてそのままいつものようにソファアーで寝たようだとわかった。

『ベッドが空いているのにソファで寝るなんて滑稽だな』と自嘲気味に思いながら身体を起こす。

はあ、とため息を吐く。

体がだるい。

無意識にベッドに目を向けるが、すぐに逸らす。

キッチンではペケが朝食の準備をしている。

それを確認すると、とりあえずこれからのことを考えることにした。

（あのリオレウス・・・もう討伐されただろうか？）

ガンドウィル達は昨日の朝ごろにリオレウスの情報があったと言っていた。

それならば、もう他のハンター達が討伐していてもおかしくない。

（パグフィはどうするだろうか）

もし、まだリオレウスが討伐されていなかったらパグフィの場合、一人でも討伐に行くかもしれない。

（ガンドウィルのこともある。そうじゃなくてもリオレウスは危険だ。早く討伐しなければこの村が被害に遭うかもしれない。出来れば俺も行きたいところだが・・・）

リオレウスの火球により火傷を負った箇所を意識する。

胴と腰の防具の隙間になっていた箇所にはそれはあった。

一応鎧の下にも防具があったのだが、これはオマケ程度のもので、熱を完全に防ぐことは出来なかったようだ。

「・・・」

（少し動いただけでも痛みがある。これじゃ、足手まといになりかねないな）

この状態じゃリオレウスどころか、ランポス相手でも倒せるかどうか怪しいところだ。

（しかし、やはりリオレウスの件は気になる。あとで集会所に行ってみるか）

結局、意識的にリンのことを考えずにペケの料理が出来上がるのを待つことにした。

しばらくして、三人分の朝食が運ばれてきた。

リンは朝になって目覚め、知らない天井を眺めると、ふと『ここはどこだろう』と一瞬思った。

（あつ、そうか。宿に泊まったんだつた）

昨日のあのやりとりの後、宿に泊まる持ち合わせもなく村をうろろと歩いていたら、ペケがやってきて服など数着と今まで依頼をこなしてきた報酬の内、リンの取り分だといって渡した。

その時言っただけとも覚えてる。

「ペケ、アツシュに『嘘つくならもう少しマシなやりかたにしろ』って言うといて」

リンは今まで報酬で分け前として得た分はほとんど貯金していたが、ペケが差し出した額は明らかにそれより多かった。

その言葉を聞いたときペケは一瞬、何か希望を見つけたかのように口を開いていたがすぐに『その意味』を理解して大袈裟に頷いていた。

ペケに『これだけでいい』ともらった額の半分以上を無理矢理返した後、リンは数ヶ月前に一度だけ泊まったことのある宿に泊まったのだった。

ゆっくりと体を起こし、ふう、とため息を吐き出す。

（また、居場所がなくなっちゃった）

膝を抱えるようにしてベッドの上に座り、俯く。

そして、これからどうするかを考える。

（パグフィとアッシュは、リオレウスを討伐しようとするかな？）

アッシュにあんなことを言われた後でも、それは気になっていた。

そもそも、リンには昨日のあの言葉がアッシュの本音だとは完全には信じられなかった。

（信じたくないだけだったりして・・・）

実際、リンは幾度となくアッシュの足手まといになってきたし、仲間になるのも元々は少しの間だけの約束だった。

（本当に、迷惑だったのかな・・・？）

人はいつも肝心な本心を隠すし、他人はそれを予想しても知ることは出来ない。

アッシュが今まで我慢していた可能性もある。

そう思うと胸が苦しくなる。

「ああっ、もうっ！」

迷いを振り払うようにベッドの上に立ち上がる。

（悩んでも仕方ないよね）

『とりあえず何かしなきゃ』と着替え始める。

普段着に着替える途中、昨日まで使っていた鎧が目に入った。

「・・・」

リンはそれを手にとり、少しの間眺める。

色々なことがあって、やっとの思いで揃えることの出来たランポスシリーズ。

最後のランポスグリーブが家に届いて、リンが『これであたしも少しはハンターらしくなったでしょ？』といった時のアッシュの表情。

呆れたような、喜んでいるような顔。

『あの時にも、あたしを迷惑に思っていたのかな』と少し考えるが、止める。

（立ち止まっても、何も出来ないんだ・・・）

「・・・よしっ」

そういつて自分を励ますように気合をいれると、普段着ではなく防具を装備する時の服に変える。

『集会所へいつてみよう』と思った。

とりあえず行動。そうしなければ何も始まらない、というのが彼女の考え方だった。

（・・・もし、アツシュに会ったらどうしよう）

『アツシュがあたしを見つけて、失望したような眼を向けてきたら』と思うと不安で手が震える。

しかし、それもまた『悩んでも仕方ない』と考えるのを止める。

それでも、手の震えは止まらなかった。

パグフィは目が覚めると、ベッドから身を起こし、すぐに目に入ったのはガンドウィルの遺品となってしまった大剣と鎧だった。

「・・・っ」

（寝覚め悪いな）

そう思ってからすぐに『お前のせいじゃねえんだぜ』と心の中でガ

ンドウィルに詫びる。

リンが泊まっているそれとは別の宿。

元々、パグファイ達はこの村に長く居座るつもりもなかったので、宿にそれぞれ一つずつ部屋を借りていた。

ガンドウィルの死後、宿の主人にそのことを伝えて、彼が借りていた部屋を整理した。

（あの時、ここの主人は特に驚いてなかったな）

きつと、そういったことは少くないのだろう。

パグファイ自身もそれはわかっていた。

二人は色々な街や村を渡っていたが、前の日に笑顔で挨拶を交わしていたハンターが次の日から二度と見かけることがなかった、なんてことは実際、幾度となくあった。

（まさかお前がそうなっちまうとはなあ）

『それも、俺のせいで』と拳を握り締める。

（ごめんな、また足引っ張っちまった・・・）

そう思い、大剣に向けて謝るよくに頭を下げる。

そして、決意する。

（ヤツは、絶対に俺が仕留める・・・！）

心の中でそう誓うとパグフィは立ち上がる。

（『復讐なんてバカバカしい』ってお前ならいうだろうな。そうだ、これは俺が勝手にやることなんだ。・・・それでも）

ガンドウィルが使っていた大剣を見つめる。

（それでも、今だけはお前のためにやることなんだって思わせてくれ）

心の中でそう告げると、パグフィは身支度を始めた。

彼の頭の中には『リオレウスはもう討伐されている』という考えはなかった。

その理由を問えば彼は『リオレウスの名前聞いただけでビビる奴等だ、それはねえだろ』とでも言うだろう。

（出来るだけの準備は昨日のうちにしておいた。今、預けてあるガンドウィルの遺体を故郷まで運ぶ馬車は明日来る。それまでにヤツを仕留める！）

支度を終わると、パグフィは『行って来るぜ』といって部屋から出た。

「さあて、と」

ニナはいつもの時間に集会所に着くと、夜勤の娘に『おつかれさま』
といって交替すると、いつものように資料を整理し始めた。

他の村ではどうなのか知らないが、この村では一日中、集会所を開
けている。

それは、ハンターの中には夜中に帰ってくる者も多く、そういった
者達が祝杯も挙げられないのでは申し訳ない、という理由からだっ
た。

元々、ここは酒場ではないし、別に酒場はあるのだが酒場は夜中に
は閉まるうえ、集会所に入り浸っても特に気にする者もない。

実際、朝なのにも関わらず、ニナの目の前では酒盛りをしているハ
ンター達がいくらかいた。

その他にもニナはよく知らないが、中には夜のほうで活発に行動す
るモンスターもいるらしく、そういったモンスターの討伐に出かけ
るハンター達もいた。

ニナは資料を整理しながら、彼らを眺める。

（はあ、こんなに男の人がいるのに、なんで私っていまだに彼氏も

いないのかしら)

『周りの人たちは美人だとか言ってくれるけど、寄ってくるのは歳の離れたオジサンばかり』などと思いながら、二ナの頭の中には一人の男性が思い浮かぶ。

(あの人って鈍感だから、気づいてないんだろうなあ)

そしてまた、ハアとため息を吐く。

(元々は興味なかったのにね)

ぼんやりしていた二ナはハッとして仕事にとりかかる。

その時、集会所に入って来たハンターの中に見知った顔を見つけた。

「あつ、リンちゃん！」

二ナに声をかけられると、リンは少し躊躇うような素振りを見せたが、すぐに返事をした。

「おはようございます・・・」

彼女と話すとアッシュのことを聞かれそうな上、昨日のイヤンクック討伐依頼の報酬も多分まだもらっていないだろう。

面倒になるのを避け、他に二人いる受付嬢のうちどちらかに話かけるつもりだった。

「おはよう。今日は一人なの？」

『情報を見に来ただけなのかな』と思い、リンの胸中を知らない二ナが笑顔で問いかける。

二ナの言葉にリンは一瞬、顔を強張らせたが、二ナはそれに気付かなかった。

「はい」

「・・・？」

リンが暗い表情でそう答えると、二ナが不思議そうに見つめてきた。どうやら、イヤンクツクの報酬のことには気付いていないようだった。

「二ナさん。依頼の確認をしたいんですけど」

「えっ？あ、うん。どの依頼？」

いつになく真剣な表情で問うリンに、二ナは一瞬戸惑ったが、すぐに手元の資料を調べる。

「リオレウスの依頼です」

「えっ！？」

なるべく他のハンター達に聴こえないように注意しながらリンが言う、二ナの表情が強張る。

「・・・うん。これ、ね。ハイ」

ニナは少しぎこちなくそう言うと、依頼内容が書かれた紙をリンに渡した。

『飛竜リオレウス討伐』

依頼人：王国騎士団

依頼内容：ハンター諸君に飛竜リオレウスの討伐を依頼する。出来れば我々が始末したいところだが、奴を討伐しようとした部隊が全滅し、こちらにもかなりの被害が出ている。奴は現在、ニサカの森と丘か、その周辺に出没しているらしい。既に二つの村が奴の被害に遭っている。これ以上の被害を出さないためにも早急に始末してもらいたい。

人数制限：1パーティ（但し、本依頼に関しては緊急のためパーティの人数制限は6人までとする）

（まだ残ってる・・・！）

他のハンターに討伐されていないか懸念していたが、それは無用な心配だったらしい。

（でも、確かこれが届いたのは昨日。皆が気付いてないハズはない）

『ということは』と辺りのハンターを見て、リンは言葉にならない憤りを感じた。

(この村にも危害が加わるかもしれないっていうのに・・・)

「・・・これ、受けます」

リンが依頼書を、バンと叩きつけて言う。

「えっ!？」

その言葉に二ナは驚きを隠せなかった。

「ア、アツシュさんと一緒に・・・？」

かろうじて二ナがそう問う。

「いえ、一人です」

リンが至って真剣な表情で、アツシュとパグフィが来る可能性をなるべく考えずに言った。

「だっ、ダメよそんなの!!」

二ナが大声をあげた事で、少人数ながら騒いでいた集会所の中が静まり返る。

「あっ・・・」

皆の視線が二ナに集中し、彼女は羞恥心に頬を赤く染める。

「・・・受けます」

改めてリンが言う。

「だっ、ダメっ！一人でなんて危ないでしょ！」

二ナその言葉に、周りのハンター達は『あのお嬢ちゃんが一人で狩りに出ようとしてるから止めてるのか』と思ったのか、辺りに少しづつ話し声が聞こえ出すと、すぐにまた喧騒で溢れた。

事情を知らないハンター達の中から『好きにさせてやれよ』などという声まで聞こえてきた。

二人は睨むように見つめあったまま、どちらも譲る気はなかった。

そんな時だった。

「じゃあ、俺と一緒に行ってやるよ」

あまりにも軽い調子の発言に、リンが不機嫌を隠そうともせず、その声の主を睨む。

二人は『野次馬が勝手にその気になったただけだろう』程度に思っていた、が。

「パグファイ！」

リンが声の主を見て驚く。

「よっ」

パグフィは片手で挨拶をすると、リンの横からカウンターに身を乗り出すようにして二ナを見る。

「姉ちゃん、俺と一緒に文句ないだろ？」

パグフィは軽い口調だが、どこか威圧を感じさせる言い方で問う。

「えっ・・・で、でも」

二ナはたじろぎながらも、まだ納得できない様子だった。

「・・・」

パグフィは何も言わなかったが、絶えず二ナに威圧を感じさせる視線を向けていた。

「うつ・・・わかりましたあ」

半ば泣きそうになりながら二ナが頷くと、パグフィは満足そうに依頼書にサインしだした。

「・・・これでよし」

パグフィが書き終えたあと、一応リンがその内容を確認する。

「え？6人？」

リンが言うように、登録人数は6人と書かれてあった。

しかも、パグフィ、リン、アッシュと名前が書かれていたが、それ

以外には適当な名前を書いてあった。

「一応、な。火傷か怪我で来れねえんだろうけど、もしかしたらアツシユも来るかもしれないし、俺達みたいに現地で誰かと会う可能性もあるだろ？名前なんて誰も気にしねえしな」

「・・・来なかったら？」

「そんなときや別に『来なかった』でいいんだよ。でも、ばったり会って手伝わせた拳句に報酬も無しじゃ、なんて言われるかわかんねえしな」

そう説明されて『なるほど』とリンが納得する。

「さあ！出発だ！」

「うんっ」

そう言つて二人は集会所をあとにした。

「・・・はっ!？」

二人が出て行つたあと、取り残されたかのように二ナは呆然としたままだったが、急にぜんまいが巻かれたかのように動き出した。

（こ、怖かったよ・・・）

へなへなと力無くカウンターに凭^{もた}れ掛かる。

その時、二ナは視界の隅に一匹のアイルーの姿を見つけ、顔をあげ

る。

（あれ？ペケちゃん・・・？）

ペケと思われるアイルは二ナと目が合った瞬間、はっとしたかと思つと四本足を使つてすぐさま走り去つた。

「・・・？」

二人がウオレフの森と丘に向かう途中。

いつものように広大な草原をただ道にそつて歩く。

「・・・なあ、リン」

「なに？」

「お前、一人で行くつもりだったのか？」

バグフィが真剣な表情で問いかける。

「・・・うん」

どう答えようか少し迷ったが、リンは頷いた。

「どうする気だったんだ？」

「どうするって・・・」

リンが答えに戸惑っていると、パグフィが口を開いた。

「一人で行って、リオレウスを倒せるとでも思ってたのか？」

パグフィが少し強い口調で言う。

誰から見てもリン一人でリオレウスを倒せるとは思えない。

『なんでそんな無謀なことをしたんだ？』と咎められて^{とが}いるようなものだ。

もちろん、それには理由はあった。

しかし、リンは黙って俯いてしまった。

「・・・まあいい。俺も来たしな。お前にも思つところがあったんだろ」

パグフィがそういうと、口にはしないが『この話は終わりだ』という雰囲気になる。

「ねえ、パグフィ」

「なんだ？」

「なんで、他のハンター達はリオレウスを討伐しようとしなのかな」

「簡単だ。あいつらが腑抜けだからだよ」

パグフィがそう答えるとリンは黙ってしまった。

「結局はそういうことなんだよ。王国騎士団が気を使ってパーティの人数制限を6人にしてただろ？『なら6人の方が良いけど、6人もない』とか『俺は今日、もう依頼を終えた』だとか言ってるよ」

パグフィが『見て見ぬフリをしているだけだ』というと、リンは集会所にいたハンター達に憤りを感じずにはいらなかった。

結局二人とも黙ったまましばらく歩き、二人はウォレフの森と丘に着くとキャンプを張り、それを終えたとリオレウスを探すために歩き出した。

「ところで、パグフィこそ一人で勝てると思ってたの？」

パグフィは集会所で『アッシュは火傷か怪我で来れねえんだろうけど』と言った。

ということとは、それを初めから考えていたということだ。

そして、リンはまだ駆け出しを卒業した程度。アッシュが来ないならリンも来ないと考えていておかしくなかった。

「俺はお前と違って、ちゃんとココ使ってたんだよ」

といって、パグフィは自慢げに自分の頭を指す。

「ごめんね、使ってなくて」

じとつとした目でリンがパグフィを睨む。

「まあ、聞け。俺は昨日の内にアイルー達を雇って、幾つか罠を仕掛けさせたんだよ」

「罠？シビレ罠とか？」

「いや、アレはガンナー（飛び道具使い）以外はなかなか使い勝手が悪いからな」

リンはそれを聞いて『確かに』と納得する。

昨日、シビレ罠を使った際も、もう少し遅れていたらアッシュも巻き込まれていた。

（それは、ちょっと早めにスイッチを押したせいなんだけど）

だが、押すのが遅れて、罠が発動するまでにリオレウスまで通り抜

けてしまつては意味がなかった。

そう考えると、確かに使い勝手は悪い。

「原始的じゃあるけどな。落とし穴をいくつかと、オマケ的なものと、あと大タル爆弾を用意させておいた」

「大タル爆弾？」

大タル爆弾といえば、たまにリンも使う小タル爆弾とは比べ物にならないほど大きい、人の身長の上の半分以上の樽に火薬を仕込んだものだ。

アッシュから『対飛竜戦の時に使われることがある』と聞いていたリンは『どうやって運ぶの?』と思っていたが、今になって謎が解けた。

「置いてある場所までおびき寄せられなきゃ意味ないけどな」

そういつて、パグフィはリンに罠と大タル爆弾が設置してある場所を説明した。

「でも、それつてメラルーにとられちゃったりしないの?」

リンがふと浮かんだ疑問を口にする。

メラルーと呼ばれる黒毛の獣人族は、ペケのように人に雇われて働くアイルー（こちらは毛の色が様々で、ペケや多くのアイルーは白）と違って、様々な場所に生息していて、よくハンター達の物を盗む。

一応、野良のアイルーもいるが、こちらはハンターの物を盗むことはない。

リン自信メラルーには嫌な思い出があったので、言うリンの表情はどこか苦々しかった。

「それは問題ない。わざわざそのためにマタタビとかサカナ渡して一時手を出さないように交渉したからな」

『色々やったせいで金がかっちまったけどな』とパグフィは言う。

「へえ、そんなことできるんだ」

次々と知らない事を教えてもらって、リンは素直に感心する。

「ま、これが成功するかどうかはその地域によるけどな。メラルーにも人柄、って言って良いのかわかんねえけど、そういうのがあるからな」

「へっっ」

『そうなんだ』と更に感心する。

自分の住んでいるところのメラルーの人柄？が良いと言われたようで悪い気はしなかった。

「アイツを倒すためなら出来る限りのことはやりたかったからな」

そういつて、パグフィは急に真剣な表情になる。

「・・・うん」

少し気まずい雰囲気になり、リンは控えめに頷いた。

それから、少しの間黙って歩いていたが、不意にパグファイが口を開いた。

「なあ、リン。お前、アツシュと何かあったのか？」

「え・・・な、なんで？」

パグファイは気まずい空気が嫌になって言っただけかもしれないが、リンは突然のことに戸惑いを隠せなかった。

「いや、なんとなくなんだけどな。お前、さっきから全然アツシュのことについて話さないだろ？」

パグファイの勘とは知らず、動揺してしまったリンは『しまった』といった表情になる。

「おいおい、悩みがあるんならこのお兄さんに言ってみるよ」

と、パグファイがおどけて言ってみせる。

リンは『むしろ慰めるのは自分のハズなのにな』と思いつつ、パグファイの優しさを嬉しく思った。

「うん・・・」

リンが昨日のことをパグファイに話そうと思ったその時。

バグフィはリンよりも先に飛竜のものとされる羽音を聴いた。

バサアツバサアアツ

「この音・・・！」

少し遅れて、リンもそれに気付く。

その音は少しずつ近くなり、それにつれ、次第にそれを聴く二人に緊張感が漂ってくる。

さっきまで軽い調子だったバグフィは、その音をリオレウスのもので確信すると、打って変わって険しい表情になる。

リオレウスもハンター達に気付く。

バサアツバサアツ・・・ズウオオオオオ・・・ン・・・。

二人に向き直ったりリオレウスが軽い地響きをあげ、着地する。

「グウウオオオオオオ・・・ツ」

リオレウスが唸る。

その口からは黒い煙のようなものがたちこめていた。

（怒ってる・・・！？）

リンは『なぜ』と、そのことに驚愕する。
きょうがく

「どうやら、俺のことを覚えていてくれてたみたいだぜ」

パグフィがリンの心境を理解したのか、そう説明する。

「いくぞ！」

「うん！」

二人は即座に武器を構える。

「さあ、第2ラウンドだぜ！大トカゲ！！」

その言葉を合図に、二人はリオレウス目掛けて駆け出した。

「アッシュ様ッ！」

集会所を走り去ったペケは、そのまま直ぐにアッシュの家に帰って来た。

「ペケ、どうしたんだ！？」

椅子に座り、集中できないまま本を読んでいたアッシュが立ち上がろうとする。

「っ！！」

「あっ！？アッシュ様、安静にしてないとダメですニャ！」

ペケを宥めようとしていたアッシュが逆に安静にするように言われると、アッシュは仕方なく椅子に座りなおす。

アッシュは朝のうちに集会所に行く予定だったが火傷のことを知っていたペケにやめるよう説得され、代わりにペケに様子を見に行ってもらっていたのだった。

「それで、どうだったんだ？」

「そ、そうでしたニャッ！リン様がつ！リン様があのパグフイって
いう人と一緒にリオレウスの討伐に行っちゃったんですニャー！」

「っ！！」

アッシュはガタンと音を立てて椅子が倒れるのも気にもせず立ち上がるが、火傷の痛みに呻く。

「ああっ！？アッシュ様っ！安静に・・・」

「安静になんて・・・してられるか！」

ペケの言葉を遮ってアッシュが言うが、額には火傷の痛みによる汗が浮き出ていた。

「あのバカ・・・っ！」

ペケはどうにか落ち着いてもらおうとアッシュを宥める。

「くそっ！」

アッシュに焦りと悔しさが押し寄せる。

「アッシュ様……」

アッシュの気持ちを察したのか、ペケが弱々しくアッシュの名を呼ぶ。

少し考えた後、アッシュはゆっくりと口を開いた。

「ペケ、頼みがある」

「おおらあっ！」

パグフィは気合いとともにガンランスによる突きを放つ。

「！」

リオレウスはそれが自分の眼を狙っていると判断すると、即座に首を持ち上げて回避。無防備なパグフィを睨む。

（火球か！？）

パグフィはそう判断するが突きを外した後で隙だらけだった。

リオレウスが口を開こうとしたその時。

「だあああつ！」

リンが掛け声とともにリオレウスの背後から駆け寄る。

それに気付いたリオレウスは眼だけを動かしてリンを睨むと、尻尾を器用に動かしリンを狙う。

リオレウスに軽く払われたリンは一瞬呻くが、すぐに空中で体をひねり地面に激突することなく受身をとる。

好機とみたリオレウスはすぐにリンに向き直り、その勢いを利用してパグフィを尻尾で攻撃すると同時にリンに狙いを定め火球を放つ。

「ちいっ！」

舌打ちをしながらパグフィが尻尾の攻撃を盾で防ぐ。

リンもすぐに高速でこちらへ向かってくる火球に気付くと、体勢を立て直しきらないうちに右に跳んで火球を回避する。

ズドオオツツ！という爆発音とともに、土と石が飛び散る。

リンは『なんとか避けられた』と、ほっと胸を撫で下ろす気分だった。

「リン！まだだ！」

パグフィの声にハツとするリンの目の前には巨大なりオレウスの毒爪が迫っていた。

「なっ・・・！？」

リオレウスはリンが火球を回避することを読み、右に避けた瞬間、翼を飛ばたかせ大きく跳躍。脚を地面と垂直に構えて蹴ろうとする格好で狙っていた。

（くそっ！！）

リンは心の中で悪態をつきながら地面に足が着いた瞬間に更に右に跳ぶが、巨大な爪が頬を裂き、鮮血が飛び散る。

「しまった！！」

『傷はそんなに深くない。けど、あの爪には毒があるハズ』と思うと、一瞬めまいがして着地の時にバランスを崩す。

多分、このめまいは毒を意識したことによる過剰反応だろうが、このままでは実際に立ってもいられなくなるだろう。

「こっちだ！！」

パグフィが叫びながらリオレウスに駆け寄る。自分を狙っているうちに解毒薬を飲め、ということだろう。

リンは腰のポーチから青い液体、解毒薬を取り出そうとするが緊張

からか、それとも毒の効果か、手が震えて上手く掴めない。

着地したリオレウスは背後に向き直ると、パグフィには目もくれずにリンに突進する。

（一人ずつ確実に潰す気が！？）

「避ける！リン！！」

「えっ・・・？」

焦ったパグフィの声に震える手で解毒薬の瓶を取り出していたリンがリオレウスに気付く。

リオレウスはすぐ目の前。

リンは全力を振り絞って間一髪突進を回避する。しかし。

「あっ・・・！？」

リンが手に持っていた解毒薬の瓶のフタが外れ、中の液体が飛び散る。

パシヤツと草の生い茂った地面に液体が落ちると同時に、リンの表情からサツと血の気が引く。

リンは解毒薬を一つしか持っていなかった。

よほどのことでもない限り、毒は微量の解毒薬で治ると聞いていたので、一本で数回は使えると思っていたからだ。

パグファイから解毒薬を受け取るうにも、その暇もなさそうだった。

（良くねえ状況だな）

リオレウスから眼を離さず、パグファイは思う。

予想外なことはすぐに起こった。

二人はリオレウスと対峙したあと、すぐにパグファイの言っていた落とし穴の場所へ誘導し、見事にリオレウスを落とし穴へはめた。

飛べるとはいえ、突然のことに動じてすぐには動けまい、と二人は即座にリオレウスに駆け寄った。

だが、怒ったリオレウスは二人が近づくよりも早くに地面に向かって火球を放ち、反動と翼を利用して落とし穴から脱出してのけた。

更に悪いことに、その事でリオレウスの怒りの度合いはそれ以前よりも酷くなった。

パグファイ達は落とし穴が無駄だと判断し、今度は大タル爆弾が置いてある場所へ誘導しようと試みた、が。

リオレウスは罠にはめる前よりも更に俊敏に動き、攻撃は重くなっていた。

二人は先程から、一方が狙われるともう一方が注意を惹^ひき、ダメー

ジを最小限に留めることだけで精一杯で、誘導どころではなかった。

その上にこの状況。最悪といっても過言ではなかった。

「ギギヤアアアアアッ！！」

リオレウスは向き直ると二人を嘲笑うように咆哮。

「ちっ！」

轟音にパグファイが顔をしかめる。

どうやら、リオレウス自身も自分が優勢であることを理解している様子だった。

パグファイはなるべくリオレウスから目を離さないようにし、ちらつとリンを見る。

リンとパグファイは数メートル離れている。

走って解毒薬を渡しに行くのは二人とも狙われる可能性があり、危険だ。

かといって、瓶を投げて渡したとして、今のリンでは受け取れないかも知れない。

地面に落ちるだけならまだいいが、こぼれたり、瓶が割れたりすれば、もう解毒薬はない。

（リンには悪いが、少しの間辛抱してもらえないかな）

リオレウスがリンを狙うとみたパグフィはガンランスのトリガーを引いた。

切っ先から爆発音とともに炎があがる。

といっても、ガンランスの砲撃は目の前で爆発する程度。離れていれば当たらないのは承知の上だ。

それでもリオレウスの気を惹くには充分だった。

昨日のことがトラウマにでもなっているのか、リオレウスは爆発音に過剰に反応し、パグフィを睨む。

（ちょっと敏感すぎやしないか・・・？）

それはそれで狙い通りなのでいいが、パグフィには懸念する事があった。

（思い過ぎだといいいんだが・・・）

リオレウスはパグフィを忌々しそうに睨むと突進。

パグフィはそれを巨大な盾で攻撃を防ぐと、衝突の反動で盾が弾かれた。

・・・ように見えたがそうではなく、パグフィは衝撃を受けきつたと判断すると、即座に盾をずらし、ガンランスを突き出していた。

「っ、くらいやがれ！」

切っ先から着火装置のような火が吹き出るが、これ自体は攻撃ではない。

ドゴオオオオオオツツ！！

切っ先から物凄い爆発が起こる。

ガンランス最強の技『竜撃砲』だ。

飛竜のプレス攻撃を模したガンランスの砲撃のうち、通常は連続で放つ砲撃を一発に込めて放つもので、飛竜にさえも重傷を負わせることが出来ると言われている。

しかし・・・。

「ちくしょう！避けやがった！！」

リオレウスはガンランスから出る火を驚愕したように凝視すると、即座に翼を羽ばたかせ、地を蹴るようにして空へ逃げていた。

その為、かすった程度で大したダメージにはなっていない。

（嫌な予感が当たっちゃった・・・）

パグフィが懸念していたのはこのことだった。

このリオレウスは過去ガンランス使いに重傷を負わされた事があるのだろう。

だからこそ竜撃砲に対して即座に反応し、避けた。

（くそっ、どうする！？）

竜撃砲は連発出来るものではなく、一度放てばしばらくの間放熱しなければならない。

それに、この様子では何度やっても避けられるのは目に見えている。対飛竜戦において、長時間の戦闘は体力を消耗するばかりで不利になる一方だ。

いかに早く重傷を負わせるかが重要なのだが、落とし穴も、竜撃砲も失敗。

リンも毒で体力が失われてきている。

打開策を考える暇もなく、リオレウスは上空から爪を構え、パグフィ目掛けて急降下してきた。

ガンランスを折りたたんで背負っていたパグフィは、それを走ってぎりぎりのところで回避するとともにポーチを探り出した。

地面を揺らすほどの重量のリオレウスが着地。攻撃が失敗したとわかると首だけ動かし、パグフィを睨む。

「リン！受け取れ！！」

『もう悩んでいる余地はない』とパグフィが祈るように言って解毒薬の瓶を投げる。

（大丈夫！受け取れる！）

リンもそう自分に言い聞かせ、受け取ろうと震える手を差し出す。

ドシューッ！！

聞きなれた嫌な音。

火球だ、と二人はわかったが、問題は狙った場所だった。

そう、このリオレウスは解毒薬のことを知っていたのだった。

だから、それを狙った。

ジュウツと瓶が蒸発する音がしたのかどうかも二人にはわからなかった。

「あ・・・」

リンが硬直する。

解毒薬はもう、ない。

「ちくしょおおおおおっ！！」

パグフィが背負ったガンランスを構えるが、それより先にリオレウスが向き直り、パグフィに噛み付く。

パグフィはそれを回避すると、すぐさま首を狙って突く。

ドスツと刺さった感触があるが、浅い。

「グオオツ!？」

大したダメージではないハズだが、リオレウスは怯む。

見ると、いつの間に走ってきたのか、リンがリオレウスの脚を斬りつけていた。

パグフィは『無理をするな』と言おうかと一瞬悩んだが、やめた。

リオレウスが怯んだ隙にリンは回転しながら尻尾の裏を、パグフィはもう一度首を攻撃すると、バックステップで距離をとる。

(冷静になれ。冷静に……)

焦って突っ込んでいるだけでは返り討ちにあうのは目に見えている。

それより先に、リンの毒をどうするかが問題だった。

そこでパグフィは『確かこの近くで解毒草が採取できるハズだ』と思いつく。

しかし、リンがそこまで無事にいけるかも問題だし、パグフィ一人でリオレウスの相手が出てくるかどうか怪しい。

リオレウスは距離をとったパグフィ目掛けて走る。

突進だというのはパグフィにもすぐわかった。

しかし、リオレウスは数歩足を踏み出したかと思うと、走りながら火球を放った。

突進を避けようとしていたパグフィは突然のことになんとか盾を構えるが、踏ん張れる姿勢ではなかったために、盾が弾かれ、痺れた手では耐えることが出来ずに盾を手から離してしまった。

「しまった!!」

「パグフィ!!」

リンが叫ぶが、突進中のリオレウスの注意を惹く方法はない。

「ちくしょう!!」

回避は出来そうにない。

毒づきながら、受けきれないのを承知でガンランスを構える。

パグフィはガンランスをリオレウスに噛み付かせる形で受けたが、やはりそれだけでは止められない。

それどころか、ガンランスを胸元に押し返され、更にリオレウスの顔面に衝突して、突き飛ばされる。

背中を地面に打ち付けたパグフィから呻く声が漏れる。

体をひねり、ゴロゴロと横に数回転して、なんとか起き上がろうとした時には、リオレウスは既に火球を放とうと、息を大きく吸い込

んでいた。

「・・・!!」

パグフィがそれに気付くが、体が動かない。

確実に避けられないと体が理解していた。

「やめろおおっ!!」

リンが必死に叫びながらリオレウスに駆け寄るが、間に合わない。

無情にもリオレウスは火球を放つ。と、思われたとき。

ドゴオオオオン!!

「グギヤアアアッ!？」

リオレウスの首に何かが直撃したかと思うと爆発。火球は放たれることなく、火の吐息となって消える。

その突然の出来事に、リオレウスだけでなく、ハンター達も驚愕する。

だが、二人にはなんとなくだか、それがどういうことを意味するのか理解出来た。

パグフィは集会所で『現地で誰かと会う可能性もある』といったが、リオレウスの情報は既に出回っている。実際に他のハンターと出会う確立なんて全くといってない。

そう、最初から来る人間なんて限られていた。

「来るのが・・・遅えんだよ・・・！」

バグファイがキツい口調で言う。

しかし、その表情には薄らと笑みが浮かんでいた。

呆れるほどベタなタイミング。

小高い崖の上に、その影はあった。

太陽はその影を照らすためといわんばかりの位置にあつて、直視できない。

その影はゆっくりと呼吸をして、言った。

「ごめんなさあゝい！遅れちゃったわあゝっ！」

「・・・は？」

そのあまりにも頓狂な声にハンター達だけでなく、言葉が通じないはずのリオレウスまで硬直する。

そんなことにはお構い無しに、突如として乱入した大男は、その隣で指をV字にしている初老の男と共に『決まった』とでもいいいたそんな笑みを浮かべていた。

「ジェインさんに・・・クリフさん!？」

リンは突然の出来事に戸惑いながらも、二人の名前を確かめるように呼ぶ。

ジェインはそれには答えず、リオレウスを睨み、言った。

「さあ、第3ラウンドかしら？・・・いくわよ！トカゲちゃん！」

第8話 希少種

それは、あまりにも想像を絶する出来事だった。

絶体絶命の状況。主役が登場するにはこの上ないタイミングで現れたのは、不気味な口調の大男と飛竜との戦闘には無理がありそうな初老の男だったのだから。

「な、なんだ？あんたら・・・」

パグフィは、きつとりオレウスも話すことが出来れば同じような事を言っただであろうことを口にする。

「あらあ、助けに来たのに、『なんだ』とは失礼ねえ」

ジエインは頬に手のひらを当て、体をくねくねさせながら言う。

その、クックシリーズと呼ばれるピンク色主体（しかもなぜか普通のものより濃い）の防具一式（頭以外）を身にまとった姿はあまりにも・・・。

（こ、こいつぁ・・・キツイ・・・！）

パグフィはなんとかそれを声に出さずに飲み込んだ。

「あ、あの・・・」

ただでさえ毒で体力が失われてきているリンは、更に悩みの種が増えたように先程よりもめまいが酷くなった気がした。

『気持ちは嬉しいんですけど』とリンが言おうとしたその時。

「ギィアアアアアア！！」

突如として現れた二人を目障りに思ったリオレウスが火球を放つ。

「おわあっ！？」

「やだ！？ちよつとお！！」

ジェインとクリフは一瞬狼狽^{うろた}えながらも即座に反応し、崖から飛び降りる。

二人が立っていた場所が火球の爆発で削られ、粉々になった石が飛び散った。

ドオオオン！と重量を感じさせる音をあげてジェインとクリフが着地する。

「んもう、少しくらい待てないのかしらねえ」

などと愚痴りながらも、ジェインは巨体である本人が楕円形^{だえん}に丸まったらこのくらいだろうか、と思うほど巨大なハンマーを、クリフは別段巨大でもないが身軽なライトボウガンを構える。

リンよりも小柄なクリフがジェインの隣にいと、まるで親分と子分のようにだった。

とにかく、どうやらこの予想外な乱入者達は簡単に帰る気はないよ

うだ。

「リンちゃん。目、瞑っててねえ」

「・・・え？」

片手でポーチから何かを取り出していたジェインは、リンの了承も得ないうちに玉のような物を投げた。

「閃光玉だ！」

パグフィの声に反応し、同時にリンも閃光玉から目を逸らして強く閉じる。

リオレウスはそれが何かわからず、火球で焼こうかどうか迷っているように眺めていた。

ドシュウウツツ！

物が爆発し、それと同時に蒸発したような音を出しながら、閃光玉が破裂する。

「グギヤアアアアアアッ！？」

それを直視していたリオレウスが怯む。

飛竜とはいえ、閃光玉を直視すればしばらく物も見えないはずだ。

リンは目を瞑つても尚、感じる光に顔をしかめていたが、少しして何かの音に気がついた。

ゆっくりと目を開ける。

まだ少し眩しいと感じる景色の中、ブォンブォンと何かの音が聞こえる。

その音はジェインが立っていた位置から聴こえた。

「ら〜ら〜ら〜」

「げっ!？」

バグファイが不吉な物をみたかのような声を出す。

それもそのはず、ジェインは歌いながら巨大なハンマーを振り回し、自分も回転しながらジリジリとリオレウスに近づいていた。

色んな意味で現実離れた光景だった。

「必殺!愛のおっ!島あ流しいいあああああっ!」

ドォッゴォォォォン!!

回転していたジェインは意味不明な呪文を唱えながら、目をつぶされてフラフラしていたリオレウスの頬に遠心力を利用したハンマーの強烈な一撃をお見舞いする。

ズドォォォォォ・・・!!

無防備にその攻撃を受けたりオレウスは呻くことも出来ずに体勢を

崩し、殴られた方向へ倒れる。

「なっ・・・!？」

そのあまりにも想像を絶する光景にパグフィが口を開き、突っ込むのも間に合わないといった様子で呆然としていた。

ただ、何よりも驚愕したのは、この突如乱入したオカマが、散々苦戦していたリオレウスをいとも容易くたやすダウンさせたことだというのは確かだった。

「どう？トカゲちゃん！私のハンマーの威力は!？」

先制をとったことで得意気な表情のジェインが余裕を見せる。

「そうだ！アンタらは確か、村にいた・・・どうしてこんなところに来たんだ!？危険だって聞かなかったのか!？」

なんとか質問が出来る程度には落ち着いたパグフィが問う。

「どうしてって、私たちも昔はハンターやってたからあ・・・」

「リオレウスなんて大物、ハンター時代に拝めなかったもんでなあ、ジェインが入手したって情報を聞いて二人で話したらハンター魂に火がついちまったってわけよ」

続けてクリフが説明し、ジェインがそれに頷く。

「はっ？ハンター・・・？」

二人が元ハンターだとは知らなかったパグファイが目丸くする。

（村で見かけた時から変わってる奴らだとは思ったが・・・）

「そういう事。ある程度の事情は二ナちゃんから聞いたわ。二人くらい加わっても問題ないでしょ？」

「あ、ああ」

確かに、現役ではないとはいえ、いまの攻撃を見た限りでは加勢としては問題ない。

「さあて、それじゃ・・・」

「ジェイン！！」

クリフの声に反応したジェインがリオレウスに目を向けると、眼をつぶされた火竜は倒れた状態でジェインがいると判断した方向に口を開いていた。

火球を放つ一瞬前にジェインが跳んで避ける。

「危ないわねえ！」

ゆっくりと起き上がり、頭を振るリオレウスを睨むジェインを見て、パグファイは悠長に会話をしている場合ではないことに気づく。

（そ、そうだ！こんなこと話してる場合じゃねえ！）

「なあ！二人のどちらでもいい！解毒薬をもってないか！？リンが

毒くらっちゃったんだ！」

パグフィは言っ、て、リオレウスがジェインを狙っている間に盾を拾いに走る。

毒に蝕まれているリンは少しずつ顔色が悪くなってきている。状況はあまり良いとは言えない。

「解毒薬！？あるぜ！」

ライトボウガンでリオレウスに拡散弾を撃ち込みながらクリフが言う。

拡散弾はリオレウスの右翼に着弾すると、少しして一回、二回と連鎖的に続けて三回爆発。

どうやら、先程パグフィの窮地きゆうちを救ったのは、クリフのこの弾のようだった。

「良かった！早くリンに渡してくれ！」

「ああ！」

パグフィは盾を拾うと、眼が回復したりオレウスの攻撃を『いやぁくん』とオカマ走りで必死なのか余裕なのかわからない声をあげながら回避するジェインの加勢に走る。

その途中で、パグフィはクリフが背中に何かを背負っているのを見た。

クリフはライトボウガンを手にとっていたが、その背中にはもう一つ別のボウガンのようなものがあつた。

普通、ボウガンを二つも持つハンターはいない。

ライトボウガンとは言え、片手で扱える代物でもないのであまり意味がない。

それが何のためにあるのか問い掛けたかったが、今はそんな暇はないと判断し、余計なことは考えないようにする。

「ちょ、ちよつとお！いくらなんでも怒りすぎよ！大人げないんじゃないのお！？」

ジェインは流石に一人だけ集中して狙われて余裕がなくなってきたのか、表情が引きつっていた。

「少し待つてろ！今行く！」

パグフィが励ますように言ってジェインとリオレウスに駆け寄って行った。

「エッ、ホッ！・・・ッハア！ハア！！」

クリフは大した距離でもないのに、苦しそうにリンに駆け寄ると、肩で息をしながらポーチを探り、解毒薬を取り出す。

「ほ、ほら、よっ！」

リンより倒れそうな表情でクリフが瓶を差し出す。やはりリオレウスと戦うには無理がありそうだった。

「クリフさん、ありがとう」

リンは弱弱しく微笑んで瓶を受け取ると、すぐにフタを外して解毒薬を飲む。

とても美味しいものではないが、しょうがなく苦い表情で飲み込むと、少し楽になった気がした。

とにかく、これでもう大丈夫だろう。

「よし！それじゃ、いっちょやるか！」

呼吸を整えたクリフが真剣だがどこか楽しそうな表情で言う。

「・・・うん！」

そして、二人もリオレウス目掛けて走り出した。

「うおおおおっ！？」

地声で雄叫びのような悲鳴をあげながらジェインが宙を舞う。

リオレウスがジェインを鼻先で持ち上げ、放り投げていたのだった。

流石にこの険しい状況ではオカマにもなっていられないようだ。

宙で手足をばたつかせるながらもハンマーを離さないジェイン目がけ、リオレウスが一步踏み出し、頭突きをくらわす。

「ぬぐおおっ!!」

ジェインは素晴らしいほどの反応で咄嗟にハンマーを盾がわりに防御するが、耐え切れずに吹っ飛び、岩の壁に叩きつけられる。

更に火球を放とうとするリオレウスの腹部にパグファイが突きを放つ。

ガンランスは腹部にヒット。更にトリガーを引いて爆撃するが、リオレウスはほとんど怯まず、狙いをパグファイに変えて火球を放つ。

「ちっ!」

少しくらいはリオレウスが怯むことを期待していたパグファイは舌打ちをしながらも即座に防御。盾に触れた瞬間、火球が爆音をあげる。

近距離では衝撃の重さも違つようで、完全には耐え切れずパグファイは二、三步後退る。

熱風で気分が悪くなりそうだったが、顔をしかめている暇はない。すぐに距離をとらなければ追撃をくらってしまう。

「くらいやがれ!」

クリフがリオレウスをボウガンの射程に捉え、気合と共に射撃。

ボウガンから放たれた貫通弾がリオレウスの右翼に刺さる。

貫通弾は通常弾より強力で、草食竜の身体くらいなら貫通するといわれているが、流石に火竜の硬い翼膜を貫くことは出来ない。

クリフはこの弾の仰々しい名前を変更して欲しいとギルドに訴えた。衝動に駆られるが、拡散弾は元々高価であり数がなく、既に撃ち尽くしてしまったためにこれで持たせるしかない。

「じいさん、翼じゃダメだ！頭を狙ってくれ！」

「うるせえ！誰がじいさんだ！」

パグフィの言葉を見殺して翼を狙い続けるクリフの横から、両手に提げるように双剣を構えたリンが高速でリオレウスに駆け寄り、流れるような動きでリオレウスの脚を斬りつけ、攻撃を受けないようにそのまま走って距離をとる。

リンの動きにリオレウスが気をとられるが、早すぎて攻撃が間に合わず、眼で追っていたところをパグフィが胴体に向けて爆撃。

リンを狙うのは無理だと思ったのか、リオレウスは全身を動かし、尻尾でパグフィを払う。

「ぐおっ！！」

パグフィは直ぐに受身をとるが、思った通りリオレウスは火球で追い討ちをかけていた。

（ちくしょうっ！こいつはこれしかねえのかよ！？）

心の中で毒づくが、受身をとった後ですぐには動けないため、有効な攻撃ではあった。

パグフィの目の前に火球が迫る。

同時に、視界の端に何かが近づいて来ることに気づいた。

（何だ！？仲間か！？モンスターか！？）

・・・いや、オカマだ！！

「そおおおれええっ！！」

ボゴオオオオン！！

突如横から飛び出したジェインが火球をハンマーで超過激なゲートボールでもやるかのように弾き飛ばした。

「よくもやってくれたわね！ほら、あなた！反撃開始よ！！」

ジェインはハンマーを構えたまま、背後のパグフィに喝を入れるように言う。

先程の攻撃で鎧が汚れ、ところどころ傷がついているが、まだ充分動けるようだ。

「あ、ああ・・・！」

（もうこいつは何でもありそうだな）

「ギヤアアアアアアッ！！」

リオレウスは少し離れた場所からボウガンを撃ち続けていたクリフに突進。

「ぐおおっ！！」

元々体力のないクリフは避けきれずに直撃を受けると、そのまま吹っ飛んで地面を転がる。

「クリフさん！」

リオレウスは背後から駆け寄り斬りかかろうとしたリンを捉え、巨大な尾で払う。

「うあっ！！」

リンが耐え切れずに吹っ飛ばされると、リオレウスはすぐにパグフイ達を睨む。

「いくぜええっ！！」

武器を構え、疾走する二人めがけてリオレウスが火球を放ち、二人はそれを左右に分かれて避けると同時にそのまま飛び掛る。

火竜は首を鞭のようにしならせて空中でガンランスを構えるパグフイを払うと、一瞬遅れて跳んでいたお陰で攻撃を回避できたジェインのハンマーが首元に振り落とされる。

ズドオオオオン！！

「グギエツ！？」

（これは、良い手ごたえね！！）

ジェインが手ごたえを感じた通り、リオレウスは苦しそうな表情で呻く。

ジェインは着地して、更にハンマーを横に振って脚を狙うが、それより前にリオレウスが地面に向けて火球を放ったために、爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる。

「ぬおおおっ！？」

地面を転がっていたジェインが体勢を立て直し、反動を利用して後方に飛んでいたリオレウスが着地すると、全員が距離をとった状態になった。

「皆、平気か！？」

パグフィの声にそれぞれが体に異常がないか確かめるようにして返事をする。

ダメージの大きそうだったジェインも、ポーチから回復薬を取り出して飲み干すと『大丈夫だ』といった視線を送る。

（それにしても・・・）

パグフィはリオレウスを見る。

（オカマの攻撃が効いたのか、大分動きが鈍ってるな。この調子なら、大タル爆弾を使わずにいけるかもな・・・）

仲間が増え、形勢が有利になってきたことで希望が見えてきた。

どうやらそれは皆同じようで、ジェインに至っては大物を仕留めることが出来るかも知れないということに気分が高揚しているようだった。

焦らないようにしながら、それぞれに顔を見合せて頷くと、一斉に動き出した。

まずはクリフが貫通弾を撃つ。

リオレウスは顔面を狙われれば首を動かし避けるだろうが、クリフの狙いは敢えて翼だ。

翼に直撃を受けてもリオレウスは依然として怯まず、当然のように翼膜に穴は空かない。

しかし、牽制^{けんせい}としては充分注意^ひを惹くことが出来た。続けて正面からパグフィとジェインが、今度は最初から二手に分かれて疾走。

不利と判断したのか、リオレウスは空に逃げようと翼を大きく羽ばたかせる。

（させない！）

不意に、リオレウスの死角から姿を現したリンの双剣が、首を斬り付ける。

「ギャアアア！？」

予想もしていなかった攻撃に、リオレウスが驚いたように首を反らせて呻くと、パグフィ達が攻撃出来る範囲まで近づいた。

「これでもくらつてろ！」

元々、頭を地面すれすれまで下げていたリオレウスの口に、パグフィがガンランスを突き出す。

しかし、口内に刃が刺さるかというところでリオレウスは刃を牙で受け止めた。

パグフィは構わずそのままトリガーを引いて爆撃。爆音とともにリオレウスの口内が爆煙で溢れる。

「まだまだいくわよお！！」

リオレウスが苦しそうに爆煙を吐き出しているところを、ジェインが物凄い勢いでハンマーを横に振り、顔面を殴り飛ばす。

ドオオオオン！というその音を聴いただけでその攻撃のダメージを物語っていた。

勝てる！！

誰もがそう思った。

油断していなかったといえは嘘になる。

だが、誰も予想していなかった。

ジェインに殴られたことで、自分の方へ向かってきたリオレウスの下顎を斬り上げたリンの一撃が戦局を大きく変えることになるとは・
・。

世界の至るところで伝えられている昔話で、こういったものがある。

その昔、とはいっても既に『人』が存在した時代。

その時代には『龍』と呼ばれる存在があった。

後に様々な飛竜の祖先とも言われるこの龍は、計り知れぬほどの長い体で、翼もなしに自由に空を舞った。

このころ、人と龍は争うことなく共存していた。

人の子供を背に乗せ、自由に空を舞う龍の姿に、邪心などなかった。

しかし、ある日のことだった。

物珍しそうに龍を触る人の子供が、龍の『下顎のある箇所に触れた』。
すると、今まで邪気のかけらもみせず、穏やかだった龍は怒り狂い、人の子供を喰い殺してしまったという。

もちろん、これは昔話であって、真実は定かではない。

それでも、たしかに『それ』が存在するという話はあった。

現在、多くの種類、数千とも数万ともいわれる飛竜が存在するにも関わらず、『それ』を持つ者は極々稀といわれ、リオレウスには『それ』が存在するとされていた。

とはいっても、それは百頭のうち一頭にあるかないか程度であって、多くのハンターはそのこと自体を知らない。

だから、誰もそんなことを気にしなくて当然だった。

しかし、このリオレウスには『それ』・・・『逆鱗^{げきりん}』があった。

咄嗟に放ったリンの攻撃が、まさか『逆鱗』に触れるとは、誰も考えなかった。

「ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ
ツ
！！！」

大地が震えるようなりオレウスの咆哮。

今までのものとはどこかが違う。

威嚇するためではない。と、全員が直感的に感じていた。

むしろ、苦しんでいるようにも見える。

並々ならぬその形相と、あまりの氣迫に近くにいた三人は後退らずにはいられなかつた。

得体の知らない悪寒が背中を走り、嫌な汗が流れる。

（恐怖・・・？怖い、の？）

不意に、リンの視界にリオレウスの尻尾が物凄い勢いで振られるのが見えた。

いや、正確には見えてはいなかった。

視認できたのは目の前に尻尾が迫った時だった。

(は、や、い、・、・、・、!、!)

防御どころか、少しも動くことが出来ずに直撃を受けたリンが高速でほとんど放物線を描かずに吹っ飛ぶ。

「がつ・・・あ・・・っ」

物凄い勢いで岩の壁に叩きつけられたリンは、そのまま地面に倒れ、起き上がることはなかった。

「なっ・・・」

何が起こったのか、理解しているはずなのに信じられないパグフィが言葉にならない声を出す。

「ぼさつとするな!!」

クリフの声にパグフィがハッとすると、距離をとっていたはずなのにいつの間にか目の前にリオレウスの姿があった。

「危ない!!」

ドンッ!

ジェインがパグフィを突き飛ばし、代わりにリオレウスの突進を受ける。

「っおおおおおっ!!?」

パグフィよりも一回り以上は大きい巨体の持ち主であるジェインが、その重量を無視するかのように軽々と突き飛ばされる。

「おい、どうなって、やがるんだ・・・」

誰にも聞き取れないような声でパグフィが呟く。

先程、苦しそうにも見えたりオレウスは、今はもう苦しそうでも、怒り狂ってもない。

むしろ、冷静さを取り戻しているようにも見える。

ただ、確実に異常だといえるのは、凄まじいほどの殺気。

錯覚か、リオレウスの周りの空間が青黒く歪んで見える。

見るものにはそれが殺意を表しているように思えた。

ゆっくりと、次の獲物を探すように眼を移動させる。

そして、その眼がパグフィを捉えた。

（倒さなきゃ・・・）

徐々に暗くなっていく視界の中、リンはなんとか意識を保とうとしていた。

だが、どんどん意識は朦朧きつろとしてくる。

なぜかはわからない。だが、その時リンの頭に朝のある出来事が蘇った。

それはリンが集会所へ向かう途中だった。

二人のハンターが話をしているのが聞こえた。

盗み聞きするつもりもなかったが、それが自分たちのことだとわかったリンは、ピタリと足を止めた。

内容は、依頼書も出回らない内にリオレウスを討伐しようとして失敗し、あまつさえ死人が出た自分たちのパーティを嘲笑うものだった。

あのハンター達に何がわかっただろう。

そもそも、リオレウスと対峙したそれ自体が偶然だったこと。

死人が出たのは討伐しようとしたからではなく、戦闘を回避する際に仲間を庇った心優しい戦士が犠牲になったこと。

リオレウスに臆して見てみぬフリをするだけの者達に、それを笑う権利などあるのだろうか。

その時、絶対にリオレウスを倒そうと思った。

誇り高き戦士の名誉のために。

胸を張って『大切だ』と言える仲間のために。

（倒すんだ・・・リオレウスを・・・）

リンの意思とは裏腹に、意識はどんどん遠のいていく。

いつの間にか、晴れていた空は曇天どんてんに変わり、今にも雨が降り出しそうだった。

それはまるで、リン達の未来を暗示しているようで不吉だった。

（アッシュ・・・）

立ち上がることも出来ず、とうとうリンは目を閉じ、意識が暗闇の中へ沈んでいくのを感じた。

第9話 単純な言葉

二ナが家の中に入って来た時、アツシュは調合をしている最中だった。

アツシュは彼女の中にはすぐ気づいたが、敢えて気づかないフリをして作業を続けた。

腰を降ろし、黙々と調合を続けるアツシュの前で二ナが立ち止まる。

「アツシュさん・・・」

小さい声で二ナが呼ぶが、アツシュは少しも反応を見せず、調合を続ける。

「アツシュさんっ!」

もう一度、今度は少し怒りを含んだ口調でアツシュの名を呼ぶと、彼はゆっくりと顔を上げた。

その冷たい視線は『今、お前に構っている暇はない』ということを語っているようだった。

二ナは、ぞつとして一瞬怯んだが、アツシュには聞きたいことがある。

「・・・なんで、リンちゃんをリオレウスの討伐に行かせたんですか?」

予想したとおりの質問に、アッシュはため息を吐きたい気持ちだった。

何も反応がないことがわくと、二ナはその場に正座して真剣な表情でアッシュを見つめた。

二ナが聞きたいことの中には、もう一つ『なぜアッシュは行かないのか』というのがあるハズだが、彼女はそれを口に出さない。

「・・・」

しばらく黙ったまま、アッシュは作業を続け、二ナはそんな彼を睨むように見つめ続けた。

「昨日・・・」

不意に、アッシュが口を開いた。

二ナは突然のことにハッとしたが、一言も聞き漏らすまいとするようにアッシュの言葉に耳を傾けた。

「昨日、イャンクックの討伐を終えた後、俺たちはリオレウスと遭遇しました」

アッシュは昔のことでも語るかのように喋りながら、そんな自分を疑った。

話す気になったのは、二ナが納得のいく話を聞くまで帰るつもりがなさそうだったから、ではない。

本人は気づいていないが彼自身、相談する相手が欲しかったのだ。

イャンクック討伐の後、ガンドウィル達と合流し、リオレウスと対峙したこと。

その戦闘で、強大な敵が相手ではリンを守りきれ自信が無くなったこと。

リンに『ハンターを辞める』と言って家を追い出したこと。

そして、今日になってリンがリオレウス討伐へ向かったという話を聞いたこと。

アッシュは調合の作業をしつつ、淡々と話していった。

だが、アッシュはその話の中で自分が火傷を負っていることと、戦闘中にガンドウィルが犠牲になったことを話さなかった。

アッシュが全て話し終えると、二ナは黙り込んで俯うつむいてしまっていた。

少しして二ナが急に顔をあげ、アッシュを見つめた。

「なんで・・・」

「・・・」

「なんで『辞める』なんて言ったんですか!？」

二ナが立ち上がり怒鳴るが、それは覚悟していたことだった。

「それって、アツシュさんに見えない場所なら死んじゃっても良
いってことですか!？」

アツシュはその質問に答えない。

「ああ、だから事情を知ってるのに助けに行かないんですね!？」

睨んだまま、二ナは怒りを隠そうともせず早口でまくし立てる。

アツシュは今までに彼女がこんなに怒ったところを見たことがなか
った。

「私、アツシュさんの事、勘違いしてたみたいです!見損ないまし
た!」

言って二ナは踵かかとを返し、出て行こうとする。

が、怒りを滲にじませながら数歩足を踏み出すと、ピタリと止まった。

「・・・そんな事言われたリンちゃんの気持ち、考えてみなかった
んですか?」

二ナは言ってからアツシュに向き直る。

アツシュはというと『考えなかったわけではない』と自分に言い聞
かせるが、本当にそうか自信がなかった。

「きつとリンちゃん、アツシュさんが何でそんなことを言ったのか、
何となくでもわかったと思いますよ?」

アッシュは『そうだろうか』と自分に問う。返ってきた答えは『多分そうだ』だった。

「急にそんなこと言われて、リンちゃんだったらどうします？ 辞めろって言われて、辞めます？」

また考える。答えは『辞めるハズがない』だ。

（いや、それ以前にリンがハンターになった目的はもしかしたらリオレウスを倒すことだったのかも知れないんだ・・・！）

そんなことにすら考えが回らなかった自分に呆れる。

二ナは黙ったまま、またアッシュに背を向けて歩き出す。

あと数歩で家から出る、というところで二ナはまた足をピタリと止めた。

それから怒りが冷めたのか、深呼吸をして肩の力を抜く。

少しの間、躊躇^{ためら}うように体を揺すっていたが、やがて肩越しにチラッとアッシュを見た。

「あの・・・アッシュさん。リンちゃんを助けるに、行きます、よね？」

振り返り、自信なさげにおずおずと尋ねる。

なんだかさっきまでの勢いが嘘のようだった。が、アッシュにはな

んとなくその仕草の方が先程までの二ナよりはよほど彼女らしいと思えた。

「ええ」

拍子抜けしたアッシュがフツと笑ってから答える。

「本当ですか！？よかった！じゃあ、ほらっ！そんなことしてないで、早く！」

二ナはさっきまで怒っていたのが嘘のようにパアツと顔を明るくし、調査をするために腰を降ろしたままのアッシュの手を掴み、引っ張る。

しかし、パグフィ達のように大柄ではないアッシュとはいえ、巨大な大剣を持つほどの力の持ち主だ。

二ナが必死に唸りながら腕を引っ張るが、ほとんど動かない。

「い、いや、これを調合しないことには・・・」

「はやくく！！」

アッシュが説得しようとするが、二ナは聞かず、腕を引っ張って催促するばかりだった。

「なんだか楽しそうだな」

突然、入口の方から聞きなれた声が響いた。

「えっ!？」

その声にアッシュよりも一瞬早く二ナが反応し、物凄い勢いで振り返る。

視線の先には二人が予想したとおり、その言葉の主であるディールが立っていた。

「よっ」

「ディール・・・？」

アッシュが確かめるようにその名を呼ぶ。

ディールはアッシュにとって歳も近いことからお互いに呼び捨てで話が出来る人物だった。

「邪魔するぞい」

続けて、村長が家の中に入ってきた。

「村長まで・・・どうしたんですか？」

アッシュがそう尋ねたときには二ナは掴んでいた腕から手を離し、落ち着いた様子でオロオロとしていた。

「ふむ、ちょっとお主に用があつての」

村長が長いあご髭を触りながら言う。

「用・・・？」

訝しそうに見るアッシュに、村長が切り出す。

「悪いが話は聞かせてもらったぞ。お主、リオレウスの討伐に行くんじゃない？」

言われて、アッシュは『いつから聞いてたんだ？』と疑問に感じたが、『ええ』と頷いた。

「実はお前が昨日のこと話してた頃からいたんだ」

デイルが悪びれた様子もなく言って、笑う。

（マジか・・・）

「まあ、気にするでない。ほれ」

言って、村長は懷から小さな壺を取出し、アッシュに手渡す。

「なんですか？これ」

壺は封がされていたが、揺らして音がしないことから固形物ではなさそうだった。

「秘薬じゃ。お主、火傷を負つとるじやろ。そこに塗るといい」

「えっ・・・？」

アッシュは村長の言葉に耳を疑った。

昨日はリオレウスとの戦闘を回避した後は家に戻り、誰とも逢っていない。

だから、アッシュが火傷を負っているなんてわかるはずがなかった。

『村長は心が読めるのか？』と勘ぐり始めた時、当の本人は、ほっほっほと笑いだした。

「いや、実はな、お主のところのアイルーが大慌てで何かを探して回っていたようじゃったんで、呼び止めて話を聞いたんじゃない」

そう言われて、アッシュは納得した。

ペケには、秘薬の材料を探して欲しいと頼んでいたのだ。

「お主は確か調合が苦手と聞いておったからの、ワシが代わりに調合をしておいた。ああ、アイルーの方は疲れておったようじゃから家で休ませておる」

村長が言う通り、アッシュは調合が苦手だし、元々秘薬は成功率の低い物なので、ちょっとした賭けではあった。

アッシュは礼を言い、早速秘薬を火傷した箇所塗ることにした。

その火傷を見た途端、村長とディールは顔をしかめ、ニナはそれを見る前に顔を背けた。

アッシュは触るだけで痛むのを耐えながら、秘薬を塗り、それを終わると、ふうと息を吐いて額の汗を拭う。

流石に塗った瞬間に全快、というわけではないが、大分楽になった。

「さて、アッシュよ。少し話をしてもいいか？」

村長に言われ、アッシュは頷いた。

「ええ。・・・調査を続けながらもいいですか？」

その言葉を聞き、村長は改めてアッシュが調査しているものを見た。

「ほう、これは・・・」

それが何か理解した村長は『続けながらで構わんぞ』と了承し、アッシュは調査を続けることにした。

「お主が戦おうとしとるリオレウスじゃが、奴は人間に対して相当な恨みをもっておるようじゃ」

村長の言葉に、三人は何があつたのか大体の推測を試みた。

「まあ、実際に何があつたかまでは知らんが、聞いた話では最近あやつに襲われた近隣の村にはリオレウスに手を出した者はおらんかつたそうじゃ」

（つまり、それ以前から村や街を襲っていた可能性もあるってことか）

アッシュがそんなことを考えていると、ディールが口を開いた。

「じゃあ、もし奴がこの村を見つけたら、まず襲って来ると思ってた間違いないってことか？」

「そうじゃ」

村長が躊躇わず答えると、いつもは楽観的なディールも『そうか』と面白くなさそうに言い、二ナ表情からは、さっと血の気が引く。

村長は押し黙り、辺りには時計の時を刻む音と、アッシュが調合をする時に生じる音しか聞こえなくなる。

場違いな程心地よい風が吹き、カーテンが揺れる。

少しして、昨日と同じように遠くから子供達のはしゃぐ声が聞こえた。

今日は何をして遊んでいるのかはわからないが、無邪気に走り回っているようだった。

アッシュはそれを、昨日とはまた違った思いで聞いていた。

調合が成功し、アッシュは出来上がった物を床に置く。

「成功したか」

「ええ」

アッシュは、ふうと息を吐くと村長を見据えた。

「アッシュよ。今、村には流れ者も含め、多くのハンターがおるが

皆リオレウスに臆して見て見ぬフリをするばかりじゃ」

村長は『嘆かわしい』とでも言わんばかりに首を振る。

「もし、お主らが失敗すれば、もうリオレウスに挑もうとする者はおらんじやろうと思っておる。ワシも、もうこの歳じゃ。まともに戦うことも出来ん・・・」

悔しそうに床に視線を落とし、黙ったかと思うとすぐに顔を上げた。

「アツシュよ、この村を救ってやってはくれんか!？」

懇願するように言って、村長は頭を下げる。

少しの間、全員が黙っていた。

アツシュは村のために戦い、勝利し、村長に『よくやった』と賞賛され、勲章でも受け取る自分の姿を想像しようとして、失敗した。

「村長。申し訳ありませんが、その頼みは聞けません」

「・・・!」

断られたことが予想外だったのか、村長が目を丸くする。

二ナも何か言いたそうだったが、その前にディールが口を開いた。

「でも、リオレウスの討伐には行くんだろ？」

自分で答えをわかっているくせに質問をし、アツシュはそれに頷く。

「ま、そういうことだな」

嬉しそうにディールが言って、笑う。

「ど、どういふことですか？」

二ナが質問すると、ディールは彼女と村長を交互に見ながら話す。

「こいつは村を守るつもりはないけど、リオレウスは討伐しに行く。無事成功すりゃ、村が救われるわけだ。そうだろ？」

そついつて村長に問いかける。

「う、うむ。そうじゃが・・・」

納得できない様子で村長が頷くと、ディールが続ける。

「こいつはな『自分は村を救う英雄なんて似合わない』って思ってるんだよ。だろ？」

今度はアッシュに尋ねる。

「そういうことです。そんな大それたこと任務抱えてたらプレッシャーで戦えませんよ」

アッシュは冗談のように笑ってみせる。

「ふうむ・・・ワシも多くの者を見てきたが、お主もなかなか変わっておるのう」

村長は少し腑に落ちない様子だったが、可笑しそうにアッシュを見た。

「それに、『救います』なんて名言しても、どうなるかはやってみないとわからないですから。それなら、何も言わずにやれるだけやってみないと・・・」

その言葉の途中でアッシュは詰まった。

それを見て二ナが嬉しそうに頷いた。

「そうですよ！そういうことですよ！」

村長とディールも肯定するように頷いていた。

「そのくらいの気持ちでいいんだよ。村のことも、リンちゃんのことな」

「・・・そうか」

ディールの言葉に照れたように頷くと、アッシュは立ち上がった。

「よしっ」

「おっ、アッシュ。行く前に・・・おい、お前ら、持って来てくれ」

ディールはアッシュを引き止めて入り口の方へ向けて声を張り上げた。

アッシュと二ナが何事かと思っていると、二匹のアイルーが大剣を掲げて入ってきた。

「これは・・・？」

アッシュは見たことのないその大剣をまじまじと見つめた。

若葉マークを引き伸ばして柄を付けただけのような、実にシンプルなデザインのそれは、かといって安物には見えなかった。

「ふっふっふ。これはのう、ワシが現役の頃に使っておったこのキヤサリンちゃんをデイルに鍛え直させ、強化して出来上がった、そう！まさにキヤサリンちゃん改・・・」

「カブレライトソードって知ってるか？あれは強力だけど鉱石自体が貴重だからな。そいつを真似てマカライト鉱石だけで作ってあるんだと」

「なるほど、だから青いのか」

アッシュは村長の言葉を遮ったデイルの説明に納得する。

聞いた話では、カブレライトソードはそんな名前ではあるが、貴重であるカブレライト鉱石以外にも鉄鉱石やマカライト鉱石も使っている。

そうやって考えると、マカライト鉱石だけで作られたこの大剣も、なかなかの威力なのだろう。

『しかし』とアッシュは首を振る。

「ありがとう。・・・だけど、俺にはこいつがあるから」

そういつて断ろうとする。だが、手を伸ばし、大剣に触れたところでアッシュの表情は強張った。

「その、ヒビの入った剣か？」

ディールが言うように、アッシュが長い間使ってきた大剣は、昨日のリオレウスとの戦いの時にそうならしく、ところどころ亀裂が走っていた。

これでは、修復も難しい。

「そいつはもう、鍛えなおしても同じものにはならねえな」

ディールは患者に余命でも明かすかのように力無く言う。

「そう、か・・・」

同じものにはならない。その言葉はアッシュの心に虚しく響いた。

このゴレムブレイドは、アッシュにとってただの大剣ではないのだから。

「もらってやってくれねえかな？」

アッシュはしばらく黙っていたが、『早く持ってくれ』と言わんばかりにふるふると震えるアイルー達から大剣を受け取り、改めて眺める。

深い蒼色あおをしたその大剣は、神秘的で吸い込まれそうな錯覚を起した。

「すまない」

アッシュのその言葉は、ディールに向けたようでもあったが、そうでないようにも聴こえた。

「そいつ、威力はカブレライトのそれには及ばないけど、充分保証するぜ。・・・こういうのもなんだけど、俺がお前のために作リたかった『武器』はこんなものじゃなかったんだぜ？」

『こんなもの』と言われたのが気に入らなかったらしく、村長が何か言いかけたが、二ナに『まあまあ』と宥められて止まった。

アッシュはと言うと、『何時から気付いていたんだ』と言わんばかりの表情でディールを見つめていた。

「まっ、それはまたの機会にな」

言って、ディールは笑う。

「・・・ああ、『その時』は頼む」

アッシュは村長とディールに礼を告げると、出発の準備を始めた。

その途中で村長はアッシュが手に持った瓶を訝しそうに見た。

「むっ？ちよ、ちよっと待て！アッシュ！」

村長に言われ、アッシュはピタリと手を止めた。

「どうしたんですか？」

二ナが不思議そうに聞く。

「お主、それを使うつもりか？」

村長が『信じられん』といった表情で言う。

アッシュが手に持っていたのは、強走薬と呼ばれる、一時的にだが走り続けても疲れなくなる、といった効果のあるものだった。

「これが、どうかしたか？」

理解出来ない様子のディールが村長に尋ねる。

しかし、村長が口を開く前にアッシュがそれを遮った。

「少しでも早く着きたいですから」

「じゃが・・・」

「大丈夫ですよ」

アッシュは言うが、二ナとディールにはそもそもが何の話なのかもわからない。

それに構わず、アッシュは続けた。

「大丈夫、俺はこんなことで死にませんよ」

さらっと言ったその言葉は、それでも何か違和感のようなものを感じ、三人の耳に冗談のようにには聞こえなかった。

準備を終え、外へ出て、三人は家の入り口を背にしてアッシュを送る形になった。

「アッシュ。村長じゃないけど、その剣に名前付けなくていいのか？そんな剣、他じゃないだろうから名前がないんだ」

デイルに言われ、アッシュは少し考えてみた。

ちなみに村長が拳手しながら『キャサリンちゃん』を連呼していたが、無視した。

「マカライト鉱石で出来てるんだから、マカライトソードでいいんじゃないか？」

正直、アッシュは自分のネーミングセンスを疑いかけたが、『カブレライトソードよりはカッコいいかもな』とも思った。

「ははっ、シンプルでいいな」

デイルが笑い、ニナも頷いていた。

だが、『キャサリンちゃん』を連呼していた村長だけは、それを聞いた瞬間『キャサ・・・』の辺りで急に止まり、絶望のどん底に突き落とされたような表情になっていた。が、無視した。

「さて、長々と話して悪かったな」

ディールが言うが、アッシュは首を振る。

「いや、皆と話さなかったら、気持ちが整理出来ないままだったからな」

アッシュは『そんなんじゃない』と続ける。

「そうか。じゃあ、リンちゃんに会って、何て言うか決まったか？」

「・・・」

言われてアッシュは逡巡した。

それを見て『やっぱりな』とディールは笑う。

「アッシュ。いいことを教えてやる。難しく考えるな。お前が本当に伝えたいことだけ言えばいいんだよ」

「本当に伝えたいこと・・・」

アッシュは反芻してみる。

「なんにしたってそうだろ？難しく考えてると余計わかんなくなる

んだよ。お前がその剣をマカライトソードって名づけたみたいに、シンプルでいいんだよ」

その言葉にアッシュは『そうか』と呟く。

「ああ、わかった。・・・ありがとうな、デイル」

「ははっ、んなことで礼なんてよせって、気持ち悪い」

デイルは笑い、アッシュも『気持ち悪いとはなんだ』と言って、笑う。

「・・・よし。じゃあ、行ってくる」

アッシュが力強く言うと、デイルと二ナは頷き、少し遅れて村長も頷いた。

「おう。じゃあな」

「気をつけてな」

「いつてらっしゃい。アッシュさん」

そしてアッシュは三人に背を向け、走り出した。

（俺が村を救う、か）

アッシュは平原を駆けながら村長が言った言葉を思い出していた。

（そんな気はさらさらない。でも・・・）

『でも、大切な人達は守りたいな』と、そう思った。

地平線まで見えるほどに広い平原をひたすら走っていると、少しずつ疲労を感じ出した。

しばらく走り、疲労が溜まってきたと感じると、アッシュは強走薬の瓶を取り出し、一気に飲み干した。

瞬間、疲労が一気に消え、走る足に力が漲る。みなぎ

スピードを更に上げ、走る。

（天気が悪くなってきたな）

空は先程まで晴天だったが、少しずつ曇りだしている。

（雨になる前に着きたいところだな）

雨の中を走るのは精神的に辛いものがあるし、足元もとられやすくなる。

少し焦る自分を抑えながら、アッシュは走り続けた。

（パグフィ、リン。無事であってくれ！）

長く続く平原を、アツシユは駆け抜ける。

村にいる仲間、共に戦った仲間を守るために。

そして、無鉄砲でわがままで、優しくて涙もろい相棒に自分の本当の気持ちを伝えるために。

第10話　ちっばけな勇氣

暗雲が空を覆った。

追い詰められた人間にとって、この天候の変化は全く気にせずにいられるものだろうか？

それでも、この状況で「天にまで見放された」と嘆くべきか、それとも「雨が降ればアイツの火も弱まるかな？」と軽口を叩くか、どちらかと問われれば、三人は後者を選ぶだろう。

三人…。現在、パグフィ、クリフ、ジェインの三人はまだ戦闘を続行出来る状態にあった。

リンの姿は今、辺りには見えない。

彼女から離れるようにリオレウスを誘導した、と言いたいところだが実際は違う。

反応の追い付かない猛攻に後退を余儀なくされ、偶然リンから離れることになったただけだ。

…これまでにわかったことが幾つかある。

まず、今のリオレウスは、強い。

正面から立ち向かったところで、その巨軀をもともしない速さで全ての攻撃を回避している。

それどころか、手痛い反撃をくらい、ダメージを負っているのはハ
ンター達のほうだった。

次に、リオレウスは逆鱗に触れたからといって怒り狂っている
わけではない、ということ。

むしろ落ち着いた様子で、元々地面すれすれまで下げていた頭を体
ごと持ち上げ、三人を見下す形で睨んでいた。

その様子だけでも異様なのだが、それ以上に特異なのが、距離が離
れているパグフィ達に対し、質量の無い強風のような勢いで襲い掛
かる気迫……いや、殺意といっていい。

一体、他のどのような生物ならばこのように穏やかな表情で、こん
なにも明確な殺意を放つことが出来るだろうか。

三人はまるでここだけが自分達の住む世界から切り離されたような
違和感を感じていた。

そもそもの原因は言うまでもなく、文字通りリオレウスの逆鱗に触
れたからだろう。

逆鱗について言えば、もう一つある。

リオレウスは逆鱗に触れたリンを狙うことをしなかった。

もちろん、そうでなければリンから遠ざかることなどなかったのだ
が、逆鱗にまつわる昔話を知っていたクリフだけはそのことを疑問
に思っていた。

だが、今はそんなことを考えている場合ではないし、彼は自分の中で一つの仮説を立てていた。

そして最後に、今のリオレウスには小細工は通用しない。

パグフィが仕掛けていた幾つかの罠。それらは元々、飛竜相手には時間稼ぎくらいにしかない物ばかりだったが、リオレウスはそれら全てを意に介さず、または除外した。

更には、翼膜を貫いて翼としての機能を奪おうとしていたクリフの狙いが読まれるようになり、先程まで回避しようとしなかった弾丸を難なく躲すようになった。

そうである以上、もはやほとんどの策は尽きているといっている。

これらの事から導き出される結論。

それは三人がよく理解し、それでいて敵対する者にとって決して考えてはならない事だった。

それを認めようとせず、動いたのはパグフィだった。

「っ！？おいつ！無闇に突っ込むな！！」

パグフィは重量物を持っているとは思えない高速で疾走し、クリフがそれに気付いて制止し終える前に一気にリオレウスとの間合いを詰め跳躍。

この距離で相手がランポスだったならば、今の時点で気づいたところで遅い。

しかし、射程距離内まで近づいたところで突然パグフィは目標を見失った。

消えたわけではない。

そのことは、その視界に迫る地面をとらえていた彼はよく理解していた。

リオレウスは攻撃をくらう前に身をひねり、巨大な尻尾で彼の背中を叩きつけたのだ。

そのことにパグフィ自身が気付いたのは地面に全身を打ち付けた後だった。

「ツぐ、おおあ……っ!!」

仰向けの状態で倒れ、鞭のようにしなる大木で殴られたような背中の痛みと、肺を圧迫する衝撃が遅れてパグフィを襲い、嘔吐するおうとような呻き声が漏れる。

視界がかすみ、一瞬の間呼吸と思考が停止した。

少しでも気を抜けば意識を失いそうだったが、それでもパグフィは即座に痛む全身に鞭をうち、呼吸もままならない状態で必死に油の切れた機械のように体を軋ませながら起き上がろうとした。

地面に着いた手に力が入らず、肺がそんなことよりも呼吸をしろと命令する。

もしリオレウスが追撃するつもりだとしたら本来ならばもう手遅れだ。

だが、パグフィは何事もなく上体を起こす事が出来、そのことを彼自身が一番不審に思った。

しかし、その疑問はリオレウスと目が合った瞬間に解決した。

リオレウスは何もせず、パグフィをじっと見つめていた。

いや、正確には“待っていた”という方が正しい。

大空の王たる高貴な火竜は自分に立ち向かう脆く愚かなハンターが無様に立ち上がるのを悠然と見下ろしながら待っていたのだ。

その光景を目にしたパグフィ……いや、彼を助けようと動こうとしていたジェインとクリフすら、その場で硬直してしまった。

その瞬間、パグフィは自分達が今のリオレウスに対し、いかに無力かを知ってしまった。

これが、彼が認めようとしなかった結論だ。

今の彼らでは、このリオレウスには勝てない。

リオレウス自身それを理解している。

だからこそ待っているのだ。

だからこそ、遊んでいるのだ。

自分を窮地に追い詰めた愚かなハンター達に後悔させるために。

もはやリオレウスにとって目の前のハンター達は“敵”ではなくなっていた。

それを敵対する者が理解してしまったのだ。

戦慄が走った。

パグフィは自分の体から戦意が抜け出るような感覚を覚え、顔から血の気が引きかけた。

その時、爆発音のようなものが彼の耳に聞こえた。

クリフが貫通弾を放ったのだ。

リオレウスの反応は早く、翼を駆使して後方に大きく跳躍してその攻撃を回避した。

「バカ野郎！いつまでそうしてる気だ！？死にてえのか！？」

「！！」

その怒鳴り声にパグフィは我に返った。

（そうだ、ここで呆然としてたところで死ぬだけだ！）

自分を鼓舞し、まだ全身に力が入ることを確かめる。

もしこの状況で「大丈夫か？」などと言われれば、逆に完全に戦意を喪失していたかもしれない。

パグフィが立ち上がると同時にジェインとクリフがその横に並んだ。

「ビビってんなら大人しく帰った方が身のためだぜ？」

クリフがパグフィを横目でちらと見て言う。

「ハッ、じいさんに言われたくねえよ」

「誰がじいさんだ!!」

「お？アンタ以外に誰かいんのか？」

「テ、テメエ……!!」

「あら、二人だけで楽しそうねえ」

軽口を叩き合っている内に三人は落ち着きを取り戻す。

予想通り、リオレウスは動かない。

策を練る時間をわざと与えているのだ。

（くそつ、舐めやがって……!!）

パグフィから先程の恐怖は消え去り、代わりにリオレウスに対する怒りがふつつと沸いてきた。

しかし、正面から立ち向かって歯が立たない以上、残された策は限られている。

大タル爆弾だ。

それが置いてある場所までリオレウスを誘導する必要があった。

勿論、それは簡単なことではないだろう。

既に空は雨雲が覆っている。今にも雨が降り出しそうだった。

（雨が降っちまえば大タル爆弾は使えねえ……！）

急ぐ必要があった。が、今三人が背中を見せて走り出そうものなら、リオレウスはそれを逃げたとみなして追いかけて、余興が終わったのだとばかりに全員を血祭りにあげるだろう。

奴は三人が必死にもがくのを望んでいるのだから。

『とりあえず作戦を伝えねえと』とパグフィは大タル爆弾のことを二人に話した。

簡単な説明を終えると、二人はまだ策があることに少しほっとした様子だった。

「んもう、そんなのがあんなら早く言いなさいよお」

ジェインがどこか安心した様子で言う。

この状況では全く策がないのと一つでも策があるのとでは大違いだ。

しかし、だからこそその問題もあるのだが…。

「奴がそんな時間をくれるなんて思ってたからな」

ちら、とリオレウスを一瞥^{いちへつ}してパグフィが呟く。

「つまるところ、足止めすりゃいいんだろ？」

「出来るのか？」

パグフィの質問にクリフは答えず、ライトボウガンをしまった。

「あら、アレを使うの？」

ジェインは理解したらしく、『珍しい』とでも言わんばかりにクリフを見た。

「こいつを持って来て正解だったな」

言葉の割にはどこか残念そうな様子のクリフが、背負っていたもう一つの武器を構えた。

二つ折りの状態だったそれをガチャと何か機械的なものを接合させたとわかる音をたてると、それは一つの巨大なボウガンになった。

しかし、通常のそれとは違う。

同じくらいのサイズのヘビーボウガンと呼ばれるものは確かに存在したが、これはそれとも違い、どこか近未来的な印象を受けた。

そう思わせたのは、これには弾倉らしきものが無く、代わりに半円形のもが一つだけ装填されていたからだ。

「デイルに作らせた特製品だ。出来ればこいつでトドメといきたかったんだがなあ」

残念そうに言ってその特製銃をリオレウスに向ける。

リオレウスも経験からかその銃が特殊であることに気付いたようだったが、さほど警戒した様子ではなかった。

「くらいやがれ!!」

引き金を絞り、カシュツと金属が擦れる^すような音を出して半円形の物体がリオレウス目がけて飛んでいく。

しかし、円盤のような形のそれはパグフィですら心配するほどに頼りなかった。

リオレウスも同じような印象を受けたのか、避けようという素振りを見せない。

だが、それが近づいたとき、リオレウスは初めて自分に向かって飛来する物体が何なのか気付いた。

咄嗟に回避しようとした時にはもう遅かった。

次の瞬間、突然その物体の周囲にバチバチと音をあげた電撃が巨大な膜のように張り巡らされた。

「グギヤアアアアアアアッ！！！」

突如展開された電撃を避けきれず、直撃を受けたりオレウスに強力な電撃が走り、苦痛に咆哮する。

「あれは…！？」

「シビレ罨よ。っていつても本格的な攻撃用にするために電撃の威力を増してる改造型だけどね」

ジェインが作りすぎたシビレ罨をどうにかできないかと思っていたときに考えたものらしいが、パグフィにそんなことがわかるハズもなかった。

「喋ってる暇なんてねえだろうが！走るぞ！！」

「…ああ！！」

パグフィがクリフの言葉に応じると、三人は踵きびすを返して走り出した。遠ざかる途中、パグフィはリオレウスの憤怒のこもった眼を見つめてしまったことを後悔した。

そう長い間走ったわけではないが、三人は息を切らし、それでも尚走った。

三人は今、丘から森の方へ走り、辺りを木々に囲まれた道にいた。

「まだか!？」

クリフが焦りと憤りの混じった口調でいい、パグフィを睨む。

「もう少しだ!黙って走れ!!」

そう言うパグフィも苛立ちを隠しもせずに必死の形相で走る。

背後にリオレウスの姿は見えない。

だが、先程あの憤怒のこもった眼を見たパグフィには追ってきている確信があった。

距離が離れているからといって安心は出来ない。速さでは差が歴然だ。姿が見えたならば、あっという間に追いつかれるのは目に見えている。

「なんで、そんなつ、遠くに置いたのよおっ!？」

ジェインが悲鳴にも近い声で問う。

「アイツがつゝ水を飲むためによく来るって、アイルー達に言われてたんだよ!!」

怒鳴りつけるように言って限界を訴え始めた体に鞭をうち、走る。

次の瞬間。

空間を震わせるほどの猛り狂った咆哮が木々を萎縮させた。

『来た…っ！！』

三人に緊張が走る。

背後を振り返ると、怒りをあらわにしたりオレウスが物凄い速度で飛来するのが見えた。

目的の爆弾はまだ見えない。

長い一本道が続く。

果たしてこの道を抜けるまでに追いつかれずにいられるだろうか？

その可能性を考えた三人は背筋に冷たいものを感じた。

もはや何かを口にすることもなく走る。

もうそれしか生き残る方法はない。

その時だった。

ポツリとパグフィの頬を冷たいものが触れた。

「っ！？」

雨だ。

その事を知った瞬間パグフィは全身からさっと血の気が引きそうになった。

(…いや、まだだ!！)

まだ雨は小降りで、これならばまだ問題はない。

だが、それも今の内だけだろう。

不安を振り払うようにひたすら足を動かす。

極度の緊張と疲労から心臓の鼓動が異常なまでに早い。

たったの十メートルを走るのが、その何倍にも長く永く感じた。

遙か遠くにあったりオレウスの姿が見る間に近づいて来る。

口の中が渴き、足に力が入らなくなってきた。

『もしかして』と、パグフィは刹那に過ぎていく景色の中、思った。

『もしかして俺達は誘導しているんじゃないかと、ただオレウスから逃げているだけじゃないか?』と。

背後から襲いかかるのはもはや“敵”と呼べる存在ではない。

ならば、何だろう?

“恐怖”だ。

自分達はその“恐怖”から逃れたいがために微かな希望を求めて必死に走っているのだ。

そんな考えが一瞬にして頭をよぎり、パグフィは気が付くと「違う！！」とかすれた声で叫んでいた。

（俺は、俺は……！ガンドウィルの仇を！リオレウスを倒すんだ！！）
リオレウスは“敵”。そして自分達が向かっているのはそれを倒すための“希望”。それだけが真実だと言い聞かせる。

そして……。

一本道を走りぬけ、木々の中に湖の見える広い空間に出た時、“希望”が見えた。

パグフィ達に残された、最後の切り札が。

まだこの作戦が成功したわけではない。

それでも、三人はため息でも吐ける状態ならば「助かった」と言っていたかもしれない。

それほどに安堵していたのだ。

しかし……。

次の瞬間、“希望”は壮大な爆発音とともに絶たれた。

リオレウスは聡明だった。

ハンター達の反応を瞬時に読み取り、視線の先にある普段そこにあるハズのない物を視認するやいなや、迷うことなくそれを破壊したのだ。

普通の飛竜ならば、いや、このリオレウスですら普段ならこのような判断はしなかったハズだ。

皮肉にもパグフィ達の度重なる策がリオレウスを慎重にさせたのだ。

雨が、爆発音を合図としたように降り出した。

“絶望”が降って来た。

「困難に直面したら、どうする？」

気がつくとしんの目の前には兄の姿があった。

兄は歳が離れていたが、そんなことを感じさせないほどしんに親しく接してくれていた。

しんはそんな兄が大好きだった。

だが、その姿はしんの記憶にある姿。まだ家を出て行く前の姿だった。

（これは…夢？）

それに気付くのと同時に、ここが幼い頃の自分の部屋だということに気付いた。

「困難？」

暖炉に火が灯った暖かい部屋の中、誰かが答える。しんだ。

いや、正しくは幼い頃の、だ。

首を傾げ、兄の顔を不思議そうに見つめている。

しんはそれを実体を持たない、いないハズの第三者の視点から見ていた。

「ん、何つうかな、こっ、どうしようもないほど困った時だ」

そういう兄が一番困ってそうだったが、幼いリンはその事よりも『困った時どうするか』を考えるのに一生懸命のようだった。

「に…」

幼いリンが何かを言いかけ、やめた。

リンはなんとなくだが、それが『兄さんにどうすればいいか尋ねる』というような内容のことを言おうとしたのだとわかった。

「ん？」

兄が少し困ったように首を傾げる。

「…」

幼いリンはまた考える。

そして、決心したように口を開いた。

「頑張る！」

両手の拳を握り、兄の顔を見つめて真剣な表情で言った。

それを聞いた兄は『そうか』と、笑った。

「本当に頑張れるか？どんな時でもだぞ？」

「うん！」

兄の質問に幼いリンは即答した。

「やっぱり、……は強いな」

嬉しそうに兄はリンの名前を呼んだ。

リンがその頃、呼ばれていた名前を。

懐かしくて、暖かくて、切なくて悲しい思い出の溢れてくる、その名前を。

その後で、『兄さんにそう言われるなら、私はどんな時でも頑張るよ』と幼いリンが思ったのを感じ取れた。

「なら、起きなきゃな」

兄の声に第三者の視点でそれを見ていたリンは『え？』と不思議に思った。

その声は幼いリンの方を向きながらも、自分に向けられていた気がしたからだ。

「お前は起きなきゃいけない」

リンも、幼いリンも「どうして？」とは問わない。

「なあ、……。もしお前が困難に直面したとしても、俺は助けてやれない。だって、それはお前の人生の、お前の問題だからな」

どこか悲しそうな表情で、兄が呟く。

「でも、これだけは覚えておいてくれ。もしお前が」

兄が何か喋るが、ぷつりと音が途切れた。

『別れが近いんだ』と直感的にリンは思った。

声は届かないだろうが、最後にリンは言った。

「どんなに困難でも、あたしは頑張るよ」

その言葉を発した瞬間、空気みたいな水の中から浮き上がるような感覚を覚えた。

誰かに起こされるようにしてリンは覚醒した。

『何か夢を見たような気がする』と思ったが、記憶が曖昧で思い出せなかった。

辺りを確認しながら、ゆつくりと身を起こす。

パグフィ達の姿も、リオレウスの姿も見えない。

だが、まだどこかで戦っていると感じた。

「っ…!？」

突然、激しい痛みに似た発作的な恐怖が全身を襲い、リンはうずくまった。

彼女は怯えていた。

逆鱗に触れられたリオレウスと目が合い、攻撃を受けた際に圧倒的な力の差を知り、一瞬でも死を感じたことが怖かったのだ。

親とはぐれた幼い子供のようにガタガタと震え、助けを待つようにじっとしていた。

（今、今なら…逃げられる）

リンは一瞬だけでもそんなことを考えてしまった自分を呪った。

だが、『助けに行け』という思いとは裏腹に恐怖は更に募り、重くのしかかった。

目に涙が滲み、唸りながら頭を抱えて荒い呼吸を繰り返した。

その時、ふと頭の中に“困難”という言葉が浮かんだ。

なぜそんな言葉が浮かんだのかわからなかった。

そして次に“頑張る”という言葉が浮かぶ。

“困難”に対して“頑張る”。

『なんて幼い発想だろう』とリンは思った。

しかし、その“頑張る”がとても力強く感じられ、勇気づけられた。

頭を抱えていた両手を胸にあて、深呼吸する。

呼吸を繰り返すうちに、手の震えが治まってきた。

（大丈夫…大丈夫。あたし、まだ頑張れる）

リンは心の中で自分を励ました。

ゆっくりと、少しずつだが、立ち上がった時には全身の震えは止まっていた。

その時、巨大な爆発音が聞こえた。

その音を聞いたリンは一瞬驚愕したが、それが何の音なのかを察すると迷わずその方向へ走り出した。

ガンドウィル…。

お前は騎士に憧れてたよな。

でも、俺達は貧しい村の生まれで、騎士になるための教育なんて受けられなかった。

だから、あるハンターが特例で騎士になったとき、お前は『ハンターになる』って言い出した。

俺には元々目標なんかなかったし、お前と一緒にいるのは楽しかったから、俺もハンターになることにした。

所詮お前ほどの意気込みがあって初めたことじゃなかった。

それでも、お前は『二人で騎士になろう』って言うてくれた。

その時初めて俺にも夢が出来たんだ。

『絶対、お前と一緒に騎士になる』って。

なのにお前はもういない。

もう二人で誓った夢は叶わない。

正直、これからどうすればいいかわからなかった。

ただ、俺達の夢をボロボロに破壊したこいつだけは許せなかった。

それが、このザマだ。

悪い、ガンドウィル。

お前なら『お前だけでも騎士になれ』って言うてくれただろうな。

ごめんな…。

長い道を抜け、そこにたどり着いた時、リンは必死に辺りを見回した。

降り出した雨に多少だが視界が遮られ、それが疎ましかった。

その中、ジェインとクリフが倒れているのを見つけた。

息は、ある。

確かめたわけではないが、体がかすかに動いたため、確信に近かった。

（パグフィは…！？）

辺りを見回す。

視界の中に、樹齡何百年と言われる大木に頭を押し付けているリオレウスの姿が映った。

最初の内は何をしているのかわからなかったが、リオレウスが二、三步後退ると、理解した。

その大木にリオレウスの頭部で押し付けられていたパグフィの体がずるりと地面に落ちた。

「パグフィ……っ!!」

リンは自分の声が震えているのがわかった。

その言葉にパグフィは返事をしない。

だらりと頭を垂らし両の手足を人形のように投げ出した形のまま、ぴくりとも動くことはなかった。

リンの中で、何かが崩れる音が聴こえた。

気が付くとリンはリオレウス目掛けて走っていた。

何か叫んでいたかもしれないが、衝動的だったためにリン自身も理解出来ていなかった。

リオレウスの脚にリンの右手に握られていた剣が突き刺さる。

ただ意表を突いたから、というだけではなく、そのリンのスピードは今のリオレウスの反応が追いつかないまでに素早かった。

火竜が苦痛に呻く。

これが逆鱗に触れて以来、初めて成功した攻撃だった。

が、次の瞬間には巨大な尻尾がリンの腹を撃っていた。

抗^{あらが}うことの出来ない強大な衝撃にリンは為す術もなく虚空を舞い、受身も取れず無様にも地面に全身を打ち付けた。

「っ…ああ…っ…！」

強烈な痛みが全身を襲い、それとともに押さえていた恐怖が溢れ出した。

（痛い……怖い……っ）

自分よりも戦闘経験がある三人が倒れたのに、一人で何ができるだろう？

そんな考えが頭をよぎる。

リンは痛む腹部を押さえて胎児のように体を丸め、痛みと恐怖を必死に堪えようとしていた。

『頑張る』

頭にその言葉が浮かんだ。

『頑張る』

何度も反芻する。

「頑張…る」

その言葉を口にする。

だからといって、全身の痛みが消え、力が漲るわけではない。

しかし、不思議と恐怖が薄らぎ、リンは涙を堪えて立ち上がろうとした。

『なあ、……。もしお前が困難に直面したとしても、俺は助けてやれない。だって、それはお前の人生の、お前の問題だからな』

無慈悲にも、リオレウスがリンに向け火球を放った。

『でもな。これだけは覚えておいてくれ』

雨の中でも全く威力が衰えることのない火球がリンに迫り、もはやなんとか立ち上がったところで回避出来るとは到底思えない。

『もしお前が自分じゃない、誰かのために頑張って、それでもどうしようもないって時は…』

それでもリンは諦めなかった。

全身の力を振り絞り、迫り来る火球を睨んだ。

『その時は…』

『その時は、きっと、俺が助けに行くからな』

爆発音が響いた。

黒煙が目前であがり、雨に流されるように消える。

火球がリンに届くことはなかった。

突如現れた人物がその攻撃を防いだからだ。

リンは目の前の人物を凝視した。

それが誰だかわかっているのに、その背中に兄の面影をみたような気がしていたのだ。

そんなリンを、まるでリオレウスが目に入っていないかのように“アッシュ”は振り返る。

二人の視線が交わった。

瞬きをするのも忘れたかのように、じっと見つめあった。

それはほんの数秒、いや、もっと短かったかも知れない。

だが、二人はそれがまるで時間が止まっているかのように永く感じていた。

ふと、リンは何か言い掛けた。

何と言おうとしていたのかは本人にもわからないが、何か言わないといけない気がしていたのだ。

が、アッシュも何か言おうとしているのを察するとすぐに口を閉じた。

当のアッシュはここに来るまでの間、リンに何と言うか考えてはいなかった。

それに、今この場で何かを伝えるには場違いかもしれない。

しかし、それでも彼に迷いはなかった。

きつと、これから紡がれる言葉こそが彼にとって今、伝えるべき本当の気持ちだから。

ゆっくりと、アッシュの口が開く。

「リン、ごめんな……。一緒に帰ろう」

真剣な表情だったアッシュの口から紡がれたのは、そんな日常的で陳腐な言葉だった。

いつもの、どこか頼りない雰囲気、どこか頼りない表情のアッシュ。

たまにする喧嘩の後のように、どこかバツの悪そうな表情でいう『ごめん』という言葉。

なんら変わらない、いつものアッシュだった。

この状況で、どんな名言を吐くのかと思っていたリンは拍子抜けした。

いや、リンでなくてもそうだろう。

『こんな時くらいカッコ良く決めなさいよ』

リンはそう文句でも言っ^てやろうかと思った。

だが、そう言おうと口を開いたものの、その言葉は出て来なかった。

アッシュの言葉がリンの胸の中で^{こだま}する。

その何気ない言葉が、飾り気のない単純な言葉が、じわじわと胸の奥に熱を持って広がった。

彼はこの言葉にどれだけの意味を詰め込んでいただろう？

それを考えた時、リンはその暖かさに気付いた。

いつしかリンはその顔をくしゃくしゃにして、涙を溢れさせながら何度も頷いていた。

そして、文句を言ってやろうとしていた口が、言葉を紡いだ。

うん…。一瞬に、帰ろう、と。

火竜は二人の様子をじっと見つめていた。

なぜそうしていたのか自分自身を不審に思ってもいたが、自分を前にして背を向ける人間のことの方がよほど不可解だった。

アッシュが振り返り、武器を構えた。

その吸い込まれるような蒼い大剣が、雨の中でも映えて見えた。

彼が自分に立ち向かおうとしているのだと知り、リオレウスは自分でも意識しないうちに牙を剥いていた。

圧倒的な力を持つ自分に何故まだ向かって来るのか、そして何故、自分はそれを脅威だと感じているのかわからなかった。

が、このとき火竜は確かに彼が、いや、彼らが自分にとって“敵”だと再認識したのだ。

その理由も理解出来ないままに。

それは、そうだろう。

本能のままに生きるモンスターには、わかるまい。

仲間が次々と倒され、それでも尚立ち向かう彼らを動かす、その源を…。

戦況は未だ変わらない。

彼らは特別な力を持つ存在ではないから。

雨は、止まない。

彼らは天候を左右するような、特別な存在ではないから。

それでも、もし神という存在があるならば、この時ばかりは彼らを賞賛しただろう。

強大な敵を前にしても決して諦めない彼らは、きっと…“愚か者”ではないから。

“勇者”は放つ。

最後の、開戦の合図を…！！

「さあ、いくぞ！オレウス……これが……最終ラウンドだ……！」

第10話　ちっぱけな勇氣（後書き）

はい、どうも。『あれ？消えた？』と思った方も多いと思われます。夢村です。

今回は書きたい話だったこともあって、かなり苦労しました。

まあ、実際何が書きたかったってアッシュの最後の台詞ですけど。

というかまあ、この話自体あの台詞が書きたいがために始まったようなものなんで、設定は行き当たりばったりでした。

なんでまあ、ぼろぼろと落としたものを拾うのが大変だったり、自分の実力の無さに落胆して放置したりと色々ありました。結局前者は適当になりました。

さて、穏やかな性格の持ち主のリンが一話で「ランポス狩りたい」と言っていると、ガンドウエルがガンドウィルになったり、文章の書き方が何度も変わったりと何かと不備の多いこのお話、もうお気づきの方もいるかと思いますが、そろそろ終わります。というかあと二話とエピローグだけです。

本人的にはまだ色々やることがあるのですが、そのことに関しては最後に書くとして。

後、この残る二話とエピローグは一気に掲載します。

でも例によって行き当たりばったりで落し物したのでまだ拾う方法を考えてないです。

そんなこんなでまた長い間更新しないことになりそうですが、ここ
まで来たら絶対に最後まで書きます。

なんか久しぶりで長文書きました。

とにかく、『この、小さな勲章を』を最後までよろしくお願いしま
す。それでは。

第11話 決戦

昼と思えないほどに薄暗い森の中。

雨を全身に感じながら、自らが放った戦闘開始の合図とともに、アツシユは駆け出していた。

リオレウスの反応が少し遅れ、先制をとったつもりだったが、彼は数歩駆けたところで即座にぬかるんだ地面を滑りながら停止した。

目にリオレウスの大木のような尻尾が鞭のようにしなりながら迫るのが映ったかと思うと、次の瞬間には轟音が響いた。

（っ、早い…!!）

昨日とは明らかにスピードが違うことを一瞬で悟る。

反射的にマカライトソードで受けたが、その勢いを殺しきれず地面をえぐる。

「だあああっ!!」

同時に、リンが火竜の死角から飛び出し、気合とともに高速の突きを放つ。

しかし、リオレウスはその攻撃に野性生物の勘といえる感覚で反応していた。

火竜はその巨軀をもともしない速度で回避。放たれた突きは虚し

く空を裂く。

攻撃を空振りしたリンは無防備だったが、アッシュの大剣を警戒した火竜は彼女を狙うことはせず、素早く前方に跳んで距離をとる。

「つつ…!!」

「リン!!」

翼による激しい風圧にリンが吹き飛ばされるが、土をぶちまけながら旋回するリオレウスの眼光はアッシュを捉える。

その瞳はもはや、自分の領域を侵されることによる怒りなど微塵もなく、あるのはただ目の前のハンターに対する殺意だけだった。

その眼光に動じることなく、リンが狙われる心配は薄いと感じたアッシュはすぐさま迎え撃つ姿勢をとる。

が、停止するのとほぼ同時に突進を開始した火竜のスピードは、彼の常識の枠を超えていた。

鈍い金属の音が響く。

「が…っ!!」

何とか防いだものの、ぬかるんだ地面では踏ん張りきれず、そのまま押されて大木に思い切り押し付けられる。

リオレウスはなおも頭を押し付け、アッシュの体を圧迫する。

「お・・・おお・・・っ!!」

渾身の力を籠めて押し返すと、不意に押さえつけていた力が消えた。突然のことにアッシュの体が前のめりによるめく。

（しまっ……!?!）

バキバキと木の折れる音が耳に届くが早いか、アッシュの脇腹に激痛が走った。

リオレウスは片足を軸に回転し、木をなぎ倒しながら攻撃を仕掛けたのだ。

地面に何度か全身を打ちつけながらもなんとか受け身を取るが、片膝についてその場で数回咳を繰り返した。

ほとんど無防備だったため、脇腹のダメージは動作に影響を起こしかねないほどだったが、嫌な汗を流しながらも極力考えないよう努め、すぐに大剣を構える。

（長期戦はマズいな…）

「アッシュ!」

「!」

アッシュが息を飲み、腰のポーチに手を伸ばした時、すっかり泥だらけになったリンが息を切らしながらアッシュの隣に並んだ。

双剣を構えたことから本人はまだ戦うつもりだろうが、しかし、彼女の体力は限界に近いはずだった。

その証拠に、荒い呼吸を繰り返し、雨のせいなのか、意識が朦朧もつろうとしているのかはわからないが、構えた双剣を落としそうになる。

にも関わらず、アッシュが来たことによってその表情にはどこか高揚しているのを見て取れた。

健気とも言えるその姿を見たアッシュは、居たたまれない気持ちになる。

極力、彼女の顔を見ずにアッシュは口を開いた。

「リン。…後は、俺に任せてくれ」

「え……？」

突然のことに、リンはすぐに反応が出来なかった。

何が起こったのかわからないような表情でアッシュを見つめるが、彼が彼女を見ることは無かった。

「…頼む」

リンはその言葉がどういう意味であるか察すると、同時に胸が締め付けられるほどの寂しさを感じた。

彼なりに気遣って言ったことなのかも知れないが、リン自身は自分が足手まといであることを認識せざるを得なかった。

アツシュは意識的に彼女の気持ちを考える事をせず、ポーチの中の“元々は三つあったが、残り二つになった瓶”の内、一つを取り出した。

現時点で彼は既にこの薬を服用していた。

（まだ…一つだけじゃ力が及ばないらしい…）

思いながら、アツシュは村長の言葉を思い出した。

「アツシュ、お主に“鬼人薬”の作り方を教えよう」

村長がそう言ってきたのは、数ヶ月前のことだった。

正確にはそんな台詞ではなかったはずだが、とにかく急なことにアツシュは呆然としていた。

夢遊病患者のようにふらふらと現れた老人は『いつか来るかもしれない時のために』と、明確な理由も語らず調査の方法をアツシュに伝授し、次に簡単な注意事項を説明し始めた。

「これを使う際に注意することじゃが、まず一つが“絶対に一気に飲み干さないこと”じゃ」

「はあ…」

何が何だかわからないアツシュは、しかし、ちゃんと村長の説明を聞いていた。

「この薬は服用した者の能力を飛躍的に向上させる。が、一気に飲んでしまうと身体がその力についていけずに身を滅ぼすことになる。小瓶に三等分に分けるのが良い。よく覚えておくことじゃ」

いつものアツシュならば、『そんなヤバそうな薬なんて願い下げです』と丁重に断っただろうが、この時の村長の真剣さが、そうはさせなかった。

「二つ目の注意は“少し時間を置いて飲むこと”じゃ。理由は先程と同じじゃな」

村長の言葉にアツシュが頷く。

「じゃが、実際にはさほど時間を空ける必要はない。身体がその状態に慣れるまで、ほんの二、三分ほどでいい」

さらにアツシュが頷くと、村長は続けた。

「そして最後の注意じゃが：“全て飲み干すという状況は避ける”」

その言葉に、アツシュがぴくりと反応した。

先程思ったことと同じ疑問が頭をよぎったが、辛うじて留めた。

「んむ、いささか脅しが過ぎたようじゃな。極力じゃ、極力」

そう言い直した村長の言葉に、アッシュが『そうですか』と言うはずもなかった。

『村長…』と軽く挙手して呼び、返事を待たずに質問をする。

「村長は、これを全て飲み干したことは…？」

「ない」

即答した後、村長は『じゃが』と続けた。

「“飲み干した者の末路”を知っておる」

その時、村長の口から紡がれた、その重苦しい言葉が“飲み干した者の末路”を暗に語っていた。

「まあ、それを無理に使う必要は全くもってない。使う際はよく考えてくれ。ではな」

その日、村長はそれだけ言うと身を翻して出て行った。

（あの時は『なんで俺に？』と問い詰めたかったが、今ならなんとなくわかる）

あの時、村長は既にアッシュのことを心から信用し、そして、こう

いった時のためにこの薬の作り方を伝授したのだ、と。

アッシュは即座に小瓶のフタを外し、一気に飲み干した。

そして、間もなく“力”は溢れた。

その代価を恐ろしく感じるほどの“力”が。

心臓の鼓動と共に全身に“力”が脈動する。

炎のような闘気が全身から溢れる。

同時に、彼は今の自分がかつてのガンドウィルと同じ状態にあることに気が付いた。

彼ほどのハンターでも、少なからず重く感じる大剣が嘘のように軽い。

その腕は全力で剣を振るいたがり、両足はその脚力の限界を試したがっているかのようにだった。

熟練の双剣使いが使いとされる“技の鬼人化”とは違う“力の鬼人化”。

単純な筋肉の増強などとは違う、例えようのない“力”が、自分の中で目覚めたことを、アッシュは感じていた。

一つ目の瓶の時と比べると想像を絶するほどの変化に、彼は少なからず恍惚ウツロイとしていた。

目を見開き、駆け出した数瞬、距離をとっていたはずのリオレウスの姿が目前に迫る。

アッシュはそのあまりの感覚の短さに一瞬物足りなさを感じた自分に気付いた。

身を裂かれる風の悲鳴を耳にしながら、鉄の塊と言える大剣とは思えないほどの猛スピードでの剣撃を連続で浴びせる。

突然の変異に、リオレウスにも少なからず逡巡があった。

火竜は受けに回るが、その反応速度も脅威的だった。

不意を突かれたにも関わらず、リオレウスは翼をまるで腕のように器用に使い、翼爪でアッシュの攻撃を受ける。

火竜の翼爪は、並みの武器では弾かれるどころか、折られる危険性もあるほどの硬度を誇る。

しかし、ディールが言うだけのこともあり、マカライトソードの切れ味は鋭く、その上に今のアッシュの腕力をのせた一撃は翼爪を難なく粉碎した。

その表情に驚愕の色が見て取れるほどに、火竜は怯む。

だが、それも一瞬のことだった。

驚くべきことに、火竜はアッシュの二撃目以降を見切り、地面と水平に放たれた大剣を後方へ跳躍して避け、間合いを詰めて垂直に振り降ろされた攻撃を人間がそうするように身体を最小限にずらし、

次々とアッシュの攻撃を回避した。

それどころか、ほんの数秒の後にはアッシュが隙を見せようものならば即座に反撃を繰り出すほど攻撃に慣れていた。

どちらも回避能力は凄まじく、一撃たりとも当たることはない。

その戦闘を見つめていたリンの頭の中に“この状況に似つかわしい、場違いな言葉”が浮かぶ。

“舞い”だ。

彼らは“舞っている”のだ、と。

生死を分かち戦いの最中、まるで示し合わせたように、踊るように攻撃と回避の動作を続ける。

その光景は実に幻想的なものに思えた。

だが、それは神聖であるとか、華麗であるという言葉とは結びつかなかった。

アッシュの一撃が大木を薙ぎ倒し、リオレウスの火球が岩を砕く。

直撃すれば即死に至るであろう威力をもつ一撃が破壊を生む。

だが、彼らを止めることが出来る者はいない。

常人では決して踏み込めないと思えるほどの荒々しい空気が、その場にはあった。

そんな中、リンは“舞う”アッシュの口元に笑みが浮かんでいるのを見て…戦慄した。

動作が速過ぎて正確に捉えたわけではないが、その横顔はこの戦闘を心から楽しんでいるように見えた。

アッシュは、最低でもリンの知る彼はこんな戦闘を楽しむような人間ではない。

（止めないと…！！）

発作的に、リンはそう思った。

しかし、抑制の欠片もない壮絶なこの戦いを第三者が介入し、止められるとは思えない。

いや、それ以前にリンは両足が震えて、彼らを止めようと一步を踏み出すことも出来ないのだ。

火竜の猛々しい咆哮に、リンが我に返った。

思考するよりも早く、視界を巡らせ、戦況を確認する。

実力はほぼ互角だが、双剣使いであるリン以上の速度で反撃の隙をほとんどつくらせないアッシュの方が少しだけ優勢だった。

リオレウスが、鬼人の如く繰り出されるアッシュの猛攻に一步後退る。

（もらった……！！）

アッシュは、リオレウスのわずかな隙を見逃さなかった。

大剣が地を滑走し、無防備な火竜の首を捉える……。

が、突如として、今まさに火竜の首目掛けて大剣を振るわんとするアッシュの身体が金縛りにあったかのように動かなくなった。

アッシュ自身、何が起こったのか理解出来なかった。

額から嫌な汗が流れる。

『動け』と念じるよりも早く、吐き気を催す^{もよお}ほどの疲労が全身を襲った。

気を抜けばその場に倒れこみそうになり、渾身の力で耐えた。

最初、鬼人薬の効果が切れたのかと思ったが、そうではないと気付く。

（まさか…強走薬、か……！！）

アッシュがここへ向かう途中で使用した、一時的に肉体の疲労を無視することの出来る強走薬。

その効果が切れた途端に今まで蓄積された疲労が彼にのしかかっていたのだ。

これは、普段こういった薬を使用しなかったために、効果が持続す

る時間と、その反動の大きさを知らなかったアッシュの誤算だった。

隙を突くはずが、逆にリオレウスにその隙を突かれた。

唸りながらその巨大な口腔を開く。

（まずい…！！）

この至近距離で直撃を受ければ跡形も残らない。

身体が否定する暇を与えず、火球が放たれるよりも一瞬早く動く。

至急距離で爆音が響き、超高熱が肩を撫でる。

「ぐっ…ああ…っ！！」

あまりの熱に気を失いそうになるが、気力で保つ。

（まだ…っ！）

薄れるというよりは落ちてしまいそうな意識に鞭を打ち、リオレウスの脇を抜けて後ろに回り込み、安堵してほんの少し気を抜いた瞬間に、今まで以上の疲労と脱力感がのしかかった。

このままでは一方的にやられるのは目に見えている。

そう考えた時、アッシュは自分でも気付かないうちにポーチの中にある、最後の小瓶を取り出していた。

村長の言葉が脳裏をよぎる。

迷いがないわけではなかった。

だが、じっくりと考えてる暇はない。

数瞬の内に、昔からあった自分の中の後ろ向きで考えすぎる自分が語りかける。

鬼人薬を全て飲んで大丈夫か？

強走薬も使った。

時間は？体は今の状態になじんでいるのか？

全ての行動を慎重に。失敗を恐れて行動をためらう自分。

うんざりだ。

その言葉が頭をよぎったかと思うと、次の瞬間…。

アッシュは鬼人薬を一気に飲み干していた。

その時、視界の端にリンの姿を見つけた。

もしかしたらこの薬の危険性に気付き、止めようとしたのかも知れない。

『だったら後で怒られるかな』と思いながら、アッシュは心の中でリンに語り掛けた。

（これが終わったら、また、この前みたいに皆で騒ごうな…）

更なる“力”の奔流が身体を巡った。

“力”を具現化した闘気が膨れ上がる。

リオレウスすら小さな存在と感じずにはいられないほどの圧力が、その闘気にはあった。

火竜がその存在を脅威と感じ、それを払うようにして牙を剥いて襲いかかった瞬間。

だが、完全な鬼人化を果たしたアッシュはそれよりも速く動くことが出来た。

一閃。

目にもとまらぬ速さで一撃を繰り出したアッシュは、大剣をぴたりと止め、攻撃を終えたままの姿勢で硬直していた。

一息ほどの間。

遅れて、思い出したかのようにリオレウスの右脚が吹き飛ぶ。

「が、は…っ！ー！」

バランスの保てなくなつた火竜が崩れ落ちるのと同時に、硬直したままだったアッシュが吐血し、方膝を着いた。

（外し、た……っ！ー！）

リオレウスは倒れ、苦痛の咆哮をあげながらも、血走った眼で目前のハンターを完全な殺意を籠めて睨む。

アッシュもすぐさま立ち上がろうとする。

頭にもう一撃振り下ろせば確実にとどめを刺せる。

だが、アッシュの体は動かなかった。

遠い。

彼の目には、今の光景がどこか遠くで起きていることのようなだった。

呼吸の息苦しさも、軋む体も、次第に何も感じなくなって来ていた。

（もう、限界、か……）

アッシュは全身から力が抜け、視界が薄らぐのを感じたが、彼の中に後悔はなかった。

片脚を失った火竜ならば、村のハンター達がなんとかしてくれるだろう。

彼は、ここで力尽き、村の危機を救った影の英雄として、ほんのわずかな間だけでも村長の昔話として語られるのも悪くはないと思っていた。

だが、その考えは数秒の後に消え失せた。

「アツシュ」

聞き慣れた声が名前を呼ぶ。

名前。“アツシュ”という名前。

（俺の…？ああ、“俺”の名前だ）

その声に、アツシュは夢から醒めたように彼女の顔を瞳に映した。

気がつけば、彼の隣にはリンの姿があった。

「アツシュ…！！」

リンの悲痛な声に『起き上がらなくては』と思うが、体が動かない。
全身の感覚がなくなりかけている。

「あたしと…一緒に、帰るんでしょ…！？」

「…っ！」

消えかける意識の中で、彼女の言葉はアツシュの胸に深く響いた。

（そつだ。帰るんだ。リンと一緒に…）

『たった数分前の約束を忘れるなんてな』と自嘲気味な笑みを浮かべて、不思議なほど自然にアツシュは立ち上がった。

その時、倒れた火竜が二人に向けて巨大な口腔を開いた。

アッシュは咄嗟にリンを突飛ばそうとするが、彼女は臆することなく、リオレウスを真っ直ぐに見据えていた。

爆音が反響する。

しかし、それは火竜から放たれたものではない。

むしろ、リオレウスの口からは苦痛の咆哮が発せられただけだった。

アッシュは、わけもわからず、リオレウスの片目を潰した物が飛来したと思われる、爆発音のした方へ顔を向けた。

「まあ、狙いバッチリね！」

「バカ言え！俺を誰だと思っでやがる！」

はしゃぐオカマと無愛想なオヤジ。

アッシュの視線の先には、火竜に片腕を折られたクリフと、彼の代わりにボウガンを構えるジェインの姿があった。

それでもアッシュを狙おうとするリオレウスに、続けて疾風の如く現れた影が火竜の腹部を突き刺した。

「どうやら、まだ俺はガンドウィルのところに行くわけにはいかないらしいな…っ！！」

陽気で楽観的なくせに、どこか堅実な戦士。

次にアッシュの目に飛び込んだのは、リオレウスの胸にガンランスを深々と突き刺すパグフィの姿だった。

彼は喋り終わると同時にトリガーを引き、零距离で爆発を受けた火竜の咆哮には、もう空の王たる猛々しさはなかった。

「皆……！」

不意に、アッシュは何故リンが動じなかったのかを理解した。

火竜の頭が二人の目前に倒れこむ。

まだ息があり、二人を睨む。が、それだけだった。

もはや抵抗が無駄であると悟ると、リオレウスは頭部を差し出すような形でアッシュを見つめていた。

それは、戦闘の終わりを意味する。

「アッシュ！」

パグフィの声が響く。

それに対しアッシュは頷いて返す。

言わずとも、やるべきことは理解出来た。

だが、今の彼には到底大剣を振り下ろすほどの力は残っていなかった。

「ねえ、アッシュ」

「…ん？」

友達を呼ぶ時のような自然な声に、アッシュもつられて至って自然に聞き返してしまっていた。

「手、貸したげようか？」

少し意地悪な笑みを浮かべて、リンが問いかける。

その笑顔が眩しいほどはつきり見えたと思った時に初めて、既に雨が止み、空には太陽が雲の隙間から覗いていることに気がついた。

「…ああ、頼む」

リンはアッシュの言葉に満足そうに頷くと、マカライトソードの柄を一緒に握った。

「頼ってね」

リンが呟くように言い、アッシュの返事を待たずに続ける。

「確かに、あたしは足手まといになることもあるけど…それでも、一人じゃどうしようもない時は、あたしを…皆を頼ってね」

顔を合わせず、リオレウスを見つめるリンに、アッシュは頷く。

「ああ」

答えてアッシュも火竜に向き、彼の目付きが変わる。

「いくぞ！リンー！」

「了解っ！」

二人が大剣を持つ腕に力を籠めるのを感じた火竜は、それでも尚、二人から視線をそらすことはしなかった。

ただ、最後に彼らを賞賛する言葉を持たないことを惜しむようにして、ゆつくりと、その瞳を閉じた。

皆がその場から動かなかった。

正確には、戦闘の終わりを知った者達は、皆その場に座り込み、その後は口々に勝利したことを呟いたり、全身の疲労を訴えていた。

アッシュとリンも、座ったまま長いことボーッとしていたが、不意にリンが立ち上がった。

「アッシュ」

「んー…？」

呼ばれ、アッシュがだるそうにリンを見る。

彼女はそれ以上何も言わずに、右手の防具を外した。

アッシュは最初、呆然とした表情で彼女を見ていたが、理解すると自分も同じように防具を外し、ふらふらと立ち上がった。

笑みを浮かべる彼女につられて弱々しく笑いながら歩み寄る。

頭よりも上に高く上げられたリンの右手を遠慮なく叩こうとして……失敗した。

アッシュは、リンの右手を見失い、視界がぼやけたかと思うと、すぐに周囲から音が消えた。

辛うじて、自分が倒れたことに気付いたが、それ以外はもはや何も感じなかった。

意識が深い闇に落ちていく中、泣き虫なリンがまた泣いたりしていないかが心配になった。

第12話 これから

「あだだだっ」

「ほら、やつぱりまだ休んでた方が良かったじゃない」

痛みを訴えるのはアッシュ。彼に対し、呆れた声を出すリン。

「アッシュちゃん、帰ったらゆっくり出来るんだから我慢しなさい」

リンの肩を借りて歩くアッシュの前で、ジェインが子供を諭すように言う。

「『もう大丈夫だから帰ろう』って言い出したのは、おめえだろっが」

そういうクリフは、アッシュの事など全く気に掛けていないようだったが、彼を知る者から見れば十分に気遣っている方だった。

……アッシュが倒れた後、皆が彼の元に駆け寄った。

皆が心配するなか、彼には息があり、倒れたのは過労によるものとわかった。

それから1日をテントで過ごし、今朝起きたアッシュは全身筋肉痛の状態だった。

「それにしても、お前、本当に大丈夫か？」

アッシュの隣で歩いていたパグフィが、訝し気に顔を覗き込む。

「なにが？」

「…いや、悪いけど、俺はてつきり、お前が死んだんじゃないかねえかと思っちまったよ」

パグフィは言った後で、リンから全力で睨まれていることに気付いて目をそらした。

「…ああ、確かに俺自身そう思ってた」

アッシュがそう口にすると、リンが今度は驚いたのか、悲しいのか複雑な表情になった。

そんな彼女を見て、『感情の豊かな奴だな』と思いつつ^{ほほえ}ながら微笑む。

「いや実際、腑に落ちない点もあるんだよ」

「…どんな？」

「俺は、あの薬の作り方を村長から教わったんだけど、村長は『全部飲むことは避ける』って言ってたんだ。だから、てつきり全部飲んだら死ぬのかと思ってた」

「！」

リンは、その言葉に驚愕したようだったが、彼女以外はそれほど驚いていないようだった。

「なんで、そんなもの……っ！」

今にも怒鳴り付けそうなリンに、アッシュは…

「…まあ、いいじゃないか、生きてたんだし」

と、笑いながら言うつと『よくない！』とリンから一撃をもらい、悲
痛な呻き声をあげた。

そのアッシュを珍しい物でも見るようにしていたのは、ジェインと
クリフだった。

「…なんだか、アッシュちゃんらしくないわねえ」

ジェインが言うつと、クリフも頷いた。

「てつきり、いつもみたく暗い顔して詫^わびるのかと思ってたがな」

「…俺、そんな感じの奴だった？」

誰にともなく放ったその問い掛けに、少しの間を置いた後、付き合
いの短いバグフィをも含めた全員が頷いた。

あまりの一致団結に反論出来なくなつたところで、ジェインが口を
開いた。

「でも、良い変化よね」

そう笑って、クリフが『だな』と肯定する。

するとアッシュは、今度はなんだか少し照れ臭くなって、結局何も言えないでいた。

それから少しの間歩き続けると、珍しくクリフが口を開いた。

「なあ、おめえら、逆鱗にまつわる昔話を知ってるか？」

クリフの予想通り、その質問に頷く者はいなかった。

「リオレウスとかの一部の飛竜には、逆鱗てもんがあつて、それに触れるとブチ切れちゃうんだとよ」

言われて、アッシュ以外は思い当たる節があつた。

「あの、明らかにリオレウスの様子がおかしかった時、やつは逆鱗に触れられてああなつたんじゃねえかと思う」

そこまで言つて、クリフは一呼吸置いた。

「だが、あのリオレウスは多分、今まで逆鱗に触れたことはなかったんだろうな。変化はあつたがぶちギレたわけじゃねえ」

アッシュだけが何の話かわからずに皆の顔を見比べていたが、クリフは気付いてないのか、構わず続ける。

「それじゃ昔話と違う。に、してもだ。もし逆鱗に変化をもたらす効果があるなら、あれに触れないに越したことはないってのは事実だ」

そこで、ようやくアッシュも自分が感じたリオレウスの違和感のこ

とを言っていることに気付く。

「で、だ。もし俺らが逆鱗のことを誰かに伝えるとしたら、昔話と同じようにぶちギレれて暴れ回るってような事を伝えた方がいいだろう？」

全員が少しの間考えて、頷く。

曖昧な真実を伝えて好奇心をあおるよりは、嘘でも好奇心がわかなくなるようにした方が良く考えたからだ。

「で、話は戻るが、アツシュ。村長が『絶対に飲み干すな』って言ったのは、それと似たようなことなんじゃねえのか？」

「……………」

言われて、アツシュは考えてみた。

鬼人薬がもたらす反動は彼自身が体験してわかっている。

飲み干したところで死ぬことはないとはわかったものの、だからといってこれから先、似たような、あるいはそれ以上の危機が押し寄せた時、その度に鬼人薬を飲み干しては、確実に身を滅ぼすだろう。

『そうさせないために、村長はあんなことを言ったのでは？』と考えると、納得出来た。

そう考えると、最初の瓶の時点でそう言える。

（それに、あの“力”…）

アッシュがあの時感じた“力”。

あの、何者をも超越したという錯覚すら覚えるほどの高揚感。

もう一度あの感覚を得たくなり、その誘惑に負けたのなら……。

どちらにしても答えは似たようなものだった。

「まあ、いいか。過ぎた事だし」

アッシュは言う。要するに考えるのが面倒になっただけだが。

「…そうだな」

それからは、疲労からか全員しばらく黙って歩いていると、いつの間にかアッシュと、彼に肩を貸すリンが最後尾になり、皆から少し離れていた。

（もしかしたら気を使ってくれたのか…？）

『リン以外、誰も肩を貸そうとしなかったのは俺の人徳がないからじゃなかったってことかな』などを考え、隣のリンに声を掛けた。

「何？」

リンと目が合う。

「…お前さ、これからどうするんだ？」

「どう、って？」

「ああ、いや、出て行けなんて言うんじゃないでな」

少し不安気に問い掛けるリンに、弁解するように言ってから、質問を続ける。

「お前がハンターになったのって、リオレウスを倒すためだったんじゃないのか？」

アッシュは直接リンにそう聞いたやわけではなかったが、リオレウスという名を聞いた時の彼女の反応を見て、そうではないかと思っていた。

そして、それを達成したのならば、もうハンターである必要はない、とも考えていた。

「リオレウスを……？」

リンは首を傾げて考えていたが、それを否定した。

「いや。確かにリオレウスに恨みがないわけじゃないけど。でも、あたしの目的は別。そんな事じゃない。それに……」

「それに？」

「色が違った」

「色？鱗のか？」

アッシュは『まさか』と思った。

大型のモンスターの中には、皮膚や鱗の色が違う、亜種と呼ばれるタイプのものがある。

そして、それらは本来の飛竜よりも戦闘能力が高いと言われていた。リオレウスにも亜種が存在し、鱗は青い色をしていると、アッシュは聞いていた。

「青だったのか？」

アッシュがおそるおそる尋ねると、リンは…。

「いや、銀色だった」

と、否定した。

「銀？」

はて、とアッシュは首を捻った。

（そんなやつは聞いたこともないな…）

「でも、いいの。それはあたしの目的じゃない」

アッシュの思考を妨げたリンは、どこか遠くを見るように言った。

「あのリオレウスに何か特徴があったわけじゃないから、どれがそうなんてわからないし…何より、復讐は…悲しいだけだしね」

「…」

その言葉にすぐには反応出来なかったアッシュは、かろつじて『そうか』と口にした。

きつと、この言葉をパグフィが聞けば、彼は頷くだろう。

それは、リオレウスを倒した後の彼に、どこにも満たされた様子が無かったことからわかりきっていた。

「あたしはね、人を探してるの」

「人？その人もハンターなのか？」

「うん」

「アッシュの目的は？」

アッシュはリンの探している人物の名前を尋ねようとしたが、その前に質問をされた。

「俺は……」

答えるのに少し間があったのは、先程の彼女の言葉のせいかも知れない。

「俺は、ある人のために有名になるんだ」

「ある人?...恋人、とか？」

「いや、会ったこともない」

「なにそれ、変なの」

「変、か。そうだな」

不思議そうに顔を眺めるリンに、アッシュは自嘲気味に笑った。

しばらく黙って歩く。

『とりあえず、今回はこれまでだな』とアッシュは思った。

お互い、これ以上質問すれば、必然的に“過去”が出て来ることになる。

そして、二人はまだ、それを語るのをためらっている。

焦る必要はない。少しずつ、知っていけばいい。

そう思っ、二人はその話を止めた。

「これから、ってことで思い出したけど、アッシュ。それ、どうするの？」

代わりに、とばかりにリンが問いかける。

「.....」

アッシュが嫌なことを聞かれ、苦い表情になる。

リンが『それ』といって指したのは、見事なまでに折れたマカライ
トソードだった。

無理な動きの中で何度も力任せに振るったせいか、最後の一撃と同
時に役目を果たしたかのように折れたのだ。

アッシュは、そのことを後で村長やディールに伝えることを思い、
ため息を吐いた。

更に、当然、武器がなければ狩りも出来ない。

「何とかするよ」

『早急にな』と心の中で付け足す。

「おつ、見えて来たな！」

先頭を歩くパグフィの声に、今まで黙っていたジェインとクリフも、
もうすぐ自宅でくつろげる事からか、雄弁に話しだした。

達成感からか、皆、遠足の帰りのような不思議な気持ちの昂^{たか}ぶりを
感じていた。

「あ、そうだ。アッシュ」

「ん？」

思い出したように言うリンに、どうしたのかとアッシュが顔を向ける。

しかし、それに彼女は返事をしなかった。

代わりに、防具を外した右手を高く上げた。

「昨日、出来なかったから、ね？」

友人に挨拶でもするようにして手をあげて微笑む姿に、アッシュも釣られて微笑む。

そして、彼も右手の防具を外し、リンの掌を思い切り叩いた。

ぱぁん。

周囲に響いた音に、前方を歩いていた三人が何事かと振り返り、アッシュとリンは何となく一緒にいたずらをした子供達のように笑った。

さあ、これから何をしようか。

アッシュは、そう考えることが楽しく思っていた。

エピソード

一日経って、俺達は集会所に呼ばれた。

リンと一緒に家を出て、他の三人とはすぐに合流した。

「お？なんだ、こりゃ」

「お祝いにしては少人数ねえ」

集会所に着いた途端、パグフィが首をかしげ、ジェインも言葉の割には興味深そうに辺りを見回していた。

少し広い酒場と同じ程度しかない大きさの集会所の中。

普段通り数人のハンターがまばらにいて、当然、受付嬢もいる。

ただ、普段と違うのは、集会所内の全員が、口々にアッシュ達を歓迎してくれたことだった。

更に、俺達の目の前に見知った顔が並んでいた。

デイルと二ナに、朝からいないと思っていたペケ、そして村長。

全員合わせても十数人程度。確かに祝い事にしては少ない。

「ふむ、そろつたようじゃな」

村長が一度、咳払いして二ナと一緒に歩み寄る。

そして、俺の前で立ち止まった。

その時、俺は初めて自分が先頭にいることに気付いた。

というか、何が起るか理解したらしい謙虚(?)な仲間達は一步下がって意地悪な笑みを浮かべながら眺めていやがった。

「リオレウス討伐の報告は受けたぞ。皆、よくやってくれた」

言い終わると同時に、集会所内にハンター達の野次にも似た歓声が反響した。

恐らく、彼らはたまたま居合わせたただけだろうが、待ちわびたことのように暖かい声を掛けてくれた。

調子のいい奴らとも思われるだろうが、ハンターというのはこんなものだ。

「アッシュよ。どうかこれを受け取ってくれ」

村長は二ナから小さなバッジを受け取り、俺に向けて差し出した。

それは村の英雄と認められた者だけに授けられると聞いていたそれそのものだった。

それに対し、『やめてくれ』などという言葉が俺の口から出ることはなかった。

昨日、あの戦闘が終わるまでの俺ならば、そういったかも知れない。

だが、今は違った。

村長からバッジを受け取る。

すると、辺りからまた歓声があがる。

俺はもう一度辺りを見回した。

村人総出ではないのは、今回の件があまり公になっていないことからか、村長の気遣いからだろうか。

「勲章ってやつだね」

俺のすぐ後ろでリンが言った。

「……勲章、か」

呟いて、その小さなバッジを見た。

「だな。小さな勲章だ」

だが、それを喜ぶ前に言っておかなければならないことがある。

「なあ、皆、聞いてくれ」

俺が口を開くよりも早く、声をあげたのはパグフィだった。

その口調から何かを察したのか、集会所の喧騒はぴたりと止まった。

「俺達は今、五人だけだよ…後もう一人いるんだ」

事情を知らない村長やジェイン、クリフは状況を把握できていない様子だったが、すぐに理解したような表情に変わった。

そしてそれは、職業柄か、集会所内の人々全員も同じだった。

「多分、あいつは遠慮するだろうけど、でも、あいつと一緒に戦ったのは事実だ。…良かったら、あいつのことも誉めてやってくれねえかな」

少しの間沈黙が訪れたが、それを破ったのは村長だった。

「そうか……。では、皆の者。今一度、彼ら六人の功績を讃えてやってくれ」

その言葉を合図に、集会所に盛大な拍手が響く。

皆、事情を察したはずだが、しんみりとした雰囲気にならないのは、本人のことを本当に考えてくれているからかも知れない。

俺は、その盛大な拍手がこの集会所内の人数では起こらないような大きなものだと思い付き、背後、集会所の入り口に振り向く。

そこにはいつの間にか、大勢の村人が集まり、歓声をあげていた。

これは、もしかしたら村長の計らいだろうか。

同じことに気付き、振り返っていた皆も驚きを隠せない様子だった。

「うおっ！いつの間にこんなに集まっていたんだよ」

「なんだか本当に英雄にでもなったみたいねえ」

「へっ、よっぽど暇なんだろう」

皆、口々に感想を述べるが、やはり言葉やしぐさで照れているのを感じる。

だが、俺には気恥ずかしさだとかいったものはなかった。

それは、勲章を受け取ったのと同じ理由だ。

今回の討伐は自分の力だけで成功したわけではない。

だから、この勲章や称賛は俺だけの為にあるものじゃない。

『勲章なんて俺には似合わない』なんて考える事は、むしろおこがましいほどだったんだと気付いた。

それに、何より

ふと、振り返ったリンと視線が合った。

彼女もこういったことに慣れていないらしく、何を言って良いのかわからない様子で、照れたような笑みを俺に向けた。

不思議なことに、こいつの顔を眺めていると、未だ会ったこともない女性の姿が浮かぶようだった。

そつだ。何より、俺の目的は有名になることなんだ。

長い間、忘れるようにして逃げていたが、これは新しく踏みしめる一歩になるんだ。

だから

例え、これが歴史に残るような偉業というほどのものでなくとも。

今、この時だけは…

誇ろつ。

この、小さな勲章を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5051c/>

この、小さな勲章を

2010年10月9日04時03分発行